
風の吹く場所

四方祐樹

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

風の吹く場所

【Nコード】

N3546C

【作者名】

四方祐樹

【あらすじ】

美術部員たちは夏休みと共に合宿へと向かう。だが向かった先では風の精と思しき原因で、様々な被害が出てしまつて……。人間たちに溶け込み生きている、風使いの少年たち。彼らが最後に見たものは……。2007年度ロマン大賞投稿作（選外）

序章 夏の扉（前書き）

『上毛かるた』（財）群馬文化協会
より、「紅葉に映える妙義山」を引用させていただきました。

風の吹く場所

序章 夏の扉

「え、合宿？」

むしむしと暑苦しい教室の中、大輔は扇風機を抱え込んでそう呟いた。

「ああ。合宿だ」

そう返すのは兄の耿輔。その表情は大人びた冷静さを湛えている。だが大輔を見てからというもの、少々引きつり気味だ。実に嫌そうなため息を垂れ流すと、耿輔は眉間に指を添える。そして耐えるように瞼を伏せると、手近にあった机へともたれかかった。

カタンと机と椅子の動く微かな音がする。それは虚しくも、夏の合唱の中へと消えていき。蝉は高らかにミンと鳴くと、どこか彼方へと飛んでいった。

周囲は田圃に囲まれており、今は緑の鮮やかな海が辺りを包み込んでいる。

長閑すぎて時間が経つのも忘れてしまいそうな、そんな群馬県も平野。高崎市内に点在する公立高校の一つで、それは起こっていた。終業式も午前中に終わり、浮かれ気分な学生たちが集う校内。

そしてここは美術部の活動場所。とはいえ今日に限っては、美術室ではなく一般教室だ。

現在地は二階ということで、眺めはそれなりにいい。だがそうはいつでも、さすがは田舎と言いきれる県だけはある。見たところで田圃と、遠くに関越道くらいしかない。

確かに反対側を見れば市街地だって市役所だって見える。けどそのギャップがなんともおかしくて、しかたがなかったりするのだ。余計に田舎を主張しているかのような、本当にそんな光景だったりする。高崎も外れなのだからしょうがないのだからうけど。

また中を見てみても、教室は何の変哲もないものなのだ。おつき

な黒板を前に、教卓と四十人分もの机と椅子が所狭しと詰め込まれているだけ。

黒板の横やら教室の後ろやらには色々と掲示物があるが、誰にも見られやしなかったりする悲しい存在だ。そういえば最近、各教室にやっと扇風機なんぞがつけられたりもした。

最初ばかりは天の助けと言わんばかりに、思い慕われていたんだ。扇風機も。

しかし一転、風があるからといったところで涼しくなんかならないと。むしろ生暖かい風の悪循環じゃないかと。そう時間が経たないうちにも生徒たちにとっては、もっぱら不評の嵐の火種と化してしまっている。

悲しいかな、クーラーとの性能の違いでもものすごい邪険にされてしまっていて。今となっては、文明の利器の足元にも及ばずといったところだ。

しかしそれでさえも、多少の涼しさは欲しいところ。それを一番よく示しているのが、あの大輔だったりする。

勿論それは例外なんかじゃなくて、休み時間ともなれば大抵の生徒たちが扇風機の取り合いをし始めるのだから、面白い現象だ。女子だって最近では女を捨てて、そこに参戦し始めるというのだから尋常じゃない。

そんな大活躍なのかそうじゃないのか……。という扇風機と戯れている大輔は、前髪を風に吹かれるがままに、重たい口を開いた。

「……合宿とかって俺、正直聞いてないんだけど」

ブーンという扇風機の羽音が、無駄に大きく聞こえてくる。

「そうだろうな。前に話していた時、確かお前寝てたし」

「うそッ」

「本当」

あっさりと告げる耿輔は頬杖をつきながら、気まずそうにふいつと視線を逸らした。

……冗談じゃねーよ、オイ。

すると不意に、ガタンと壮大な音が耳を突く。やっと大輔が扇風機を開放したのだ。……が、当の本人の顔色も、最早蒼白だったりする。

自分が寝ている間にことの次第が進んでしまっていたのが、どうにもこうにも寂しくて悲しくて。「え？ 俺一人ぼっちかよ」と大輔の表情がそう訴えていた。

そもそもそれ以前にだ。何でこれだけの人数がいても、誰一人として教えてくれなかったのだろうか。

寝ていたことは、確かに悪いとは思っている。自分に非があったこともちゃんと認める。だけど、いくら何でも酷いんじゃないのかと大輔は思うのだ。

「何で誰も教えてくれないんだよ！」

空気を揺るがすほど勢いよく立ち上がると、大輔は部員を一様に見渡した。

すると彼らは、やっと各々やっていったことから目をはなす。そこにはあからさまに『またか』という文字が浮かび上がった。……

ということほだ。大輔のこの行為がすでに一度や二度じゃないことは明白で。数人がやつぱり、気まずそうに視線を逸らした。

え。これってプチいじめなんですか？

「大輔。お前さあ、アホ？」

とか言いながら、慧哉きょうやは読んでいた本から視線を上げる。アホじやねえと大輔は、小さく慧哉に反抗したが、当の慧哉はまったく聞く耳なしだ。救いようがない。

「教えてくれないんじゃないよ。あえて教えないだけ」

「うわっ、ヒドッ」

「酷くないですー。これが美術部の暗黙の了承なんですー」

慧哉はからかうような間延びな声をあげると、再び本に視線を落した。これ以上は何も聞かねえと、態度がそう言っている。

大きな瞳を細めながら、あーそうですかと大輔は投げやりに言葉を吐き出した。

「で、どこに行くの。軽井沢？」

相も変らぬ態度の耿輔へと大輔は尋ねる。しかし耿輔は、んな豪華な避暑地に何で三流の部活が行けるんだよと呟いて。

「荒船山」

「荒船山って……」

鸚鵡返しに問い返しながら、大輔はほとんど空っぽの頭を捻った。群馬県は北側を見れば南西から北東にかけて、多くの山々が聳えている。

その西部に一つだけ、やけに平らな山があるのだ。それが確か荒船山だった気がする。山好きの父がよく、大輔を捕まえては山の話をしてきたのだ。

とは言っても、細かく教えられすぎてほとんどを忘れてしまったというのも、また事実。

いまいちよく解っていないことを察したのか、耿輔は大げさにため息をつきながら大輔に向かって言葉を投げつけた。

「妙義みょうぎの近くだよ。『紅葉に映える妙義山』の妙義」

「みよ、妙……義？」

大輔は眉間に影ができるくらい、深い皺を刻み込んだ。

妙義みょうぎって言ったらあれだよな。赤城あかぎ・榛名はるなと共に名高い上毛三山じょうまつさんざんの一つで。地元一の名物。上毛かるたの札にもあつて。ついでに言えば運動会なんかだと団分けの際に、大方緑だか黄色だかの鉢巻を巻いて区別されちゃうとかいう、あの……。

かなり聞き覚えがあるだけに、大輔の脳内には様々な記憶が飛び交っていた。

例えば真冬の寒い中、体育館でカルタ大会をさせられたことだとか。

小学校の持久走大会で緑の鉢巻をつけながら、でこぼこの農道を走ったことだとか。

運動会が近づくと、クラスが団ごとに妙な派閥を作っていたことだとか。

極めつけには運動会前に、一人残されて応援歌の練習をさせられたことだとか。

思い出が思い出なだけに、憂鬱な気分がいつそう高まった。うわー、いい思い出ないじゃん妙義。と、大輔は思わず動きを止めてしまった。

「日程は明日からな。んで下宿先は、山奥の空き家」

しかしそんな大輔の心情など露知らず。耿輔はさらなる事実を淡々と告げていく。

話によると、こうだ。

先生は来ない。あくまで部員だけの合宿である。移動方法は電車とバスと、原始的だが徒歩の三つ。そして極めつけに、空き家を借りると合宿中の食費等で部費は使ってしまったから、行き帰りの電車とバスの代金は自腹で払え、と。

部員たちの間で、ため息が行き交うのが嫌でも聞こえてくる。

「部費、ねえんだよ。三流部活だから」

そう言う耿輔の声は、嘲笑っているかのようだった。

一章 電車と田舎と山の中

さすがは県内一の駅だった。まだ朝も早いというのに、多くの人が、階段を上り下りしていく。

夏休みも初っ端の今日、合宿は始まる。

先に着いたのは、こっすけ 耿輔とだいすけ 大輔だった。兄弟だからか、否が応でも一緒の出発なのだ。

それにしても、こっすけ並んでいると。兄弟なのに二人はあまり似ていないのが丸解りだ。小麦色の癖のない髪と、淡い紫色の瞳。それくらいが唯一の共通点といっても過言でなからう。

ふわふわとした短髪に大きな瞳、愛嬌のある顔つきなのは大輔だ。高校生にしてみれば、多かれ少なかれ童顔の部類であろう。

だが耿輔はそれと相反して、男子にしては程よい長髪とそこから覗ききりつとした目元。整った顔立ちは、どこか冷静さを漂わせていた。

性格だつて無邪気な大輔と比べれば、冷静な耿輔とは月とすっぽんほどの違いがある。本当に髪と瞳の色以外に二人の共通点なんて一見なさそうだ。

なさそうなのだが、想像力で大輔を大人びくさせると、どこことなく耿輔に見えてきてしまったりする。ということはやっぱり、二人はれっきとした兄弟であるのだろう。血の威力とは恐ろしいものだ。

「なあ兄貴」

暇を持って余したような口調で、大輔は呟いた。

「何だ」

「……何で誰も来ないの？」

苛立ちを露にした大輔が、ぶすつとした声でそう言い放った。

だが大輔がそう言うのも誰も来ないのも、無理もないことだ。何しろ耿輔が部長だからという理由で、二人は集合時間の三十分以上も前に来ていたのだ。

それ故にまだ誰も来ないのも、まあ当然というべき結果なわけである。大抵人が集まるのなんて、集合時間の五分前が妥当なのだろうし。

「だから言ったでしょ。こんなに早く来ても、誰もいやしないって隣にいる耿輔はそう言われると、大輔の白い視線に睨まれた。オーラと視線が、やけに痛い。

耿輔は一度大輔の顔色を窺うと、ゆっくりと空を仰ぎ見た。

「なあ大輔。一番乗りってさ清々しいよなあ」

「人の話を聞けよ、アホ兄貴」

話し逸らすなコラと大輔が怒鳴るが、耿輔は「いやー。本当に清々しいね」と聞こえぬふりをする始末。

そんな兄の姿を見てか、それとも諦めてか。あーそうですかと呟くと、大輔は投げやりにもその場にしゃがみ込んだ。

天上からは容赦ない夏の陽光が照らしつけてくる。照りつける光は半端なくしつこくて、こんな朝っぱらにもかかわらず、アスファルトは熱気を放出し続けていた。

炙り焼きにされるかのような、そんな妙な錯覚に大輔は襲われ始めた。もしもこのままこんがり美味しそうなおいがしてきたらどうしようか。……など、ボーっとする頭の片隅でそんなくならないことを真剣に考えた。

眼前に広がるロータリーでは、忙しく車が往来している。本来はタクシー乗り場だというのに、そんな面影などまるで感じさせない。また一人、車から降りてきた。

じわりと額に浮かぶ汗を、大輔は流れる前に腕で拭い取った。汗はすぐには乾かず、けれど水分を得た腕はひんやりと冷たい。それでも少ない冷氣では、汗はとどまる気配を見せてはくれなかった。拭いきるまでの短時間で、またしても一滴浮かんできた。

肌がじりじりと焼けるのは、感覚で解った。隣にある影が僅かに動く。

はあ……と大輔は壮大なため息を吐き出した。だんだん頭を上げ

るのも億劫になってきた。しんどい。

あまりの気だるさにどうしようもなく、大輔は膝の上で組んだ腕にその顔を押し付けた。

視界は一気に暗くなった。頭がくらくらするような変な感じがする。さつきまでは「これでもか！」とばかりに曝していた腕からは、夏の暑さが嫌というほど感じられた。くっつけた額から、その熱が直に伝わってくる。額が冷たくさえ思えてきた。

相変わらず頭を焦がす陽の光は、ジリジリと音が聞こえそうなほど強い。悠然としているその姿が、だんだん腹立たしくさえ思えてきた。

ちくしょう、今からいつそのこと曇ってくれ。

大輔が頭の中でぼやいた言葉は、しかし天の神には通じそうもない。あとどれくらいこんがり焼かれるのかと思うと、それだけで眩暈がした。

別に俺、コギャルにもマンバにもなりたいわけじゃないのにな……。

あれ？ 男の場合はギャル男だったっけか？

正常が抜けきった頭で、くだらないことに大輔は体力を使う。そのおかげで、何に閉してもやる気が起きなくなっていた。

大輔は重たい瞼を必死になって上げた。木なんてたいしてありやしないのに、蝉は嫌味なほどに大合唱を贈ってくれる。まるで暑さに拍車でもかける、魔の呪文のようだった。

あの蝉全部が鳴きやんだら、体感温度は下がるだろうか。などと実に恐ろしいことを思うが、まったくもって想像できないのがまた辛い。夏の風物詩かと嫌気がさした。

大輔の頬に、また汗が伝い落ちる。

ああ。行く末俺も、食料品コーナーか……。

トレイに入れられてラップかけられて。何肉の隣に並べられるんだろう？

想像してから、それが妙におかしくて気持ち悪くて。けれど一体

自分にいくらぐらいの値段がつけられるんだろう。そう考えれば、それはそれで面白かった。

くくくと息を吐き出せば、肩が小刻みに震える。あー、焼肉だよ焼肉。俺肉で焼肉だよ、と。太陽光線に当たりすぎたのか、大輔はそれしか考えられなくなっていた。

「キモイ」

くつくつと笑っていた大輔は、しかし次の瞬間、背中に瞬間的な重さを感じた。蹴られたのだ、誰かから。

気付いた時にはすでに身体が傾いていた。

大輔はでんぐり返りの要領で、レンガ風味の地面へとダイブしていく。勿論頭部からだ。

人々の足音が瞬時に止まったのは、単なる聞き間違いなんかじゃないだろう。確かに通行人たちは、大輔のその無様な姿に驚きを隠せやしなかったのだし。一様にその呆気に取りられた視線を大輔へと注ぎ、立ち止まっていたのだから。

こういう場所で派手に転べば、こうなる。

結果が解っていただけに、大輔は恥ずかしさでいっぱいになった。また運悪くも、大輔の額は打ったがためにほんのり赤く染めてしまっている。小麦色の前髪で額が隠れているながらも、残念ちょうどよく見える位置をだ。

それにどうやら額を擦り剥いたようで、上っ面だけは白く皮が剥けている。

強い陽射しを受けると、痛さが少しばかり増した。苛立ちと痛みに、大輔は唇の端を引きつらせた。

痛ってー。と小声で言いながら、大輔はムクツと立ち上がる。それはまるで、どこぞのホラー映画にでも出てきそうな勢いだ。純度百パーセントの怨みこもったその念に、周りの空気を一瞬にして黒いものへと塗り替えてしまふ。それでも体感温度が変わることなどなかったが。

「慧哉くーん」

視線の先で藤崎慧哉は、何ごともなかったかのごとく澄ました顔で立っていた。

いつもより一トーン低い声で、大輔は唸り声をあげている。これは最早「怨むぞ、呪うぞコノヤロウ」と言っているも同然だった。

大輔は慧哉を下から睨みつけると、口端をひくつかせた。その双眸は狂氣的な輝きに満ち溢れていて。

「ざけんなや」

「るせえ、キモス野郎」

そのくせ呆気なくも大輔は敗退する。

文句あんのか？ と慧哉が眼飛ばすと、もう何も言わせてもらえない。氷よりも冷たい慧哉のオーラが、そう脅しているのだ。ことの全てが問答無用に終わらされた。

もう何が悲しいって、たった一言でことの成り行きが解ってしまったことだろう。これ以上の敗北感は、早々味わえない。……というやつだ。

認めたくはないけど、慧哉は外見だけで見れば、すごいモテる。

ダークブルーの髪は襟足が少し長く、唇は適度に薄い。また一ノ宮兄弟と同様、瞳の色は淡い紫色。尚且つ切れ長だ。長身の身体は程よい筋肉で引き締まっているし、ぱつと見モデルとかでもやっていそうな感じなのだ。しかも運動も勉強もできるから、引け目なんどこにあるう。今とは違い、完璧なオーラが常に放出されているのだ。

しかし性格はあっさりそのもの。スパツと言って、スパツと切る。あっさり美味しいキュウリの浅漬けなんかよりも、ずっとあっさりしているかもしれない。

大抵の女子は口数の少ないクールビューティーだとか言って、周囲からの評判も鰻登りに上々なのだ。が、それは結構大きな勘違い。みんな外面に騙されてしまっているだけで、本性ではああいう、氷の殿下なのだ。慧哉は。

大輔と慧哉は幼馴染であるから、嫌でもそういうことは知ってい

た。それに長く共に過ごしてきた分、大輔には解ったことがあった。奴には勝てない。

そうなのだ。これだけ一緒にいてもなお、大輔は未だかつて、口と体力の双方で勝ったことがない。常に今回同様、黙らされている。故に大輔は思うのだ。越えられない壁とは、案外近いところに存在しているのかもしれない。

ぶすつとした表情のまま、大輔は辺りを見回す。

そういえばもう、大方の部員は集まっているようだった。

階段の手前　　耿輔の左隣には、二年の城戸幸恵きじ ゆきえが立っていた。

腰の半ばまである長い髪を、下のほうで一つに結わっている。白を強調したワンピースの下に、栗色の七分丈のズボンといった恰好。おとなしめでちょっとおどおどした先輩らしい、そんな格好だった。そして耿輔と幸恵のちょうど前に、同じく二年の小池尋希こいけ ひろき。

眼鏡をかけたその顔は、秀才と幼さの両方をも少し出している。

長めの髪を風に躍らせる姿は、まるで彼の心を映しだしたかのよう。に穏やかそのもので。だが彼はこれでも一応、美術部の副部長にあたる人だ。

そして三年の一ノ宮耿輔に、一年の藤崎慧哉と一ノ宮大輔の計五人が、もうすでに集合している。

まだ集合時間までには結構あるというのだ。

どうやらこの部活には律儀な人が多いらしいと、大輔は頭の隅で勝手に解釈した。

あと残るは、一年の女子二人だけだった。彼女たちはマイペースといえはマイペースだが、けっしてスローペースというわけではない。きつとそれほどしなないで来るのだろう。

ともなればあとは、これから先のことを考えるのみだ。これから続く、長い長い共同生活へと思いを馳せて……。

やはりそれほどもしないで、ロータリー奥の歩道を走ってくる二つの影が見えた。

ストレートの髪はボブカットで、Tシャツと七分丈のズボンというちよつとボーイッシュな格好をした一人の少女　　樺沢真衣かはさわ まいが真っ先に駆けてくる。彼女は実際、性格のほうもかなり男勝りなのだ。そして後ろからはもう一人。セミロングの髪の上半分を、二つに分けて結わっている少女　　綾瀬美紗あやせ みさだ。蒼系統で統一されたワンピースとその結った髪が、駆けるテンポに合わせて靡き、ぴよこぴよこと跳ねていた。

彼女もまた見たまんまの、おっとりとした性格の持ち主だったりする。走るのもおっとりなのか、真衣との距離はどんどん開いていた。

「すみませーん！！　遅れました」

鞆がすっぱ抜けると思うほど手を振りながら、余裕綽々とも言うように真衣が駆け寄ってくる。

真衣の後から「ごめんなさい」と息を切らして、美紗がやって来た。合宿前から体力使ってどうするんだ？　と、そう思わせるくらい美紗はへろへろしている。

ピンピンしている真衣とは、天と地もの差がある様相だ。心配した幸恵と尋希が美紗の背中を撫でていた。

「大丈夫。遅れてねえよ」

「あ。マジツスか？」

耿輔の言葉を聞くなり真衣のパツと表情は華やいだ。そりゃよかつたと有り余る元気を出しまくっている。

一体その元気はどこに収納してあるのだろうか。溢れんばかりの体力は、美紗の体力と足して二で割っても、まだ余裕でお釣りが返ってきそうだ。

「まー、何だ？　とりあえずそろつたつてことでもいいんだよな？」

言うなり「ひい、ふう、みい……」と面倒くさそうに数える耿輔に、尋希が「全員いますよ」と付け加えた。

「ってことらしいから、一応出発すつぞ」

迷子になるなよー。と、一番迷子になりそうな耿輔が声をかける。

心配は確かに拭いきれないが、とにもかくにも合宿は第一歩を踏み出したようだ。

もう何があっても六日間引き返せないんだな。

そんな思いを胸に、一行は階段を上り、ホームへと足を向ける。

夏の陽射しは衰えることなく、この地を照らしていた。

一章 (1) (前書き)

『上毛かるた』(財)群馬文化協会
より、「ねぎとこんにゃく下仁田名産」を引用させていただきます。

風の吹く場所

一章 (1)

…*

「うわー、しくじったー……」

という大輔だいすけの聲が、妙に響き渡った。

プラットホームに来て、まだそれほど時間も経っていない。……
のに、だ。悲劇って何でこんなにもフレンドリーに訪れちゃうんだ
ろうと、大輔は心底不思議でならなくなる。

六人分のため息が、空気を振るわせた。

「部長……」

尋希ひろ希はどうしようもないくらい呆れ返り、吐息ともつかない声で
そう呟いた。他の者も口にさえしなかったが、同じことが言いたげ
な表情を顔いっぱい浮かべている。電光掲示板でんこうけいしばんを見ていた耿輔こうすけだ
けは、しかし取り乱すこともなかった。

だがそこに書かれていたのは ……

上信線じょうしんせん下り

下仁田したにだ行き十時三十一分発

現在時刻、九時四十九分。たった二分前に、前の電車は出発して
いた。

耿輔が告げた集合時間は十時。次が来るまでは四十分以上もの時
間がある。

何の誤算だ？ と頭を悩ませることは、実はなかった。

もとより耿輔が乗ろうと考えていたのは、九時十八分発のもの。
つまり彼が告げた集合時間と本来の集合時間を、一時間分間違えて
いたのだ。

耿輔はくるっと振り返る。その顔には焦りの一つも浮かんではい

ない。

「まあ長い人生、そういうことも無きにしも非ずだ」

浮かんでいるのは清々しいほどさっぱりとした、ある意味最悪のポーカーフェイス。それを向けると耿輔は、こともなげにさらっと言いやがった。

オイオイ。罪悪感はどこに忘れてきたんだ、お前？ と大輔は思わず、兄弟の縁を切りたい衝動に駆られてしまう。

「さあ、座ろうやここに」

とはいえ当の耿輔は開き直って椅子を叩いている始末だ。もう手に負えないよ、この人……。

六人分ものため息が再び空気を振るわす。

六人分の幸せが、どこか遠くへと旅立っていった。

…*…

待っている時間とは、途轍もないくらい長く感じられるものだ。

しかしいざ乗ってしまえば、そうでもない。これから起こるであろうことに胸を躍らせて、今や退屈もどこ吹く風だ。

一行は今、電車の中にいる。構内とは違いクーラーの効いた車中は、文句なしに快適だ。

彼らはまるで好奇心に満ちた子供のごとく身を捻っては外を見、数人を除いては落ち着きの欠片もなしに騒ぎ立てていた。

僅かな、でも心地よい振動が彼らを包み込んでいる。車窓から見える景色は時間と共に、その姿を次へ次へと忙しなく変えていた。

気が付けばもう、コンクリートのビル群は姿を消している。見渡す限りに田畑が広がり、民家が疎らにあるだけ。

真夏なのに、どこか涼しそうな雰囲気をかもし出していた。

すると大輔は小さく声をあげて、外を指差す。

その先には白い河川敷と 向こう側に大きな川が流れていた。

対岸にはさらに広い河川敷が広がってるようで、乾いた石がどこま

でも白く輝いている。

川は広く南北に果てなく続き、途中ダイヤ形の中洲が線路下に見えていた。

河川には数人の釣り人がすでにいる。キラキラと輝く水面の中へと竿を振り、糸をたらしでは魚を待つ。一人の竿が、弓なりに引いていた。

それにどうやら、釣りを楽しむのは大人ばかりではなさそうだ。いくらかは親子連れで来ているらしい。子供と大人の集団が遠くに見てとれる。

澄んだ川の流れ。河川敷に散らばる石の数々が夏の陽の元で、どこまでも穏やかだった。

「なあなあ。アレってどうやって中洲まで渡ったんかな」

すでに周りからの視線など気にもせず。大輔は窓にへばりつく勢いで釣り人を見ながら疑問の声をあげた。

「どうやってって、そりゃあ歩いてじゃないの普通？」

「でも川って結構深いんだよね。ああ見えて」

いい加減に推測を述べた真衣に、美紗は臃げな記憶を掘り返す。

確か中学の理科の授業で、先生が言っていたような気がするのだ。もしくは国語の授業だったか……。

曖昧なだけに美紗は少し不安になってきて「……多分」と窓の外を見つめながら、小さく付け加えた。

「だけど色が緑っぽく見えるところは、相当深い証拠だよ。太陽の光が川底まで届ききっていないからね。それにたいした深さじゃなくとも、この辺の川なら流れが速い。深さよりもそっちのほう危険かも」

落ち着いた声で、三人の向かい側に座っている尋希は答えた。彼らは一度尋希に尊敬の眼差しをやると、再度川へと視線を戻す。

確かに岸を離れれば離れるだけ、くすんだエメラルドは濃くなっていた。

あ、ほんとだ！ と大輔が感嘆の声を洩らした。さらに目を丸く

し、外を見つめる。

「アホかお前ら。んなことで一々騒ぐなよ」

嘆息し座席に深くもたれかかりながら、耿輔は彼らを半眼で見つめる。その声は呆れを凝縮した色が濃く浮かんでいた。

「大体群馬なんて田舎だろ？　ここに生まれて何で田舎に感動するんだよ」

「だってなんか、じいちゃん家に行くみたいじゃん」

「嘘ぶっこくな。うちのじいさんは、同じ市内に住んでるじゃないか」

「そうだけどさあ」

口ごもりながら大輔は思わず俯いた。

「だけどテレビでよく言うような風景って感じだし。気持ち懐かしい気分になるし」

だからいいんだよー、と捨て台詞を吐くと、大輔はまた顔を外へと向けた。

ふっと息を吐きながら耿輔は弟の姿を見つめる。

「なーにが懐かしいだ」

耿輔は首を回し、進行方向をぐっと見た。

「川を越えたら住宅街じゃん」

しかし小さな声は、大輔にまでは届かない。知っているからこそあえて、弟には言わないのだ。誰かの楽しさを奪うのは気が引けるから。

耿輔は軽く、瞼を閉じた。薄闇の中、カタタンカタタンと心地よい音が鼓膜を震わせている。

彼の隣に座っていた尋希は、幸恵ゆきえに顔を向けた。不器用な耿輔に勘づいて、互いに小さく苦笑する。

電車は川の上を、どんどん進んでいった。

あれからは結構、何ごともなく終点までたどり着けた。

何故結構が付くのかといえは、勿論大輔が騒いだからで。餓鬼か

こいつは……とそのたびに耿輔は頭を痛くしていた。

とはいえ、ここまで来ると乗客もほとんどいない。

おじいさんが一人、離れたところにポツリと乗っているだけ。一両編成でこれだけ騒いでも、おじいさんは何一つ嫌そうなる素振りを見せなかった。ただそれだけが幸いだっただといえよう。

そして電車はごんまりとした古めかしい駅で、全ての乗客を送り出す。車外は一步踏み出しただけでも十分暑くて。それでもこの空気は、山間部特有の涼しさを湛えていた。

駅員さんに見送られながら掲示の多い構内を歩いていく。狭い構内にドンと『ねぎとこんにやく下仁田名産』のカルタの読み札と取り札が、大きく飾られていた。おいおい、なんじゃこりゃと苦笑しながら外に出る。

すると長屋か昔の学校を駅にしたかのような、そんな感じを与え、駅舎が背後に見えてきた。出入口の横にはまあある時計と、違和感の塊としかいえない蒼い自販機が置いてある。時代の波に乗り遅れているような。そんな感じがした。

それに風呂でもあるのか、H形の煙突が奥で伸びている。

どんな駅だよ……と、大輔は胸中で呟いた。

眼前には駐車場が小さく両脇にあった。今のところ、車はタクシィしか止まってない。

それに駅前には道路があるのだが、交通量はほとんどなさそうだし、さつきからやけにお店のおばちゃんや近所のおじちゃんの姿しか見えない。店の前に集まって井戸端会議中のような。

学生とかいるのかと、いらぬ心配だが少し不安になってきた。

だってもう夏休みなのだ。それなのに子供の姿が窺えないとか、どうかと思う。って、そんなんでもない田舎に夏休みの初っ端から来ている自分たちもどうかと思うが。

画材やら着替えやらが入っている鞆の肩紐を、大輔はぐっと握りしめた。

ああ、羨ましいよ。高崎たかにいる友達。

それにしてもだ。着いてから気になってしかたがないのが、建ち並ぶ店先だった。

何か正直、古い。建築物もそうなのだが、何よりも見栄えが。どこか違う。それを具体的に言えと言われれば、それはそれで難しいのだが。あえて言えば駐車場がないし、店構えも昔ながらの民家の一階を利用したっていう感じ。

何かそうお目にかかれないっていうくらい、時代の遅れを嫌でも感じてしまう。

「おい、突っ立ってるな」

物珍しさに固まっていた部員たちを、耿輔の声が急かした。珍しいという呪縛から開放された彼らは、自然と早足になって耿輔の元へと駆けつける。

「十二時五分前だって、バス」

これまた古めかしいバス停とその時刻表を見ながら、耿輔は機械的に告げた。

「まだちよっと、時間があるな」

ケータイの時計を見れば、バスが来るまであと十五分ほどある。何をするにも中途半端な時間で、耿輔は最悪と呟きながらケータイを鞆にしまい込んだ。

耿輔はぐるりと辺りを見渡してみる。だが小さな店と民家くらいしか周囲にはない。それに店といっても、八百屋や布団屋などだ。

若者 というよりも主婦向けだろう。見た限りでは近場にコンビニ二さえもなさそうだ。

「しゃーねえ。今からじゃ特に何もできねえし。暑いけどここで待つか」

諦めを言葉にしながら、耿輔は隣にある休憩所へと入っていった。休憩所はちよつとした丸太造りの小屋みたいになっていて、見た目がなんとも可愛いらしい。よく見ればその隣にあるトイレも、同じような造りだ。

部員たちは小屋の中にあるベンチに腰を掛けると、バスの到着を

風の吹く場所

ひたすらに待ち続けた。

近くに見える山は青々としている。蝉の声は早朝の駅前で聞いた
のよりも、格段うるさかった。

一章 (2)

…*

農道がその割合を多くしていった。

道は緩やかな弧を描き、どんどん山の中へと進んでいく。次の景色が見えるたびに、乗客は身体を左右に傾かせた。

これからどこへ行くんだろう。

果てない期待とも焦燥感ともいえる感情が、大輔だいすけの中に芽生えていた。

行き先は、解っている。どこで何をすることも解っている。言伝でも何でも、関係なかった。自分の未来予想図が、そこには確かに描かれているのだから。

ただ描かれてはいても、それはまだまだ未完成品そのもの。レポートで言えば、予測立て。修学旅行や校外学習で言えば、ほんの調べ。

実際のことは何も解っていない。そういう段階なのだ、今は。

同じ県だと言ってしまえば、今まで暮らしてきたところと大差なんてないのかもしれない。近い場所とってしまえば、それで片付くことなのかもしれない。でも大輔にとって、知らない場所というのは全て同じようなものだった。

これがたとえ高崎たかさき市内の知らない店だったとしても。名前も知らないような国だったとしても。行くべき距離が違えども、それは鮮明な記憶となって植えつけられる。

今の太輔の心境としては、差し詰め修学旅行と何ら変わらないものだった。

見ることの感動。感じることの喜び。

過ぎて行く時の一瞬。離れていく故郷。

嬉しさと孤独が大人になりきれしていない心の中で、複雑に交じり

合っていた。

これから何をするんだろう。

窓越しに畑仕事をしているおじさんを見送りながら、大輔は考えた。

思えばこれだけの間家に帰らないのは、初めての体験だった。

今まではせいぜい、家を空けても三日程度。六日間も知らない場所で過ごすというのは、まったくの初体験なのだ。しかも今回は部活動での合宿。

中学では、合宿なんてどこの部活もやっていなかった。ましてや入っていたのが演劇部。やっぱり人数が少なく、部長はじゃんけんをして決めたくらいだし。発表も校内の文化祭でちょこつとやった程度だ。

思い返せばすごいルーズな部活だった。ほとんど帰宅部と変わらなかつたし、活動の一環と称して遊んでいたりもした。

文化祭が近づくと慌てて台本作って、結局上手くいかなくて。助っ人を呼んでから幼児絵本を丸暗記して、鶴の恩返しをやった記憶がある。確か鶴役は、初っ端から本気で畏にはまって怪我をしていた。舞台袖で、消毒液をぶっかけて包帯を巻いた記憶が残っている。それに比べたら、今はなんてマシなことか。確かに三流の部活で記憶の片隅に放り込まれている。けれど活動はきちんとやっている。何より今回だって、部員だけのサボリ合宿とは言ってもだ。風景画はきちんとか描かされるし、何よりその作品はコンクールに出すための物でもある。

どうせ何枚もデッサンだってするのだから、気なんて抜いてられないのだろう。それに当たり前だけど風景画以外にも絵を描かなきゃいけないのだろうし。……考えている以上にハードなのだ。

今は嬉しさより、気疲れのほうに圧倒的に勝っている。

長く深く息を吐き出しながら、大輔は座席に身をゆだねた。バスはまだ新しく、シートはしっかりと大輔を受け止めてくれている。

耳を澄ますと、女子たちの話し声が聞こえてきた。男子はさつき

からほとんど喋っていない。大輔が静かだと、やることなくなるのだ。

乗客の中には登山家の姿もあった。どうせここに来たのだから荒船山に登るのだろうか、彼らは大輔たちより手前のバス停で降りていった。

すると通る車の波に紛れて、ガゴガゴという低重音が近づいてくる。何ごとかと後方を見やれば、そこには赤いトラクターの姿があった。円錐形の編み笠をかぶったおじさんが、当然の顔をして運転している。

この県では一般道にトラクターくらい、珍しいものでもなんでもない。何せ高崎市内でも時たま目にする光景なのだから、結構スルーできるもんだ。……いや。さすがに国号十七号で目にした時は度肝を抜かされたけど。

ドアの閉まる抜けたような音がすると、バスは再び動き出した。どこに行くのだろうか。

大輔の頭は、その答えを求め続けていた。

…*…

降りてからは多分、三十分くらい歩かされた。辺りは駅があったところとは違い、緑の森と畑が両脇に並んでいる。時折見える民家は古い日本家屋ばかりで、どんな場所に止まるのかが怖くなってきた。

でこぼことした、草が生えていないだけの道を一行は突き進んでいく。頭上には緑のトンネルに覆われていて 小鳥と、やっぱり蝉の歌声に包まれていた。

しかし突然視界が開ける。長かった森はその場で姿を消し、見えてきたのは綺麗にされた民家だった。

家屋の周囲には竹で作られた垣根と、庭先に一本の木が生えていた。垣根のところにはドウダンツツジがいっぱい植わっていて、

その葉はまだ青く若々しい。春に来ていたら、綺麗な花が咲いていたことだろう。

耿輔^{こうすけ}は門扉に手をかけるとそっと開け、中に入ってしまった。みんなそれに続いていく。

借りていた鍵で玄関を開けると、耿輔は中へと足を踏み入れた。すると二畳ほどの三和土^{たたき}が足元に広がっている。

中は玄関から光が射し込む以外に光はなく、ぽっかりと口を開ける闇が続いていた。電気のスイッチがどこにあるのかも見当がつかない。

そんな中を耿輔は慣れた風にそそくさと歩んでいってしまった。入ってすぐ、左隣にある襖を開けるとそのまま姿を消してしまった。どうすればいいのか解らない彼らは耿輔に倣い、三和土で靴を脱ぐとそのまま襖の向こう側へと足を向ける。

部屋に入ってもそこは変わらず真つ暗で、何も見えなかった。奥のほうで小さな物音が聞こえてくる以外音もない。一体何の音なのだろうか。

すると突然、ガコンと一際大きな音がする。大輔は思わず肩をピクリと跳ね上げた。心臓がうるさいくらい、大きな音をたてている。何があつたんだろう。見えないながらも、大輔はすくんだまま視線を巡らせた。またどこかでガコンという大きな音がした。女子の小さな声が闇に響く。

ガコンガコン。

音は徐々にその間隔を狭めていく。最後に一度、大きな音があがった。重たいものを落したような、そんな鈍い音のように聞こえる。本当に何してるんだろう。ぐっと胸を掴むと大きな音はすっかり消え、変わりに光が足元に伸びていた。最初は細い筋でしかなかったそれは、徐々にその幅を大きくしていく。部屋は白光に包まれた。急な光に目を細めると、光の中に一つの影があつた。耿輔が突っ立っている。

どうやらあの音は仕切り戸を開けた音だったらしい。相当硬かつ

たのか、耿輔は両手をふるふると振っていた。

「はいはい皆の衆。突っ立ってるのも結構だけど、まずは換気しようや」

「そうだね。相当熱気がこもっているし」

耿輔と尋希しゆきの声に、みんなが荷物を降ろしだした。

「襖は開けたほうがいいんすか」

「開くもん全部は開けとけ。このままじゃ確実力ビる」

「耿輔さん。仕切り戸蹴破って……」

「ほーう、ならやってみるよ。マジでシメつぞ慧哉きよじや」

「冗談です」

「いいじゃん。一発シメられてこいよ藤崎ふじさき」

真衣まゐは言うなり、けらけらと慧哉を笑い飛ばした。

「まだ死にたくねえっての」

「いや、さすがに死なねえだろ」

反対の仕切りを開けようとしていた大輔は、すかさずツッコミを入れた。だが余計なことを言ったがために慧哉にぶたれてしまう。

朝方こけた時の傷が、ちよつと疼いて痛い。

「痛えよバカ！」

「痛いつてことは、生きている証拠だ。よかつたなあ大輔。お前一应生きてるぞ」

「つたりまえだつつの！」

「その足りない脳ミソも機能していたんだな」

「うつさい！」

確かに成績は慧哉ほどよくないけど、人並みだもん！

大輔は叫ぼうと思って息を吸い込むが、その前に頭が痛くなった。「痛ッ！」とかいう声が聞こえるが、まだ大輔は何も言っていない。

「ウゼエよお前ら。いっぺんへヴン見てくるか、オイ」

大輔は目をしかめながら顔を上げる。するとそこには、仁王立ちをした耿輔の姿があった。今しがた大輔をひっぱいたしたのは、耿輔で間違いないらしい。いや、あの物言いからしても拳の関節を鳴ら

しているの見て、まず確定としていいだろう。

それに正面では、慧哉が片膝をついて俯いている。後頭部を手でさすっている様子からしても、慧哉も一緒にひっぱたかれたようだ。ということは、あの悲痛な声は慧哉があげたものであるう。

やはり二人とも死ぬことはなかった。けれどその分、頭部は心臓を移植されたみたいにズキンズキンと派手に脈打っている。

そう。長男ゆえに、耿輔は手加減を覚えちゃいないのだ。大輔は兄弟だし、慧哉は幼馴染だからそのことは身にしみるほど、よく知っていた。

大輔の視界の中、耿輔の足が一步分寄ってくる。古めかしい床が、ミシツと小さな音を響かせた。

「……ああそうだ。ここの仕切り戸（ランスゲイト）開いといてやるからよお。ついでにお前ら一緒に旅立ってこい。なあに、遠慮するな」

うわっ、黒ッ！ この人、黒ッ！

さらさらになった血液が足元に堆積する。そんな気分陥った大輔と慧哉は、そろって喉から引き攀らせた声を洩らした。

「いいえ。もう滅相もございません」

「マジすいませんでした、親方！」

二人は土下座の変わりに急いで仕切り戸に向かうと、その硬い戸を開けにかかった。これ以上耿輔に話させてはいけない。本能がそう叫んでいる。

やっこの思いで二人が仕切り戸を開けた時には、もう全ての戸が開放されていた。時は一時を少々過ぎたばかりで、太陽はほとんど真上に昇っている。

とりあえず飯にしようと、女子が勝手口へと向かっていった。何と親切なことに、この家の主さんが食材を手配してくれている予定なのだ。

全員が台所に集まるのも効率が悪いので、男子は居間へと追いやられた。することのない残り組は、それぞれ好きなことを始めている。

まだ絵を描く気にもなれないし、だからといってじっとしているのも躊躇われる。ランプやウノは寝る前の行事と決められていたから、やらせてもらえないだろう。これからどこかへ行くにも、十分な時間がないし……。

何しようかと大輔は少し考えてから、不意に縁側へと出ていった。

さきほど死ぬ気になって開けた仕切り戸を隣に、大輔は足を投げ出してその場に座る。足は地面に付くか付かないかの、ギリギリのところをふらふらしていた。

景色を眺め見れば、遠くのほうに大きな入道雲がわいている。誰かが言っていたけど、本当に綿菓子みたいだ。白くてキラキラしていて、直視するとあまりの白さに目が痛くなった。その手前には来た時に通ってきた森が広がっている。見事に人家の一つも見えやしない。

田舎だな。本当に田舎だな。

元々田舎な県なのに、大輔はしみじみとそう感じた。

今は何もかもが穏やかそのものだ。勉強だ仕事だと、そういうことに振り回されることなんてない。

今まで忘れかけていたものが、緩やかに刻まれていく。一分一秒が、やけに長つたらしく感じられるほどに。

鳥が空を飛んでいく。風がそよそよと大輔の頬を撫でていった。

その心地よさに、大輔は思わずうっとり目を細めていた。何か途轍もなく安心するのだ。ずっとこうしていたい。そう思うほどに。

「……………」

大輔は言葉もなく、唇を動かした。風が少し揺れる。

ただそれも一瞬のことで、揺れた後は先ほどと何一つ変わらずにそよそよとしていた。大輔は口元に微笑を浮かべた。

「大輔」

「ふえ？」

振り返るとそこには、慧哉の姿がある。

「もう支度できたって」

そう言ってくる慧哉はいつもどおりの表情で。しかし最初、大輔は何のことを言われているのか解らなかった。だがそれが昼食のことを指しているのだと理解すると「ああ、うん」と微妙な返答を慧哉に返した。

よっこらせと大輔は立ち上がる。そのまま居間へと行こうかと思いきや、呼びに来た慧哉に、その肩をおもいきり掴まれてしまった。指が鎖骨との間に食い込むようで、すごく痛い。

「ちよっ、痛いつて慧」

「気を抜くなよ、お前」

「は？」

いつも以上に凄みのある声に、大輔は痛みも忘れて目を見開いた。ヤバイことでもしただろうか俺……。

「場をわきまえろ。 見つかるぞ」

大輔の耳元で囁くように慧哉は告げてきた。苦そうな顔を顔に浮かべると、慧哉はそのまま一人、居間へと戻って行ってしまった。

その意味を理解した大輔は、しばらくその場から動けなかった。

二章 この世に伝わる七つの神の話

地球はかつて、何も無い死の星でした。

生物もいなければ、水も空気もありません。

あるのはむき出しになった地表だけなのです。

宇宙には多くの神様たちが住んでいました。

ですがその誰一人として、地球に目を向けることはなかったのです。

死の星に命の灯火がともることはないのですから

地球は一人ぼっちで回っていました。

遠く見える星たちに思いを馳せながら。

けして救われることなどないと自嘲して。

長い長いあいだ、ずっと回り続けていました。

ある日のことでした。地球に一人の神様が訪れたのです。

神様は一度きよきよと辺りを見渡しました。

そこにはやはり、何もありません。

しばらくしてから不意に、神様は地球に触れると、こう言ったのです。

「あなたはまだ、死んでいないのですね」

地球は嬉しくてたまりませんでした。

そうなのです。地球はまだ、死んでなどいなかったのです。

ただ、他の星たちとちよつとだけ事情が違っただけなのです。

でも他の神様は、それに気付いてはくれなかったのです。

神様はにこつと笑うと、地球をそつと撫でました。

「でしたら……そうだ。あなたにいい物をあげましょう」

そう言つと、神様はゆつくりと臉を伏せます。

「気に入ってくるといいのですが」

神様は両手を天に伸ばしました。するとどういふことでしょう。

その両手に導かれるように、一人また一人と神様が舞い降りてきたのです。

まるで蝶々のように、その姿は美しく、軽やかでした。地球は見とれました。

それもそのはずです。今までここに誰かが訪れたことさえ、なかったのですから。

神様たちはくると天を舞うと、音も立てずに降り立ちました。彼らは一様に、長く白い長衣に身を包んでいます。そして男性とも女性ともつかない、美しい中性的な顔と声音を持っていました。

「私は運命の神。ここであなたと出会えたのも、きつと運命の悪戯でしょう」

最初に訪れた神様は、優しい声でそう言います。

「さあ、受け取ってください。私たちはあなたの命となりましょう」
七人の神様は、誰もがにこやかに笑っておりました。

この地球には、七人の神様がいます。

光の神様は、金色の瞳と髪を。

地の神様は、小麦色の瞳と髪を。

風の神様は、淡い紫色の瞳と髪を。

水の神様は、水色の瞳と髪を。

火の神様は、赤色の瞳と髪を。

命の神様は、淡い緑色の髪と瞳を。

そして運命の神様は、灰色の髪と瞳を持っています。

彼らはとても仲良しです。

そして始めて降り立ったその場所で、地球を見守りながら一緒に暮らしています。

しかしいつしか神様たちは、地球を守りきれなくなってしまうました。

地球は思いのほか、駆け足で成長していつてしまったのです。

神様たちは悩みました。どうすればいいのか、解らなかったのです。

だからといって、時間はそう長くはありませんでした。すると命の神様が言ったのです。

「私たちの子供に任せましょう」

神様たちには、子供がいました。それぞれの神様と同じ特徴を持つ、まだ小さな子です。

でも小さいとはいえ、彼らもまた神の御子^{みこ}。

普通の人間には持ちえない力を、確かに持っていたのです。

命の神様は、続けます。

「子供たちを人間界に送りましょう。そして、私たちでは無理だったことを、彼らに補ってもらおうのです」

「でも……それで大丈夫でしょうか」

光の神様は、心配そうな声をあげました。

「この子たちは人間と、あまりにも違いすぎる」

そうなのです。神様もその御子も、見た目からして人間とは違いました。

人間たちが持ちえないような色の髪と瞳が、何よりの証拠です。

しかし命の神様は、そつと瞼を閉じました。

「そのことなら、心配いりません」

命の神様は柔らかな声色で言いました。

たった一言「任せてください」と。

御子たちがその土地に溶け込めるよう、髪の色を変えました。

中性的な面立ちも、男女のそれに整えました。

そして彼らは人間界へと旅立っていったのです。

それからというもの、地球は再び平穏を取り戻しました。

今でも神様は、地球のどこかで暮らしています。

そして御子は遣いとして、地球上のいたるところで生活しているのです。

この世界にいる人間たちに紛れて、ひっそりと。

御子は今も、その髪は変わったままです。

ただ違うのは、その瞳の色だけ。

それが彼らの御子である証なのですから。

…*…

地球は人間と神の御遣い^{みつか}いで溢れている。

確かめたわけでもない。突き止めたわけでもない。

でもそれは変えようのない事実なのだ。

そして御遣いたちは、今もなお人間と共に日常を歩んでいた。

共に歩み、異変があればそれを正す。そんなふうに世界の均衡を

保ちながらの生活を、幾千年と続けて……。

それぞれはそれぞれの行くべき場所へと、移り行くのだった。

例えば上野^{こうすげ}の国・群馬には、光の神と風の神。彼らの御遣いの割

合が、圧倒的に多い。

何故ならば夏場は雷、冬場は空っ風という気候の特徴があるからだ。

人々は古よりそれら気候の被害に苦しんできた。しかしそれは、人の力ではどうのしようもなかった。

だから人々は、県内の各地に雷や風にまつわる寺院を建ててきた。

畏怖の心を形として残し、風神雷神と気候を崇め祀り、神の怒りを

静めるために。

気候は人には変えられないものだ。というのもそれは、人知の及

ばぬ神の管轄内なのだから。

だが不思議なことに、寺院で祈られたものは自然、神の元へと届いてゆく。彼らはそれを御遣いへと知らせ、そして現場へと足を運ばせるのだ。

光の神はその力で雷と太陽を、風の神は風を操ることができる。
だから彼らは移り行くのだ。それぞれの必要とされている場所へと赴くために。

この世界を、地球を守るために。

あの大輔も耿輔も、そして慧哉も。風の神の御遣い 風使いだ
った。

淡い紫の瞳が何より物証。

しかし彼らは、けっしてその存在を人間へと明かしてはならなかった。

何故なら彼らは人に類似し者であっても、人ならざる者。

人ならざる者が人間と交われないのは、自然界の道理。
覆すことのできない宿命。

彼らはどう足掻いても、その運命を変えることはできない。

彼らは神の血を色濃く告ぐ、神の御子。

それは人間とは相反する存在なのだ。

どうのしようも、最早なかった。

だから彼らは、人間には自分のことを隠し続ける。

彼らの責務に差し支えないためにも。

自然の摂理に則るためにも。

それは破ってはならぬ、絶対の掟なのだから。

だがもしもそれを破ってしまったとしたら、その時は

三章 力不足の風使い

昼食を終えると談笑をしながら穏やかな一時を過ごした。

しかし片付けは男子の仕事になっていたため、それも中途に引き上げる。女子がまだ話しているのを尻目に見ながら、男子はてきぱきと働き出した。

今日の昼食はそうめんだった。脂っこいものなんてないから、片付けはどちらかといえば楽な作業だ。食器をささつと洗うくらいでことは済む。

作るのには手間も時間もかかるのに、終わってしまったえばなんとも呆気ないもんだ。こんなにあっさり片付けてしまうのだから。

洗われた食器類を拭きながら、大輔はにわかになんかそう思った。

手っ取り早い、まるでバケツリレーのような片付け作業が続けられていた。慧哉きょぞが食器を持ってきて、耿輔こうすけが食器を洗って。それを大輔が拭くと、受け取った尋希ひろきが棚に戻す。一連の動きは滞りなく紡がれていくのだ。

しばらくすると、耿輔が最後の皿を渡してきた。ひんやりとしたそれを大輔は受け取ると、無心に水滴を拭い取る。皿を尋希に渡すとそのまま濡れた手も拭いた。布巾はやっぱり湿っていて、拭いてもたいして変わることはなかった。

「ねえ、何すんのこれから」

たたんだ布巾を流し台の脇に置きながら、大輔は台所を出て行く耿輔を目で追いかけた。耿輔は振り返りもしないで頭をぐしゃぐしゃとかき回す。

「自由行動でいいかななんて。どうせ何枚か絵を描くだけの日程だし」

そもそもサボリ合宿の異名を持っているものだ。決まった物を描くわけでもないんだし、それでもいいんじゃないの？ と居間に戻

りながら耿輔は吐き捨てるように言う。

そこにはすでにくつろいだふうの女子の姿があった。男子たちが戻ってくる。「何するの?」と同じことを聞いてきて、やっぱり耿輔は同じ言葉を返した。

「一応風景画は必須だから、それだけはやつとけよ。あの顧問、グチグチうるせえからな。ほとんど見に来やしないくせに」

そうなのだ。耿輔が言うように美術部の顧問は、ほとんど活動を見に来ない。だから自由奔放だと言えばそうなのだが、職務怠慢なんじゃないの? と常々思わされる。

勿論来たところで何か教えてくれるかといえば、そういうわけでもない。だから別に顧問なんてどうでもいいと、部員の誰もが思っているのだけれど。

だがそういう奴に限って人使いが荒いのも、また事実。

この合宿だつてそうだ。夏休みの活動計画を聞きに行った時、適当に決めておけと言われたのだ。

美術室は顧問に言えば開けてもらえるが、肝心の顧問があの性格だ。頼りになんてできない。だが嬉しいことに、この学校は合宿計画書を提出すればどの部活も合宿することを許可されている。

どうせ学校でできないなら、一気に合宿で片付けちゃえ! と、そんな魂胆から部長副部長の連係プレーで、即行に組まれたものなのだという。普段から部長に部活をまかせっきりなので、文句もなしに快く顧問は了承してくれた。

日頃からこんな調子なのだから、部員がどうでもいいと思うのはいわば必然なわけだ。

あんの禿ぴかジジイ、あとで覚えてろよ……という耿輔のぼやきが耳に届き、大輔は思わず苦笑した。

「でもまだ初日だしさ。宿題したきゃしてもいいし、寝たきゃ寝てもいい。迷子にならなけりゃ、とにかく自由な」

言うなり耿輔は、畳に寝転がっている。

おやすみと言う声は最後まで続くことなく、寝息へと変わってい

った。

…*…

大輔は真つ先に外へと飛び出していった。その手には筆記用具とスケッチブックを詰め込んだ鞆だけが持たれている。

軽い足取りは来た道とは反対方向　つまり家の裏側へと向けられていた。

丈の短い草が、空を覆う木々が、自分勝手に生い茂っている。道なんてものはなかった。そこを大輔は突き進んでいく。どこまで行こうかなんて考えてもいない。行けるところまでは行ってやるう。そう思わせるような勢いだった。

森の中は、やっぱり自然の物音以外はしてこなかった。蝉がうるさいはずなのに、やけに静まり返っているような気がする。澄んだ空気も涼やかそのもので、何か別世界に迷い込んだような感じだ。こつも徒広い場所にいると、自分なんかまるでちつぽけなもののように思えてしまう。

大きな木々の合間から、輝く木漏れ日が降り注いでいた。金色の水溜りが足元いっぱい広がっている。

大輔は駆けながら、小さな石ころを蹴飛ばした。すると石ころはぽーんと飛んでいって、音もなく木漏れ日の中へと転げ落ちていく。

しばらく森を突き進むと、一気に視界が開けた。　森が終わったのだ。

そこは奥に十メートルほどの草っ原があるだけの、なんとも寂しげな場所。その先はストーンと抜け落ちていて、足元も何もなくなくなる。　どうやら断崖のようだ。緑の絨毯の先で、ひゅうひゅうと風が唸り声をあげていた。

大輔はその光景を見ていたが、しかしそれ以上は進もうとしない。ただ開けた先を見つめるだけだった。小麦色の大輔の髪が、風に靡いて頬にかかった。

こくりと唾を飲み込むと、大輔は小さく息を吐き出した。その瞳に宿っているのは、悲壮とも畏怖とも感動ともつかない。多くの思いが複雑に、けれどつながりあいながら絡まっている。

頭の中では、どうしようもない過去の残像がちらついていた。

あの時の僕は本当に惨めったらしかった。今もたいして変わったとはいえない。けどあの時ほど自分が惨めで、どうしようもないバカだと思ったことはなかった。

幼い自分はいつも無駄に全力疾走だったんだ。それでいつも、どこかでバテていた。

ああ。本当に僕はバカだ。どうしようもないくらいにバカだ。

鼻で一つ笑うと、大輔はくるりと断崖に背を向けた。ひゅうひゅうという風の音が、少し小さくなる。

そのまま二・三歩歩むと、森が終わるところにある木に大輔は手をかけた。鞆の紐を肩にかけ、手馴れたようにすいと木によじ登っていく。枝に手をかけると、身体を滑り込ませるようにして枝の上に飛び乗った。

「……っこいしょっ、と」

断崖に面した側の枝に腰掛けると、大輔は子供のように足を投げ出した。そのまま空をかくように足をぶらつかせる。

やっぱり奥は断崖になっているようで、眼下には新たな森と川が見えた。民家らしきものはまったく目に付かない。またその奥にはもう一つの山がある。もしかしたらこの山よりも大きいのもかもしれない。大輔はふとそんなこと思った。

本当に長閑な場所だった。これほど人工物に邪魔されないところを、今まで目にしたことがあっただろうか。

今は呆れるほどに自然が広がり続けているだけ。時代遅れとか田舎とか、そんなのはもうどうでもよかった。ここには文明の利器はないけれど、変わりに人を安心させる何かがあったのだ。

アダムとイヴの住まうエデンの園も、こんな感じだったのだろうか。これだけ安心のできる、平和な場所だったのだろうか。

風がじゃれつくように、大輔の頬を撫でていった。

風は風使いのことがちゃんと解る。やはりそれは、聖なる力が宿っているからなのだろう。大輔はそれに答えるよう、風をそっと撫でてやる。風は嬉しそうに大輔の手へと擦り寄ってきた。

「ねえ、今日も練習につき合ってくれる？」

大輔が尋ねると、風は擦り寄るものから纏うものへと変わっていった。了承の合図だ。

「ほんと、どうもありがとね」

そう言つと大輔は、手を空に翳した。

だんだんと風が手元に集まってくるのを、確かに感じる。手袋をしているみたいに、ほんのりとした温かさに包まれていた。大輔は淡くゆつくりと瞼を閉じると、歌うように言葉を紡ぎだした。

蒼い空に宿りなさい

蒼い空に帰りなさい

空に宿りし風の民

元いた場所へ 帰りなさい

唱えたのは、基本的な外的風術 『淡い美空の下へ』だ。

大輔が薙ぎ払つるように手を一線振るうと、纏っていた風が鋭く宙へと放たれる。いわゆる鎌鼬のようなものだ。

もしも誤って触れてしまえば、流血どころでは済まされないだろう。人知の及ばぬ神の力というのは、それほどまでに強大なものなのだ。

今まで纏っていた風を失った手を、大輔は嬉しそうに見つめる。手に風がないのは、風術が成功した証だ。基本的だからたいしたことはないのだが、でもできればやっぱり嬉しい。

今なら何でもできるような気がして、大輔は再び手を天に翳した。

さあ こちらへおいでなさい

太陽の欠片を差しあげましょう
あなたたちに差しあげましょう
この手に宿る 温もりを
あなたたちに差しあげましょう

すると今度は、裸の手に風が集まってくる。召喚風術の一つである『導きの手』だ。

風は渦巻くように手の周りを駆け巡っていった。手が温まってくると、さらに強くそれを感じ取れる。

うっし！ と大輔は逆の手でガッツポーズを決めた。

今日は失敗することなんてなかったじゃん。すごいよ自分！

やったやったと浮かれていると、それが風にも伝わったのか。そよそよと柔らかく、風は大輔の腕を登ってきた。

「うあつ、ちよい待ちちよい待ち」

大輔は早口に止めに入った。だが風はまったく聞く耳を持たずとはしない。

どうしよう。これじゃあ関係のないところで、いつもの二の舞になっちゃおう。

大輔はそう思い、再度『導きの手』を口にした。それでも風は一向に鎮まる気配を見せようとはしない。

さわさわと木の葉が揺れた。

「あーっと、だばらっしやいッ！」

うっとおしそうに頭を振りながら、大輔は叫び声をあげた。「だばらっしやい」という山びこが勢いよく帰ってくる。

「待ってって言っとなんべえな、お前らあ」

落胆のあまりに肩をガクリと落すと、風はその動きをぴたと止めた。

あーあ、またやつちやつたよ自分。

心配するように寄り添ってくる風にも気付かないくらい、大輔は項垂れると宙をかく足を見つめていた。

なんとも言えない敗北感が、心の中で渦巻いていた。

大輔が一人前の風使いになったのは、中学を卒業してすぐのことだった。

その日は慧哉と共に呼び出された。慧哉とは幼馴染だからなのか、それとも昔からのつき合いからなのか。互いの家同士の仲はすごく良かったのだ。

だからかどうかは定かでないけれど、その時共に告げられたのだ。お前たちは、もう一人前の風使いなんだよ、と。

頭の中は嬉しさのあまり、真っ白になっていた。何も考えられないし、話さえも聞こえてこない。ただ一人前になれた。そのことがあまりにも大きすぎて、嬉しすぎて。有頂天になっていた大輔は一人前になれたということの真の意味を実感するのに、相当な時間を要した。

それもそのはずだ。何せ耿輔は大輔の兄であると同時に、尊敬すべき風使いであるのだ。

あんな抜けた性格をしていても、風術にかかれば大人も顔負け。久方ぶりの逸材だと耿輔は周囲からも賞賛されているのだ。それに比べて大輔はといえば、人並み以下。「お兄さんは……」といつも比較されては唇を噛んでいたのだ。

しかし大輔もこの日から、やっと耿輔と同じ位置に立つことを許されたのだ。これに喜ばないで一体何に喜べというのだろうか。

……だがそれも、ただの自惚れにすぎなかったのかもしれない。そもそもにして大輔は、慧哉とも耿輔とも根本的に違っていたのだ。二人が持っている『風使いとしての才能』というものを、大輔は持つてはいなかったのだから。

そしてそれは、大輔にダメージを与えるには十分すぎていた。大輔は一人前になれたとはいえ、まだまだ実力は半人前だった。練習をすれば、いつか二人に追いつけるはず……。

始めのうちはその楽天的に物事を考え、できると願って。何ごと

にもめげることにはなかつたのだ。

だがある日、大輔は気付いてしまったのだ。

いくら練習をしても、元から備わっている才能という壁には打ち勝つことができないのだ、と。

思えば出発地点からして、二人と大輔とはかけ離れていた。それは変えようのない事実で、どうもがいても変えることのできない真実だった。

一度は大輔も、風使いになることを諦めかけた。今だつてくじけそうになることはある。

それでも、開いている穴はこれ以上広げちゃいけない。穴はいつだって塞ぐために開いている。そう思いながら、たとえ扱わなければならぬ風にかかわれようと、大輔は必死になって練習をしているのだ。

そう。これ以上の差というものは、大輔にとって許されていない。半人前だろうがなりそこないだろうが、今できることを精一杯やるしか道はないのだから。

しかしそうと解っている反面、ただならぬプレッシャーというのも確かに存在していた。

風使いなのに、風使いとしての責務を果たせない。

周りとは引き離される一方の力量。

いつも貼り付けている笑顔の裏側で、大輔は迫り来る『差』というものを最も恐れていた。考えるだけで、足の震えが止まらなかつた。

大輔は大きく息を吐き出した。肺にある空気を全部搾り出すような勢いで、深く深く。

風が柔らかに、大輔の髪を揺らしていった。その風はけっして大輔の元を離れようとはしないで、寄り添うようにずっと大輔に付きまとっている。

「大丈夫、平気だよ」

大輔がそう言いながら腕を伸ばすと、風は優しく腕に擦り寄って

きてくれる。それは何だか慰められているような、元氣付けられているような気がして、大輔は思わず頬を緩めた。

ありがとうね。

胸が締め付けられるくらいに温かかった。か細い言葉を発すると、鼻の奥が何故かツンとして。大輔は一瞬、本気で泣くかもと思った。

三章 (1)

しかし涙は出る前に引いていく。

背後から何かが近づいているような気がしたのだ。

「……誰だ？ スーツと背筋が凍るような危機感が胸中に生まれる。大輔は咄嗟に風を解すると、一拍置いてからゆっくりと振り返った。

「……綾、瀬……」

何でこんなところにいるんだよ。家でみんなと絵を描いていたじゃん。それなのに

焦りと戸惑いとで、思考がなかなかまとまらない。掌はじつとりと汗をかいていて、ギュツと握りしめるとより鮮明に汗の感触がした。

それに大輔は責任転嫁にしかならないと知っていて、美紗が悪いことをしているように思ってしまった。美紗がここにいることへの戸惑いをぶつけようとしたのだ。

本当は慧哉に言われたように、こっちが場をわきまえなければいけない。正体を隠し通さなければいけないからだ。

それなのにこんなことを思っている。そんな自分が怖かった。大輔は息を呑んで美紗の姿を目で追った。

美紗は大輔のいる場所から数メートルほど離れた場所にいる。その歩みはカメ並みにのんびりとしていた。辺りを物珍しそうに見ているから、なおさらなのかもしれない。

荷物を小脇に抱えると、大輔は枝の上に立ち上がった。膝を軽く曲げて枝を蹴って。さらさらと木の葉が揺れる音が空気を揺らす。

身体はさつきまで戯れていた風に吹かれて、まるで飛んでいるような感覚が大輔を襲う。いや、実際に今は飛び降りているのだから、大差はないのだろうけど。

ストンと足が地面に付くと、恰好悪くも足がかなり痺れた。足の裏が脛が、電気を流されたみたいにびりびりする。けれどこけなか

っただけマシだと大輔は思い込んで、そのまま何食わぬ顔で美紗の元へと駆けていった。

「綾瀬！」

いつもの笑顔を顔に浮かべながら、大輔はぶんぶんと手を振りたくる。検索しながらな歩みだった美紗もさすがにこれには気付いた。美紗は胸の位置で控えめに手を振ると、まっすぐに大輔の元へと進んでいった。

「大輔くんもここに來てたの？」

「まあね。突き進んでいたら知らないうちに着いちゃったって感じだけど」

「実はわたしも」

えへへと二人は照れくさそうに笑った。一緒だねと言う美紗の声は、嬉しそうなのか恥ずかしそうなのか　もしくはその両方だったのかもしれない。大輔には全然解らなかったけど、ただ一つ自分の中に確信を見つけた。

美紗には風使いのこと、バレていないようだ。

もしも人間に正体がバレてしまったら、すぐに罰せられるとも聞く。だったら大輔はもう罰せられてもおかしくないはずだし、それに美紗にも動揺した感じはない。助かったという安堵感に胸が少し軽くなった。

これ以上不安になるのは、もうこりこりだ。

「で、大輔くんはもう構図とか決まったの？」

目ざとくスケッチブックを見つけた美紗は、好奇心に輝く瞳で大輔を見つめてくる。

「ううん。生憎まだって感じ。……綾瀬はどうなの？」

「わたしもまだまだ。どこでどんな構図で描こうかなーって、ちょっと下見に來たって段階だよ。まだ良さそうな場所には出会えてないけどね、木ばっかりで」

そりゃそうだろうなと、大輔は思った。この辺は森になっているのだ。木ばかりじゃなかったら逆におかしい。

「でもどうしよう。木漏れ日でも描こうかな」
美紗は振り返ると、明かりで斑模様になっている地面をそつと見つめた。

悩んじゃうよね、こういうのって。美紗はおどけながらもそう言っ
つて、大輔はそうだねと小さく頷いた。

「綾瀬にはあつてると思うよ。木漏れ日とかつて温かいイメージあるし」

「そうかな？」

「そうだよ」

大輔はこくりと大きく首肯する。

「綾瀬って優しいからさ、ぴったりって感じ」

「え……」

きょとんとした美紗の声が静かな森に響いた。それから大輔ははつとする。

自信満々に言いきってしまったが、大輔は今とんでもなく恥ずかしいことを言ったかもしれないと感じてしまったのだ。まるで告白しているみたいだ、今思えば。

しかたない。大輔は平気面を突き通すと「うん、そうだよ」と妙に納得した風を装って、無意味に空に目を向けた。

夏の強い陽射しが入ってくるのだろう。そう覚悟して見上げたにもかかわらず、大輔の目には明かりなど入ってこなかった。変わって見えるのは、さっきまではなかったはずの暗雲。

そついえばさっきから風が少し強くなっていた。山の天気は変わりやすいつて言うけれど、ここまで急なのだろうか……。

すると今度は、ポツリポツリと大粒の雨粒が降ってくる。それは等間隔からだんだんとどしゃ降りになってきて、仕舞いには遠くのほうで雷鳴が轟き始めていた。

冗談も大概にしてくれ……。突然の夕立に二人は度肝を抜かされて、呆然と雨空を仰ぎ見た。目薬なんかクソ喰らえと言いたくなるような雨粒が的確に瞳に入り、そのたびに目元を拭う。涙みたいに

雨水が頬を伝っていった。

周囲には叩きつける水音が響き渡っている。

大輔は思い出したように、美紗の手をむんずと掴んだ。

「綾瀬、戻ろう。風邪ひいちゃう」

「う、うん」

もう水溜りができかけている森の中を引き返していく。

駆けるたびにピシャピシャと響く足音は、ずれながら聞こえていて。それは下宿先に戻るまでずっとずっと続いていた。

四章 青空と共に包まれて

神様は言います。

『けて誰にも姿を明かしてはいけないよ』
とも。

『人間と交わりすぎてはいけないよ』
とも。

それは当たり前なことでした。誰もを守る、普通なことでした。けれどそれがどうしてなのか、知っている御子^{みこ}は誰一人としていないのです。

だってそれが、彼らにとつての当たり前なのですから。

ある日のことです。無邪気で幼い火の御子が言いました。

「ねえねえ、人里に出てみようよ」

それまで人里から離れた場所にいた彼は、ちよつとした好奇心に駆られていたのです。

一緒にいた幼い水の御子は、眉を顰めました。

「やめようよ、そんなこと。神様に怒られちゃうよ」

「大丈夫だって。そんな四六中、神様だって僕らを見ていられないはずさ」

しかし火の御子は頑として言うことを聞きません。うんそうだよ。きつと見ていない。言い聞かせるようにして、火の御子は頷きます。「それにね、人里は面白いものだって聞くよ。城下に出ればいろんな物が見られるんだ」

「城下って……余計に危ないじゃん」

「そんなに心配しなくて、平気さ。ようは僕らが御子だってバシなければいいんだろ？」

簡単なことさ。僕らが力を使わなければいいんだ。

燃えるように赤い目を輝かせながら、彼は言います。僕らがちょ

つと気をつけられればいいだけのことじゃないか、と。

「でも……お父とうに知られたら、叱ちられる」

「だったら言わなければいいんだ。お父たちだって、ずっと僕らを見ているわけじゃないんだよ。それにお父たちは城下にだってよく行くし。もしもバレたら、お相子だって言えばいい」

「ちよつと待って。お相子って言ったって、お父たちは仕事で行くんだよ？」

「知ってるさ。でもお父たちから城下の話を聞かされて、行きたくなるのが心情つてもものでしょう？ お父たちだけでそういう話をするのは不公平だよ。子供だって、知る権利くらいはあるはずさ」

火の御子は言葉巧みに意見を述べていく。

「知られなくなかったら、お父たちだって話したりなんかしないよ。なに、知られてもいいから話しているに決まっている」

首をすくめながら、水の御子は火の御子を見つめた。

「本当に行く気なの？」

「ああ、そのつもりだよ」

「そんなに城下が見たいの？」

「そりゃそうさ。ちゃんとこの目で確かめたいからね」

火の御子はそう言うと、水の御子の前に立ちました。

「ねえ、君はどうする？」

…*…

あんな雨なんてどこへやら。次の日も強い陽射しが地上を照らしつけていた。

調理と片付けは交代制で、今日は男子が調理当番だった。

気持ちいい睡眠から一変。大輔は何の前触れもなしに叩き起こされる。しかも本当に本気で叩かれて。

不満げに大輔が眠気眼を擦ると、今度は目の前にはなんか猛スピードで迫り来る足が見えてきて。うわヤベエよ俺。死ぬんじゃない？

とか、最高に最悪に目が覚めてしまったのだ。

危機一髪、寸前のところで大輔は難を逃れる。切れ味の良さそうな蹴りが鼻先を掠めていって、夏だというのに大輔の肌は粟立った。蹴りを入れようとした当事者の口からは「チッ」と舌打つ音が聞こえてくる。何がチッだよ！と文句を言おうとしたがそれも虚しく、大輔は台所へと拉致られてしまったのだ。

叫ぼうとしたら、女子が寝てるだろうと再び耿輔に頭をひっぱたかれたから。

「少ない脳細胞が、また一つ死んだな」

と言った慧哉の言葉は、あとで何らかの形で返してやろう。

大輔は秘かに心に誓った。

合宿だから早朝のラジオ体操でもするのだから……。とひやひやしていたが、耿輔に「んなかつたるいこと、一々やってられっか」と言われた。

つまりはそういうことなのだ。面倒くさいことはやる必要がない。実にこの美術部らしい選択だ。

朝食が終わると、早速自由行動となる。昼までには帰ってこいよ、と耿輔に言われるやいなや、部員たちは好き勝手に行動しだした。

大抵の者は道具を持つなり外へと飛び出していったが、耿輔はまた残る気満々だ。どっこいしょと柱に寄りかかると、もう本を手にしている。これが部長の行動なのだろうか。

「大輔」

さて自分も。と昨日と同じ物を持った大輔は、しかし耿輔に呼び止められてしまった。

何？ と言いなから振り返れば、手招きをされている。早くと急かされると大輔は耿輔の元まで走っていった。

「何なの？」

「使つなよ、絶対」

「は？」

「風術。お前昨日、使ってたろう。外で」
「え、……あ、うん」

言葉を濁すと、大輔は耿輔から視線を放した。力を使えば御子である者に、術を使っていることがバレてしまうことがある。どうやら力量の高い耿輔には、そのことがバレていたらしい。

ということももう、慧哉にも明かされているのだろう。慧哉も耿輔に劣るとはいえ、力のある御子だ。

血の気が引いていくのを大輔は感じた。

ヤバイ、どうしよう……。視線をどこに持っていけばいいのか解らない。

握りしめる掌には、じつとりと汗が浮かんでいた。

後悔先に立たずとはよく言ったもんだよ、ご先祖さん。まさにそのとおりだね。

自然と早くなる呼吸に気付きもしないで、大輔はそんなことを考えていた。

後悔か。するつもりはなかったのになあ……。考えた先から、大輔は思いつきり後悔をしてしまう。言い訳をしたい子供のように、きゅつと唇を噛んだ。

するとポンポンと小さな音が聞こえてくる。下を見やれば、耿輔が大輔に視線をやりながら、自らの隣を叩いていた。ここに座れ。視線がそう言っている。

大輔はされるがままに、耿輔の隣に膝を抱えて座り込んだ。視線の高さが一緒になると、さっきにも増して気まづく感じる。嫌だなと思うと、膝を抱える腕により一層の力が入ってしまう。身体は自然と縮こまろうとした。

「お前がまだ完全じゃないことも、だから隠れて練習をしていることも、俺たちはとつくに知っていたさ。力なんて個人差が一番出るところだから、しかたのないことだろうし。でもな大輔。こういうのもやっつていい時と悪い時って、やっぱりあるもんだ。今は自由行動を取っている。だから誰が近くに現れるかもしれない。……解つ

ているよな。今がどの状況であるのか」

耿輔の強い視線が、大輔を射止める。昨日言われた慧哉の言葉が、心の中にずしりとのしかかる。

今は、やるべきではない時だ。

解ったら余計に、申し訳ない気持ちになる。俯くと抱えられた膝小僧がふたつつ見えた。それは酷く小さいように感じられた。

「ごめん……なさい」

「解ればよろしい」

わざと偉そうに言うのと、耿輔はポンポンといつもととは違って優しく大輔の頭を叩いた。まるであやされているようにも感じたが、そんなのはもう、どうでもよかった。

「慧哉も気付いているかもしれないけど、とりあえず俺からは言っちゃいけない。それにあの態度からすれば、咎めようとは思ってないだろうだしな」

さらさらと夏の風が駆け抜けていく。畳のにおいが僅かに動いた。久しぶりに兄弟で馬鹿しないで話して。……なんか変な感じがした。でもその分、気持ちはいつもよりもずっと楽だった。

今は頭を撫てくれていて、ちょっと子供扱いされているような気もしたけど。そんなに悪い気分じゃなかった。それに耿輔の大きな手に撫でられると、妙に安心できるのだ。本当、考え自体がガキっぽいけど。

でも、たまにはこんなこともいいかななんて思った。

忙しないだけが日常じゃないもんな。

「ほれほれ。解ったなら絵でも描いてこい」

短かったのか、それとも長かったのか。

それさえ解らないくらい、ずっとそうしていた。しかしそれも頭をぐしゃぐしゃと撫でる耿輔の言葉によって、終止符を打たれる。

「いいか、一番上手いの描いてこいよ。ここまで来たら何が何でも一番だ」

「解った！ 解ったからやめてって！」

ぐしゃぐしゃにかき回された髪を押さえると、大輔はすくつと立ち上がる。気が動転しているあまり「あれ？ 道具どこに置いたわけ？」と足元にあるものをきよるきよると探してしまった。

画材を持ち準備が整うと、耿輔は見計らったかのように大輔の背中を蹴飛ばした。鈍い音の後、一步二歩とよるめき大輔は何をするんだと振り返るが、

「行ってこい」

滅多に見せない笑顔で言われた途端、その言葉も飲み込まれてしまった。

「言われなくつても」

微笑みながら、大輔は言う。

返した言葉はちよつとだけ気分がよかった。

さてどうしようか。

森の中を突き進みながら、大輔はそんなことを考えていた。もうここで風術を使えないのなら、するべきことが限られてくる。それに一応耿輔に見送られたのだから、絵を描くことは当然となったわけだ。がしかし、それをどこにするべきなのだろう。

踏みしめるたびに、草は微かな音をあげる。緑の濃い香りが、昨日の雨のおかげでより強く感じられた。

木漏れ日が落ちるところは、朝露に草が輝いている。スニーカーは朝露に濡れ、動かすたびに水が踊る。足元はひんやりと涼しかった。

あの顧問はコンクールに出す気は満々らしい。いきなりそんなことを言うのなら、普段もそれくらいのやる気を見せればいいと、大輔は正直思う。

だがそれも一瞬で、すぐさま大輔は首を左右に振りたくつた。いや、やめようそれは。顧問がぐーたらじゃないと、部員の幸せなひと時がなくなってしまう。それだけはなんとしても願ひ下げしたい。

あー、どうしよう。大輔はまたもやそう思いながら、スケッチブックに視線を落とした。

そこには確か、いつしかやったデッサンと静物画と　あとは秋の文化祭で使うであろうイラストが数点ずつしか描いていないはずだ。まだスケッチブックの半分もいつていないと思う。鉛筆書きだけなのに、どうしてこれだけの時間がかかったのだろうか？

大輔は考えた末に、それが自分が寝ていたことが大きな要因であることに気付いて、慌てて考えるのをやめた。

ヤバイヤバイ。マントル越えるまで墓穴を掘るところだった。とぼとぼとした歩みを止めると、大きく息を吸い込んで大輔は空を仰いだ。木々の間からはまばゆい夏の光が射し込んでくる。

そういえば今年になってから、一度も泳いでいないな。高校の授業には水泳がないからしかたないのかもしれないけれど。一度考えてしまうと、どうにも泳ぎたい衝動に駆られてしまう。

どうせ泳ぐなら、海がいいよな。などと、行けもしないのに大輔は想像ばかりを膨らませた。

空を仰ぎ、瞳を少し細める。まばゆいばかりの陽光は、それでもなお眩しい。衰えなどまったく見せてない。人間はすぐに老いるくせに、太陽は元気なままだよな。ずっと暖かな光を地上に降らせている。

深く考えてみれば、それはすごいことなんだなと大輔は思った。永遠なんてものはないけれど、それに似た時間を過ごしてきて、これからも過ごしていく。途方もないくらいの時間で正直頭はついていかない。けど、それだけの時間を確かに生きてきたのだ。

しばらくの間、大輔はその場から動こうとはしなかった。少しの間だけでもいい。この時間を何らかの形で感じたかったのだ。

ここにある全ての物を。

そして、この過ぎ行く時間を……

大輔は淡く開いた瞼を、そっと閉じた。辺りは眩しい暗闇に包まれる。

何でだろう？ 少しでも考えて、それからやっと謎が解けた。陽光が瞼を伝わって感じられるのだ。瞼を閉じているのに眩しいだなんて、なんかちよっと変な感じた。

ゆっくりと息を吐き出すと、大輔は瞼を上げる。そこには何にも変わらない緑の枝葉が飛び込んできた。

さて。行こうか。

当てを見つけた大輔は、その歩みを再会させた。

…*…

そこにはもう、先客がいた。

大輔は昨日来た断崖へと足を向けたのだ。しかし着いてみると、先に出発した美紗がそこで絵を描き始めている。

昨日の今日でさすがの大輔にも、気まずいと思うところがあった。いくら風術を使っているところを見られていなかったとしても、やはりそれなりの警戒心というものは持つものだ。

今日一日だけでどれだけ悩めばいいんだよと思いつながら、大輔は「さて、どうしたものか」と頭を二・三掻いた。勿論頭を掻いたところで、答えは出てきやしない。

とはいえ他に行くようなあてもなく、しかたなしに大輔は、のそのそと美紗の方へ歩み寄っていった。

「よーっす。ねえ、何描いてんの？」

平然を装いながら、大輔は美紗のスケッチブックを覗き込んだ。そこにはもう、大まかなデッサンがされている。

良くこれだけの時間で描けたもんだと、大輔は内心感心していた。しかしそんな大輔とは相反して、美紗はといえば一意専心。相当集中しているのか大輔が訪れていることにさえ気付いておらず、ぬっと現れた横顔に度肝を抜かしていた。

描いていたスケッチブックを慌てて隠そうとするものの、それも叶わない。慌てすぎた美紗は顔を真っ赤にして、スケッチブックを

前に踊っていた。……いや、本当は隠そうともがいていただけなのだが。

「はわッ！ だだっ、大輔くん。いつからそこに!？」

「え、ついさっき今しがた。……つか、もしかして気付いてもらえていなかった？」

訝しそうに大輔が尋ねると、美紗は真っ赤な顔を余計に赤くして頷いた。

やけに新鮮なりアクションをしてくれると思ったら、なるほど。

そういうことだったのか。

「あー。んじゃあ悪いことしたな」

「ううん、そんなことないよ。気付かなかったわたしが悪いだけ」

「でも、集中してたんでしょ？」

「そうと言えば、そうなるかもだけど……」

「だったら俺が悪かったって」

ほんとごめんな。そう言うで大輔は昨日登っていた木に歩み寄っていった。

「そうだ綾瀬。俺もここで描こうと思っただけだよ、いい？」

「いいと思うよ、多分」

「いいと思うって、なんじゃそりゃ」

けらけらと笑いながら大輔は幹に手をかける。それを見ていた美紗は目をまん丸くして、思わず身乗り出した。

「登るの？ 木に」

「うん。そのつもりだけど」

「だって道具とかどうするの？」

「これくらいだったら鞆にもちゃんと入ってるし。たいして苦じゃないさ」

現に大輔は昨日も、その格好で登っている。案外何とかなるもんだ。

「すごいね、登れるんだ」

だが美紗はというと、尊敬の眼差しを大輔に向けている。そうい

う反応にはいまいち慣れていなくて、大輔は途方に暮れてしまった
「んー……。綾瀬は登ったことないの？」

「体力がないからね。真衣ちゃんはしょっちゅう登っていたけど」
「樺沢が？」

「そう。中学頃までやってた」

確かに真衣ならやりかねないだろう。

何故ならこの美術部の中でもっとも活発なのが、あの真衣なのだ。
彼女だったら木登りくらいやってもおかしくともなんともない。き
つとやって見たのを見たって、違和感の欠片も感じられないのだろ
う。

大輔は想像して、思わず苦笑した。

「でもね、本当はちょっとだけ羨ましかったんだ」

「木登りが？」

「うん。いつも下から見上げているだけだったからね」

そうか。自分は登れるからそんなことは思わなかったけど、登れ
ない側からしてみれば憧れなんだよな。こういうのって。

大輔自身、風使いとしては下の立場だ。できないことに対して強
い憧れを持つというのは、誰よりも共感できる自信があった。

そっか和大輔は呟く。うんと小さく美紗は答えた。

「じゃあさ登ってみない？ 一緒に」

「え、でも……」

「心配すんなって。落ちたりなんかしないからさ」

「いや、そういうことじゃなくてね」

少し嬉しそうな でも怯えたような。そんな曖昧な表情をして、
美紗はかぶりを振った。

できないよ。美紗は小さく呟いた。大輔はそれでも頑なに美紗を
誘い続けた。

「ね、信じてみようよ。綾瀬自身をさ。きっとできるから」

にっと笑いながら大輔は美紗の手を取った。

「最初なんていつも怖いもんだよ」

だって、現に自分だってそんなもんだった。

一人前の風使いになると、今までと違って常に御子としての力が使えるようになる。それは一見便利そうだが、本当はすごい怖いことだった。

今までは家以外で力を使うことが禁じられていた。それは力の暴発を防ぐためであり、彼ら自身を守るためのものだったのだ。人間に見つからないようにと。

だが今は違う。異常があればそれを正しに行かなければならない。それは言ってしまうえば、いつも危険と隣り合わせの状態にあるというと同じなのだ。いつどこで人間が見ているかも解らない。そういう状況下に置かれているのだから。

しかし幼い頃の大輔はそれを知らなかった。中学入学と同時に認められた耿輔の姿を見て、いつも羨ましがっていたんだ。そうやって風使いとして立派にこなす兄を。

自分もいつか兄ちゃんみたいな風使いになる！

それが大輔の口癖だった。

いつか追い抜いてみせるんだからな！

できもしないのを知らないで、そんな宣言をいつもしていた。そのたびに耿輔は「お前が追いついてくるの、楽しみだな」と言ってくれる。それを本気にして、大輔は任務を任せられる日を待ち望んでいたんだ。

それなのに現実はず違った。

大輔が初めて任務へ行った時、その心には恐怖が渦巻いていた。今なら解る。あれは挑戦することへの恐怖だったんだ。

行き先は近所の神社。震える足で大輔は耿輔の後についていった。乱れる風が頬を撫で、背筋は何かが這ったようにゾクゾクする。平気かと聞かれても、大輔は強がって大丈夫と答えた。本当は大丈夫なんかじゃなかった。浮かれていた自分に嫌気がさすくらい、怖かったんだ。

結局その任務で、大輔は足手纏いになっただけ。それだけならま

だしも、風にからかわれて耿輔に怪我を負わせるところだった。

家に帰ってからは、親にこつ酷く叱られた。耿輔も勿論、冷たかったが確かに怒っていた。……けれど怒られて、正直よかったと思っっている。

だってそれを変えられるのは己しかいない。変わるうと羽をばたつかせなければ、現状なんて何一つ変わらないのだ。

大輔はもう、一步を踏み出していた。あの時失敗して次の任務は怖かったけど、怒られたことで自分の中で気持ちが変わった。浮かれるんじゃないくて、もっと頑張らなきゃって思った。力をつけていく。言うほど楽なことじゃないけれど、それでも着実に道は切り開かれていた。

だが美紗は違う。羽ばたく前から『できない』と自分に言い聞かせている。羽ばたくことをやめてしまっている。鳥が羽ばたかなければ飛べないのと同じように、気持ちかなければ何も変われやしない。でも美紗は、それにさえ気付いていない。

そんなのは嫌だった。やらないで諦めるなんて、そんなこと悲しすぎる。

四章 (1)

「な、綾瀬。ちよつとでもいいからやってみようよ」

すると大輔は美紗の返答さえも聞かず、先にひよいひよいと幹に登っていく。身長よりも少し高いくらい。一番低い枝まで行くのは、たいした時間もかからなかった。

片膝を枝に沿って付くと大輔は鞆の肩紐を腕に通し、袋の部分を背負うようにする。そのまま屈みこむと、大輔は下へと手をさし伸ばした。

「さあ、登って」

「……………」

「大丈夫、何かあっても絶対落さないつて。鬼部長に誓う」

心配そうな眼差しの美紗に、大輔は冗談交じりに言った。

あのバカ兄貴、キレると本当に怖いんだぜ。いつもドジるくせにさ。いつものお返しだと言わんばかりに、大輔はおもいきり言っただった。

ほんと、世の中つて理不尽だよねえ？ 大輔がおどけたように言うくと、美紗はきよとんとした顔をほころばせた。

「わたしにも、登れるかな？」

「登れる登れる。綾瀬なら余裕だつて」

「根拠は？」

「ない」

「なにそれ」

満面の笑みを浮かべると、美紗は大輔の元へと近づいていった。その足取りは先ほどとは打って変わって、花畑を駆けているみたいに軽い。風が吹くと、美紗の髪はさわさわと靡いた。

さあ。大輔がギリギリまで手を差し伸べる。ちよつと苦しかったけど、大輔は何ごともないかのように笑ってやった。

「落としたら鬼部長に言うからね」

美紗はそう言いながら、木の根元で立ち止まる。

「あはは……。一応覚悟だけはしときます」

緊張させないようにと、大輔はえへらと笑いかけた。それを見ると美紗は「本当に覚悟してよね」と悪戯っぽく言ってくる。これが本当だったらちよつと嫌かもしれないな。大輔は内心で苦笑した。

柔らかな木陰の中、美紗は気持ち固めているようだった。今はもう、笑顔ではなくて初めてのことに對する緊張の面持ちだ。

その感覚が伝わってきて、大輔も思わず緊張してしまう。この場に不似合いなくらい、蝉が四方八方で鳴き続けていた。

美紗は一つ息を吐き、片方の手を幹にかけると何とかして登ってみようと試してみる。だが何度挑戦しても、大輔のようにすると登ることはできなかった。

初めてだったし元々できないと思っていたけれど、やはりできないとそれなりに辛い。

掌にはざらざらとした幹の感触が残っていないかった。本当にこんなところに登れるのだろうか、美紗は眉をしかめる。

「綾瀬。幹に窪みとかある？」

悪戦苦闘している美紗に大輔は声をかけた。美紗は一度動きを止めると、あるみたいと返してきた。

「だったらそれに、足をかけてみて。多分登りやすくなると思うよ」

「かけるって、どうやって？」

「つま先だけで登るみたいな感じかな。幹に沿って、慎重にね。焦っちゃ駄目だよ」

大輔に言われたとおり、美紗は幹にある僅かな窪みにつま先をかける、力を入れた。すると身体がふわりと面白いくらい持ち上がる。さっきまでびくともしなかったとは思えない。

目をまん丸にしながらも美紗はもう一歩踏み出してみる。身体はまたスツと上へと移動した。

「わたし浮いてる！」

「な。できるって言っただろ」

まるで自分ができた時みたいに大輔は胸を張って言い切った。

その間にも美紗はまた一歩分、登ってきていた。慣れてきたのか、その足取りはもうすっかりとしている。あっという間に美紗は大輔のいる枝へと近づいていた。

「ほら手エ出して。こっちに引つ張るから」

大輔は手を美紗の近くへと差し出した。足元に気をつけるんだよ。言つと美紗は蚊の鳴くような声で頷く。

そろりそろりと美紗は片手を放した。その手は今までにない緊張で、少しばかり震えていた。

そういえばもう、一メートルは登っているんだっけ。考えると美紗の腕は縮こまったまま動かなくなってしまう。

一メートルほどとは言つても、木に登ればその高さは実際よりもずっとずっと高く感じられるのだ。初めて登った時というのは、なおさらだ。

落ちたら死んじゃうかも……。

実際ではありもしないことを、気が動転するあまり美紗の頭ははじき出してしまふ。幹にしがみつく指は、白くなくてもなおしがみつこうとしていた。怖い。

しかし宙ぶらりんになった片手に、大輔の手が重なる。美紗が顔を上げると木漏れ日の中に大輔の顔が見えた。言葉もなく大輔はしっかりと頷くと、美紗の手首を掴んで枝のほうへと引つ張っていく。アシストされながら、美紗は藁をも縋るような思いで枝によじ登った。枝に二人が乗ると、先端にある葉がさわりと揺れた。

「の……登れたの？」

肩で息をしながら美紗は呆然と言葉を吐き出した。

「やったじゃん綾瀬。お前もう木の上だよ」

「うそ……」

「ほんと」

「だってわたし、全然体力ないんだよ」

信じられないと言いたげな美紗に、大輔は思わず吹き出した。

「木登りつてね、体力云々の問題じゃないんだよ。登り方とか手足の動かし方とか、そういうコツさえつかんじゃえば、誰だって登れる。じゃなきゃ子供がひよいひよい木になんか登れないって」

「そういうものなの？」

「そ。そういうもん」

結果なんて、いつもそんなもんだ。理屈とかそんな面倒なものなんて二の次。本当に成せばなってしまう。そして僕らはいつもそれに驚かされてしまう。

驚いていた美紗は大輔の言葉を聞くと、ホツとしたような笑顔になった。何が面白いのか解らないのに、二人はくすくすと笑い続けた。

「で？ 初めて木に登った感想は？」

「うーん。鳥になっただっていうよりも、魂が抜けたって感じ。幽体離脱っていうのかな？なんかね、ふわふわしてるような気がするの」

ブランコみたいに風をきれるわけでもないのに、美紗はぷらぷらと投げ出した足を振っている。そのたびに下に映る影も、ぷらぷらと足を振っていた。

「なんか風になっただみたい」

「風に？」

「そう。今ならどこまでも飛んでいけそうな気がする。手を振るみたいに、簡単に」

そう言いながら美紗は指揮をとるみたいに手を動かした。すごい微かな風が、ふわりと生まれる。

(……あ、れ)

今まで笑っていた大輔は、途端に表情を強張らせた。何かがおかしい。普通じゃない。心がそう訴えている。

だが隣を見ても、美紗は何にも気付いていないようだ。まだ無邪気に手を振り続けている。……ということだ。つまりこれは、人ならざるものの領域なのだろう。大輔は息を潜めながら周囲を窺った。

周りには大輔と美紗以外の、誰もいない。そこにある自然もいたって普通。生まれ続けているのは

(風?)

気付いてから大輔は、早急に風へと意識を集中させた。すると自然な風の中に、時折別の風が入り込んでいるのだ。それは鋭いような冷たいような、心をざわつかせる雰囲気を持っている。これ以上悪化しないうちに先手を打つ他ないだろう。

うわウゼエ。俺たちの管轄かよ。

大輔は苦虫を噛み潰したようにしけた面をした。

しかもこれは出直さねばなるまい。本当なら今すぐにも正したところだが、生憎今は一人じゃないのだ。人間が　美紗がいる掟を破るわけには、当然ながらいかない。人間にとっても御子にとっても、それは絶対なものなのだ。だとしたら、どうする？

唇をなめると、大輔は平静を装って美紗のほうへと顔を向けた。

「あー、綾瀬？　悪いんだけどさ、俺絵の具をあつちに忘れてきたみたい」

実際大輔は下書きしかする気がなく、絵の具なんて宿舎に置きっぱなしだった。ほらねと言いながら美紗に鞆の中を見せると、大輔は苦笑いを浮かべた。

「ほら俺つてばおつちよこちよいだからさ。なんつーか、よく忘れ物するんだよね」

「自慢できないよ、そんなこと」

「でもこれが俺の自慢かもー。まさに天性のものだよね」

脳ミソが可愛いドアホ少年像を描いている。それに従って大輔は額をぺちんと叩いた。しかし使えないことに、これから先の演技がまったくと言っていいほど思いつかないのだ。

ここで帰ろうと言うのは、唐突すぎてあまりにも不自然だし。…だからといって美紗が飽きるまでいるわけにもいかない。それにお昼にはかなりの余裕がある。

どうしよう、ってかどうする俺！　大輔は馬鹿笑いをしながらも

悩み続けた。

もういつそのこと自爆するか？ ちよっと帰らない？ って、首傾げながら自爆するか俺！？

笑いすぎでか、それとも本心でか。大輔は涙が出てきそうになる。「おい大輔！」

すると助け舟のように、下方から慧哉が怒鳴り込んでいる。はっとして二人は慧哉をのぞき見た。

「なんだよ慧哉」

「つき合ってくれ、大輔！」

「ありがとう！ 待っていたよ、その言葉」

聞こえてきた慧哉の言葉に、大輔は思わずホッと胸を撫で下ろした。よかった。これで何とか抜け出す正当な理由ができたじゃないか。

あとは成り行きに任せて綾瀬と別行動をとるのみだ。

「ってことだから綾瀬。俺は降りるけど、ここから降りられる？」

この枝なら低い位置にあるから、降りようとせばすぐに降りられるだろう。けれど初めての奴に無理強いをするのも気が引ける。

念のためにと大輔は美紗の顔を覗き込みながら尋ねてみた。

しかし何故でしょう。美紗は大輔の顔を見るやいなや、顔を真っ赤にして言葉にならない言葉を発していた。さっぱり解らない。何でだ？ としばし大輔は頭を悩ませて……：皮肉にもその指している意味に気付いてしまった。

……あ。……俺たちホモ？

「あ、いやそのね。さっきのはそういうことじゃないんだよ」

大輔は気が動転して、両手を顔の前でぶんぶんと振りたくった。

それもそのはずだ。大輔も慧哉も、言いたいことが解っていたからこそ通じていたのだ。さっきの主語なし会話が。

だがもしも事情を知らない人が聞いていたとしたら、結末がどうなるかは目に見えて解っていた。驚きを越して、むしろどん引きだろう。何こいつら大声で告白してるんだよって。しかも男同士だし、

両想いだったし。禁断の愛かよオイ、ということになる。

そしてここには……事情を知らない人が一人。

ヤバイ。綾瀬の中で俺たちは恋人成立なんですか？ と大輔の冷静な部分が泣きごとを言った。俺にそんな趣味ないよ。いたって普通の男子だよ、綾瀬。

「どうしたんだよ大輔」

「いや、ごめんちょっと……」

「別のことに取り込んでいる暇はねえだろ、俺たち！」

「でも綾瀬がさ、木に登ったの初めてで。降りられるかどうか解らない」

とんでもない誤解が生まれていることなど露知らず、慧哉は大輔の言葉を聞くなりあからさまに嫌そうな顔をした。

やめてください慧哉様。今この状況下でそんな表情をするとさらなる誤解を生むから。

「だったら下ろせ。枝からぶる下がればすぐだろ」

「そうなんだけど……」

恐るおそる大輔は美紗の表情を窺った。やっぱりまだ誤解しているようで、どん引きとまではいかないがかなり引かれている。もう大輔はどっちに焦ればいいのか解らなくなっていた。

「綾瀬。その……降りられる？」

「う、うん大丈夫！ 大丈夫だからその……」

何コレ。もろに意識されてる？ いろんな意味でさ。

しかも何この子もじもじしてるんですか？ さっぱり理解できないんですけど。いや、理解したくもないんですけど。

不吉なことが起こりそうな美紗のリアクションに、大輔は言葉をなくした。なんかもう、この先何が起こるのかがすごく怖い。

大輔が固唾を呑み込むと、決心した表情の美紗が口を開いた。

「あの、誰にも言わないからその……二人とも幸せに！」

すると登ってきた時とはまるで違い、美紗は恐れる素振りもなく、枝にぶる下がると木から飛び降りた。ちょっと転びかけながらも美

紗は二人に向かつてお辞儀をすると、荷物を持つとどこかへと走り去っていく。

「わーお。さり気なく体力あるじゃんか。」

失望と共に大輔はそんなことを思った。下で慧哉が、また叫んでいた。

「わーった、今行く」

重たい腰を上げると、大輔は枝から飛び降りた。蹴りつけた枝は大きく揺れ、木の葉がいくつか舞い落ちていく。嫌な風がまた大輔の頬を撫でていった。

しょうがない。綾瀬には悪いけど、今だけはこの状況を変えるのが先決だ。一刻も早く　そう、これ以上悪化しないうちに正さなければ。

焦る気持ちを抑えながら、二人は共に大地を蹴る。風よりも速く森の中を駆け戻っていった。

「遅えんだよ、お前ら！」

縁側に行くなり、二人は壁掛け時計を持った耿輔に罵声を浴びせられた。よく見れば部屋の中はかなり荒れている。何かがあったのは確実であろう。

風のことを言おうとした二人はその光景に、思わずぼかんと口を開けた。そんな姿を見るなり、耿輔はけつと吐き捨てる。

「ッたく。大体今の野郎どもはさあ、教育が行き届いてねえんだよ。神さんも職務怠慢だなんだよなあ、うちんとこの顧問並みによ」

「兄貴。とりあえず落ち着いてって。一体何があつたんだよ」

お冠な耿輔をなだめようと大輔は言葉を発する。だがそれは逆に怒りを煽ってしまったようで、時計を掛けていた耿輔にキツと睨みつけられた。

あからさまな殺意に似た、刺々しい空気。それを放出する耿輔に、大輔は思わず「すみません」と小さく謝った。

口の端を歪める耿輔はそんな大輔を見、そしてその後にいる慧哉

を見。嫌な雰囲気を高まるだけ高まらせてから、思い切り嘆息したのだ。

「何もクソもねえよ。乱れた気配がしたと思ったら、どこぞの風の精が突風かましてきやがって。とっ捕まえてやるうと思っただらあいつ、逃げ足速いんじゃないか！ クソありえねえよ！」

「あー、クソうぜえ！ と叫びながら、耿輔は誰のかも解らないイラストやら宿題やらを拾い集める。」

「あんの野郎、今度こそとっちめてやる。……そうしたら覚えていろよ。俺が正しい道に進めるようボコツてやるさ。風使い様をなめんじゃねえ」

すると今度はいきなり高笑いをしだした。

完璧に壊れてるよ、この人……。冷汗を流しながら大輔は呟いた。「実は俺たちも乱れには気付きました。それで大輔とここに来たんですが……」

「だから遅えつての」

「あーはい、それは解っています。で、耿輔さんはどう思います？ この一連の乱れが一人の風の精が起こした悪戯なのかどうか」

慧哉の言葉を聞いた耿輔は集めたプリント類をちゃぶ台の上でそろえると、深いため息をついた。

その瞳は徐々にいつもの冷静さを取り戻していて、プリント類をそのまま置くと耿輔は二人の元へと近づいてきた。

「一概に奴のせいだとは言いきれないだろうな。だが時間も場所も、それに属性も近い。そこだけを見れば、可能性にもなきにしにあらずだ。……ただ俺とお前たちが感じたっていう乱れが、果たして同じだったかっというのが問題だな。当たり前だが気配なんて、一団体によって微妙に異なる。こんな空っ風が名物の県じゃあ、風の精だってミジンコ並みにうじゃうじゃいるだろうし」

耿輔は縁側にしゃがみ込むと、膝頭に顎を乗せた。

「まあどちらにせよ、正さなきやいけないってことには違いねえわけだ。けど今は奴の気配もとっくに消えている。相当遠くに逃げた

んだらうなああのヤロウ。だから一晩待つてみて、異常があつたら明日にでもとつちめよう。何かあるかもしれないから注意はしとけよ」
異論は？ 耿輔が尋ねると、大輔は控え気味に声を出した。

「あのさ、異論つてわけじゃないんだけど。……なんていうか兄貴が会つたのと俺たちが感じたのとは、別の風の精な気がする。だつて兄貴のほうは悪戯とか、そういう目に見えることをしてきたんでしょ？ でも俺たちのほうは、なんともなかった」

「ただ通り過ぎただけつていう可能性は？」

「そんなの解らないよ。俺たちが互いにどんな気配を感じたのかなんて、そんなの解るわけないもん。でもさ俺たちが感じた気配、ここに来る少し前までしていたんだよ。一分もなかったはずだ。俺も風使いだから解るけど、この突風つてそんな近い時間に起きたものとは思えない」

大輔は走つてきた時のことを思い出していた。

乱れた気配が抜けたあと、そこに残っていたのは空虚感と寂れと、ちよつとした清々しさだった。まるで夕立があつた日の夜に似ていた。

「ただここは、何もかもが終結した後の清々しさというのだろうか。そういう残滓が胸を支配している。同じような感覚であつても、それではまたわけが違つてくるのだ。」

まっすぐな大輔の目を見て、耿輔はふーんと楽しげに唸つた。

「確かに突風が起きたのはかれこれ十分くらい前。んでお前たちが感じていたのは、走つて一分弱のところつてわけだ。俺が会つた精は相当な気配を持っていたから、その程度の距離なら解るかもしれない」

「じゃあ」

「でもそうすると、大変だぞー。相手が複数になるんだからな」

心配に顔色を変える二人に、耿輔は不器用に笑いかけた。

「明日になればそれも解るだらう。とりあえずお前らちよつどいいところにいるから、片付けの一つや二つ手伝つていけよ」

風の吹く場所

立ち上がると耿輔は服の裾を直して、今の奥へと消えていく。二人は顔を見合わせると、縁側から靴を脱いで上がっていった。

五章 雨、むしろ滝

不気味なほどに、あれから何か起きることはなかった。吹き抜ける風の中には些細な乱れも生じない。あの騒動の後には、ただの日常しか残らなかつたのだ。

あくまで一部を除いての話だが。

(冗談じゃねえよ……)

今日一日でどれだけ悩めば気が済むんだろう。あー、マジでどうすりゃいいんだと、確か朝にも思っていたことを大輔は再び脳内で絶叫した。

なんか未だかつてないくらい、夏休みを最悪なスタートできつたな。オイ。

ジージーとミミズだか螻蛄だかの鳴く声を耳にしながら、大輔は現実逃避とばかりにたそがれた。居間から聞こえてくる団欒とした話し声さえも、今となっては恨めしい限りだ。

夜の縁側に寝転がりながら、大輔はうんうんと頭を悩ませる。議題はズバリ『ホモ疑惑』だ。

暴露した時の反応を考えるだけでも怖いから、まず慧哉には口が裂けても言えないだろう。言ったら絶対に殺される。

となれば必然的に大輔一人で疑惑解消に努めなければいけないのだ、が。……とはいえたった一人で、どうすればあの誤解を解くことができるというのだろう。

あのまさに信じきつたの代名詞とでもいえるような美紗の顔を、大輔は鮮明に思い出していた。あれは相当重傷だ。ちょっとやそつとじゃ解消できないだろう。ましてやインパクトがインパクトだし、事情さえも 御子にかかわることだから言えやしないし。

(せめて綾瀬がな……)

大輔は考えてから、顔に腕を置いた。

やめよう。ありえないもん、そんなこと。偶然にもほどがある。

思考を振り払うように大輔は寝返りを打つと「あー……」と気の抜けた声を垂れ流した。寝返りを打った時に落ちた腕が、こつんと乾いた音を立てる。手の甲がぴりぴりと痛んだ。

もう、嫌だな。目を伏せると鼻の奥がつんとした。胸の奥が苦しくて、ろくに息をすることさえもままならない。上の瞼が熱くなつて、痺れる感じがした。それでも泣きたくないからと、大輔は手をぎゅっと握った。

掌には爪が食い込みそうになっている。痛い。けれどそのおかげで、胸の苦しさが少し和らいだような気もした。

だんだんと呼吸が楽になる。溜まっていた息を吐き出して、新しい空気を胸いっぱい吸い込んだ。

「恋人、か」

「なんだお前、付き合ってるのか？」

「いや。ただの疑惑」

「へえ。誰と？」

「ごくごく身近な人だよ。ところでさ、何しに来てんの慧哉サン？」
起きる気もないのか、大輔は顔だけを慧哉に向ける。

まさかその疑惑の恋人に自分の名前が挙げられているとは露知らず、慧哉はその場にしゃがみ込んだ。

「夕立が来る。そのまま寝てると余計に腹を冷やすぞ」

「そう」

耳を澄ましながら、大輔はそう答えた。確かに虫の鳴き声が弱まっている。流れてくる風からは、淡く雨の匂いがした。よく見れば、森から覗く上つ面の空が光っている。だけど音はまだしない。それでも十分と経たないで、夕立は来てしまうのだろう。

さすが光と風の御子が多い県だけある。

連日の夕立に動じる様子もなく、大輔はのっそりと起き上がった。

「お勝手の窓、閉めてくるね」

案の定、夕立はすぐにやってきた。雷はうるさいくらいに落ちて

いる。

ただ意外だったのは、女子が全然怖がる素振りを見せていないことだった。クラスの女子といえば雷を見るたびに叫んでいたものだから、女子は雷が鳴ると条件反射的に叫ぶものなんだろう。勝手な固定概念だけれど、大輔はそんな風に思っていたのだ。

しばらく部員同士で雑談をした後、さてと耿輔が立ち上がる。するとそれを合図だと言わんばかりに、それぞれの部屋へと別れていた。部屋は居間のさらに奥。襖戸で仕切られた十畳間が男子部屋。その隣にある、同じく十畳間が女子部屋だ。男女部屋の間も襖で仕切られているが、無駄に発情期な奴はどちらにもいないから特に心配はない。

とはいえ男子部屋は居間との続きなので、やはりその前面にも縁側は続いていた。

視線を外にやれば、滝のように降り注ぐ雨と、やたら気合の入っている雷が未だ張り切り続けている。

鞆の中をあさっていた大輔はふとタ立と　そして風を見ながら、はあつとため息をついた。風はびゅうびゅうと吹いており、縁側は吹き付けられた雨に、少々濡れている。

「大輔、まだかよ」

「あー……、もうちょっと」

するとあからさまに不満そうな耿輔の声が、大輔の背中を押してきた。視線を外から中へと戻すと、大輔は焦って鞆の中をもう一度確認しだす。

ウノするぞ。

そう耿輔に言われたのは、ほんの数分前。学生にとってウノとは合宿の醍醐味なのだとされるがまさに、大輔は目的とするものを探しているのだ。

どこにやったのだろう。痛い視線を一身に受けていた大輔は、しかしすぐにその手に確かな感触をつかみとる。

輪ゴムで一括りにされたウノを取り出すと、大輔は耿輔に向かっ

て投げ渡した。それから鞆のチャックを閉めて戻ろうとすると、もう耿輔はカードを切っているではないか。耿輔の行動は、何かといつても早い。

「何順？ 時計回り？」

「じゃんけんで勝った人から時計回りでいいと思いますよ」

もうカード分けをしながら、耿輔と尋希はルール設定まで決めていた。大輔は自分の位置に、ちょこんと座った。

それから各々にカードが配られると、どこかに行っていた慧哉がちょうど帰ってくる。

「どうした慧哉。女子の部屋でも覗きに行っていたのか？」

と興味なさそうに耿輔が聞く。

「水飲みに行ってみました」

するとこれまた興味なさそうに慧哉が返してきた。その目はすでにウノの存在に気付いており「またウノとかやるんすか？」と明らかに訴えている。勿論耿輔は軽くスルーした。

のっそりと慧哉が胡坐をかくと、それが合図かのように妙な緊迫感が生まれる。誰も喋らない。次に喋れば、それがスタートの銃声になるはずだ。

それぞれの前には七枚のカードの束がある。予想外にも最初にそれを手にしたのは慧哉だった。それに倣い、それぞれの束を各人手元に置く。

「……最初はやっぱ、グーだよな？」

耿輔が一樣にみんなを見渡した。三人は無言で頷いていく。

銃声は、鳴った。

「いよーし！ んじゃあ、最初は」

「ヤバイ！！」

途端、鼓膜が破れるほどのキンキン声が、襖戸を勢いよく開けて聞こえてきた。「グーだつつつただろ！」と耿輔は三人に怒鳴り飛ばすが、ハツと思い出してからそれが男の声ではないことに気付く。振り返るとそこには、肩で息をする真衣が立っていた。隣の部屋

だというのに、その暑さと言おうか疲労と言おうか。それはマラソンをした後のようにさえ感じられる。

一斉に振り返った男子の驚きに気付きもせず、真衣はもう一度その口を開いた。

「ちよつ、ヤバイツスよ部長！」

「待て。ちよつと待て。そしてとりあえず落ち着け樺沢」

あまりの迫力に耿輔は思わずカードを落とし、そしてジリジリと後ずさった。

だが真衣も負けない。開いた距離を確実に詰めてくる。その目はまさにハンターともいえよう、鋭いものである。

「コレが落ち着いていられる状況ツスカ！」

「もう何でもいいから、とりあえず迫ってくるなアホ」

「迫ってなんかいません。前のめりになってるだけです！」

「同じだからね。近いことに変わりないからね」

「いいえ、やつば変わると思いますよ！」

ずいずいと迫ってくる真衣に、耿輔は圧倒されていた。

コイツ怖い……。と耿輔は後方の男子三人に視線を投げかける。

……。のだが、なかなか立ち向かってくれない。それどころか視線を逸らされてしまう。思わずチツと舌打つと耿輔は覚悟を決め、真衣の両肩をむんずと掴み立ち上がった。

「っ！かお前、寝巻きで風呂にダイブしたのかオイ？ なにびしょ濡れで」

「いや、違うんすよ部長！ 雨と風がすごいんですつて！」

なんともいえない迫力で迫ってくる真衣に、耿輔は思わずその腕を突っ張った。猪かこいつは？ と迫り来る真衣を見て呟きかける。「当たったり前エだろ。夕立ついたら雨と風が強くてなんぼじゃねえか」

「いや、半端ねえんすよ！ もうヤバイツスよ！」

「なんだあ？ さてはお前も怖くないのに怖がる女子の部類なのか？ こないだなんて雷見て『うわっ、すげかつけー！』とか騒いで

たじゃないか」

顔を引きつらせながら耿輔は冗談めかしく言ってくる。だが逆に肩を掴まれたうえに、その言葉は一蹴された。

「んなこたア、もうこの際どうでもいいんです！ 問題なのは雨と風がすごいことで」

落ち着きの欠片もない真衣にガクガクと揺らされまくって、耿輔の脳ミソは半ば混ざりそうになる。三半規管ってなんだ？ 視界が回って気持ち悪い。何か嫌なものが込み上げてくる感覚に、耿輔は襲われた。

ああ、もう駄目かも……。無駄に青春とプラスを感じながら、耿輔が意識を手放しかけたその時。急に真衣の動きが封じられた。美紗と幸恵が、真衣を羽交い絞めにしていたのだ。

ふらつく足取りの耿輔も隣にいた慧哉に支えられ、何とか背面ダイクを免れる。意識も一応はつながっているようだ。

「鬼みたいに興味解らないんだが。……その二人、通訳しろ。樺沢の通訳をしろ」

おうえツと口元を押さえながら真衣から距離を置くと、耿輔はその場にへたり込んだ。

一旦消えていた尋希と大輔は、コップに水を汲んで戻ってくる。それぞれを真衣と耿輔に手渡した。

「えっと、雨漏りしているんです。風もどこからか入ってきて……」耿輔が落ち着くのを待ってから、幸恵がそう口を開いた。

「雨漏りが？ だったらバケツとか見つけてこようか？」

「うん……。でも、ちよつとね」
そう言う尋希に曖昧ながら答えると、幸恵は美紗の顔を見る。美紗は言葉もなく首肯した。

「なんていうか、バケツが足りない気がするの」

「はい。それに足りてもきつと、居場所が……」
二人の様子が、どうもおかしい。
バケツが足りない？

居場所がない？

一体どういうことなんだと、男子はそろって首をかしげた。

「てか、見りゃ解りますよ」

するといまだ息の荒い真衣が、般若のような形相で耿輔の肩を掴んだ。そのまま女子部屋前まで拉致られる。

来た時同様、真衣は壊れんばかりに勢いよく襖戸を開け放った。するとそこには

「……………なんじゃこりゃ……………」

古い家だとは聞いていた。平屋だとは知っていた。木造建築だとも知っていた。

時々ムカデが出るからねーとか、ネズミがいたらごめんねーとか。覚悟はしていたけどまさかこんなことが起こるだなんて……………。

あんぐりとだらしなく口をおっぴろげながら、耿輔は別の意味でその場にへたり込んだ。

「なんで雨が？」

そこは雨と言うよりも、むしろ滝と見間違っほどの雨漏りに見舞われていた。畳も濡れていない部分のほうは、見つけにくいといった感じであろう。

なるほど、真衣が自分を忘れて叫ぶのにも納得がいく。こんなことなど想像にさえしない。

これじゃあどこぞの夢の国のアトラクションも真つ青だ。

「一応荷物だけは持ってきたんですけど」

「まあ、それが正解ツスね」

正常に機能していない耿輔の変わりに、慧哉が幸恵に向かってそう答える。そして女子部屋の荒れようを一目見てから、苛立たしげに前髪をかき上げた。

「耿輔さん。これからどうするんですか？」

まばゆい光の直後、甲高い雷鳴が轟く。

痺れるような音は空気を振るわせていった。近くに落ちたのかもしない。

乱れた風が、吹き抜けていく。三人はぴくりと肩を震わせた。人間はやはり、気付かなかったようだ。

誰もが耿輔に視線を向けている。耿輔は黙って女子部屋の畳に、自らの手を置いた。ひたりとした水の感触が、掌いっぱい伝わってきてくる。

「……しょうがねえから、この部屋で一緒に寝るしかないだろうな。嫌だって言うんなら、男子が縁側にでも行くけど」

居間には各自の画材やら作品やらでこった返している。片付けるには、かなりの時間を要するだろう。……だとしたら、これしかない。

耿輔は立ち上がり、濡れた手をズボンで拭った。ズボンの拭いた箇所は、色を増して跡を残している。

「さあ、どうしたい？」

夕立の奏でる不協和音の中、耿輔の声だけが時間を止めた。

第六章 ねえ、聞こえますか？

目を覚ますと、まだ周りは薄い闇に包まれていた。

特に何をするわけでもないのに、何でこんな早く起きてしまったんだろう……。ケータイのウィンドウを覗けば、まだ朝の五時前だ。それでも障子戸には、鳥の羽ばたき行く影が見て取れる。

もうすっかり覚めてしまった臉をこすると、大輔はのっそりとその場に座り込んだ。

隣を見てもどこを見ても、今この十畳間には七人の部員でいっぱいになっている。雑魚寝。まさにそれだ。

ましてや男女で寝ているわけだから、広いと感じていた十畳も狭く感じてしまう。男女との境界線はくつきりとしており、更には男子の方がその場所が狭いときている始末。

大輔はゆっくりと深い息を吐き出す。それをまた深く吸い込めば、湿った畳のにおいが鼻腔をくすぐった。

また耳を澄ませば九人分もの寝息が聞こえてくる。それらはきちんと自らのリズムを持ち、繰り返し続けていた。大輔の覚めた呼吸では、みんなのよりも少し速いリズムを刻んでしまっている。呼吸が一人、調子に乗っていない。

そんな光景を目の当たりにしてから、大輔は再度臉をこすった。すると明け方の蒼闇あおやみに目が慣れてくるのが解る。そしてそれと共に、僅かな疎外感が大輔の胸奥に生まれた。

今起きているのは、自分ひとりだけ。

たいしたことではないのに、それが酷く寂しかった。みんなは確かにいるのに、取り残されてしまったような気がした。

キンと小さく耳鳴りがする。

何となしに、大輔はもう一度ウィンドウを覗いた。時間は一分と経っていない。それでも静かな室内は、ゆったりとした夜明けの時

を迎えようとしているのだろう。

居間から時計が時を刻んでいる音が聞こえる。

外から小鳥が飛び立っていく音が聞こえる。

朝露が水溜りに落ちる音が聞こえる。

みんなの寝ている音が聞こえる。

大輔は立ち上がると、まっすぐに縁側へと向かって歩いていく。

そして障子戸を空ければ、淡い朝の光が静かな世界を照らしていた。

…*…

朝食を済ませてからすぐに、一向は部屋の片付けに勤しんだ。

女子部屋の畳をはずして、外へ持って行っては壁に立てかける。

地味で単純だけど、かなりの肉体労働だった。

ぐつちよりと濡れた畳は褒めたくなくなるくらい水分を吸収していて、持ち上げれば濁った水滴が滴る。含んだ水がその分減るとはいえ、最早その重さは畳の域を越していた。正直、辛い。

ましてや十畳間だから、畳も十枚。一枚運んだ後にそれを考えてしまうと、部員たちは自然、嫌気の色を隠せなくなってしまっていた。

「ねえ、慧哉」

畳を縁側から外へ運び出しながら、大輔は小声で話しかけた。

「昨日の風、どう思った？」

「ヤバイだろうな。あいつマジで調子付いてやがる。それに」

よいしょと下ろすと、二人は今しがた持ってきた畳を家の外壁に立てかける。

やっと今ので七枚目だ。あと一回運べば、この重労働は終わるはず。

そう思うと急に気分が軽くなった。現金にも鼻歌気分で大輔は慧哉の後をついていく。その途中、耿輔と尋希とすれ違った。重さでちよっと辛そうだったが「あと一枚ずつな」と耿輔に話しかけられ

る。二人はウツスとだけ頷いておいた。

あと一枚。

部屋に戻ると水浸しになった床を、女子が丁寧に拭いていた。

二人が畳を持ち上げると濁った水が、やっぱり滴って　するとそれは、真衣の逆鱗に触れてしまったようだった。水の滴った場所が、どうやら真衣の拭いていた場所だったらしい。

畳が重くてそれほどの速度は出なかったが、それでも二人は必死になって真衣から逃げていく。般若のような形相の真衣。彼女に追われながら部屋を出、二人は畳と共に縁側を飛び越える。

だが不運なことに勢い余ってか、縁側とだけでなく靴までも飛び越えてしまったのだ。足の裏に小石が刺さって、大輔は悶絶した。鼻歌気分はあっさりどこかにすっ飛んでいく。

そんな事態に巻き込まれながらも最後の一枚を運ぶと、二人は外壁に向かって視線を向けた。清々しいくらい畳は真横一列に並んでいる。やっと終わったという安堵の息をつく、二人は揃って向かいの生垣に寄りかかった。

「で。『それに』の続きは？」

足の裏を涙目で見ていた大輔が視線を向けると、慧哉は「ああ」と頷いた。

「あいつはまだ、近い場所にいる」

「そうだね。なんかこの家を取り囲んでるみたい」

そよそよと過ぎ行く風が、二人の髪を揺らした。その中には時折、子供の笑い声のようなものが混じる。悪戯好きの風の精が、楽しそうに遊んでいるのだ。

そう。そこにはまったくの悪意などはない。本人にしてみれば、ただの無邪気な悪戯に過ぎないのだろう。

どこからか風に乗って、また笑い声が運ばれてきた。

二人とも煩わしげに表情を歪めた。

「ほっといたら、今日も雨漏りだろうな」

「もう御免だよ」

「ああ、まったくだ」

腕が汚れているのも気にせず汗を拭くと、慧哉は視線を畳から空へと逸らした。

何も変わらない、夏の陽射しが照りつけている。けれど彼らには不気味に蠢く風が、はつきりと見えているのだ。ゾツとするくらいはつきりと。

「今日中に、間に合えばいいんだが……」
縋る思いで、慧哉は呟いた。

掃除をサボっているということに、ちよつとした罪悪感が大輔の心に生まれていた。それでも大輔はその歩みを止めようとはしない。思っていることとやっていることがかみ合わなくて、心がもやもやした。けれどこれは、しかたのないことなんだ。無理やりに自分を納得させ、大輔はその歩調を速める。

突き進んでいる森の中は、いつも通っているのはまったく別の方向だ。そのくせして、生い茂る木々は同じような物ばかり。変わらない景色を見るたびに、本当に迷いそうだと思う。

天を覆っている木の葉の間を縫いながら、木漏れ日はちろちろと降り注いでいた。

一人で広大な森の中を歩くのには少しばかり勇気があるのだが、木漏れ日は突き進もうとする大輔の支えとなってくれている。多少の明かりがあるだけで、こんなにも気楽になれるとは。我ながら単純だと、大輔は苦笑する。

「……つと、この辺」

同じような光景を延々と歩き続けた大輔は、不意に立ち止まった。そこもやっぱり、他の場所とは変わらない。同じような木があるだけの、何の変哲もない森の中だ。傍から見れば、だが。

大輔は耿輔から言われたことを思い出していた。

風の精はどうやら下宿先を基点として、行動をしているらしい。寝ていたと思いきや、耿輔は夜通しでその気配を辿っていたのだと

いう。

おかげで耿輔の目元には薄っすらと隈が浮かび、朝食の片付けでは皿を何枚か落しかけていた。どれも間一髪のところまで受け止めたようだ。

ついでにそこから、この風の精には悪意の欠片もないことが解った。あの無邪気な笑い声が、何よりの証だ。

……ただ無意識下の行動だと、風使い、風の精。どちらにとっても何かと厄介なのだ。

何故なら悪意があるとなれば、こちらとしてもそれなりの手段があるからだ。しばらく封じられるなり、何でもすればいいだけなのだから。

だが悪意がないとなければ、安易に手の出しようもない。何かてそうなのだろうが、無闇に何かを傷付けることはできないのだ。

そうなることやはり、神の元に送り返すのが最善の道なのだろう。

これは満場一致で、誰もがそう思っていたから、さして問題ではなかった。重要なのはこの後だ。

そのため三人は、巨大な結界風術を張らなければならない。その中に風の精を閉じ込め、追い詰めるのだ。だがそれは同時に、大きなリスクを背負うも同然だった。

何しろ耿輔以外は初の試みだし、ましてや大輔は力が弱い。こういう連携タイプの風術は、互いの息が合うことが肝心なのだ。逆に言えば、力の均衡が保たれない限り、どれだけ強大な威力を持ってもその効力をなくしてしまう。

問題はそれだけじゃなかった。今回使う風術は標的以外に力を及ばせないタイプなのだが、それ故に互いの標的とするものが合わなければ、その結界は張ることさえできないのだ。もしも昨日大輔が言ったように、別の風の精がいたとしたら、そこに混乱が生じる可能性だって高くなる。

そして嫌なことに、問題点はもう一つあった。それは定められた位置から、同時に力を発動させるということ。三人は結界を張るの

だから家を囲うようにして、大きなトライアングルを作らなければならなかった。勿論互いとの間には大きな距離がある。掛け声なんてものはない。同時に発動することさえも、難しいのだ。そしてここが、大輔のいるべき場所。

今の三人にとって、まさにそれは賭けのようなものだった。

大輔はもと来た道に身体を向けた。もう下宿先は見えない。

それでも下宿先のあるほうを見据えながら、長く長く息を吐き出した。

長く長く、より深く意識を研ぎ澄ますために。

大輔は瞼を伏せた。視界は漆黒の闇と、一点の光。

光は瞬いては消え、近づいては遠のく。それを何回も繰り返して

……すると光は話し声が変わった。あの風の精の声だ。

さらに深く息を吐いた。声はさらに鮮明になる。

その声を聞き逃さないようにゆっくりと、大輔は瞼を上げた。本

物の光と 風の精の軌跡が、はっきりと見えてくる。胸の奥に、

熱い何かを感じた。

大輔はその場に方膝をつくと地面に左手を当て、もう片方の手ですばやく紋様を描いた。淡い紫の瞳が、何かを見つけた。

注ぐ陽光の中で 私たちが歌いましょう

この世に溢れる悲しみ 憎しみ 嘆き 憂い

全てを包み込めるほどの歌声で

明るさを導き出せることを祈りましょう

この世が喜びの光輝に満たされるその日まで

皆の心にそよ風が吹き抜けるその日まで

唱え始めると、淡い紫の光が辺りを覆った。

最後の二つのリスクは、無事突破したらしい。

あとは風の精を追い詰めるだけだ。その間は何としてでも、力の均衡を保たなければならない。

大輔は立ち上がる。左手を前に出したまま、最初の一步足を踏み出した。

やがて時は過ぎ

私たちのいた場所も変わりゆく

その時の訪れは 一体誰に止められよう

この世は常に環を描き

暗転する日もいずれ来よう

運命は常に 巡るものなのだから

胸の奥は、熱くなるばかりだった。けれどそれは、自然と不快ではなかった。

つながっている。三人で……。

詩は終盤に近づいていく。唱える口調は、歌うように軽やかになつていった。

歩む歩調はだんだんと駆け足になっていく。突き出した左手からは、結界内部で風が巡っているのが感じられた。

息を切らしながらも、大輔は力を絞り続ける。淡い紫の光は、より濃く、そしてより小さくなつていくようだった。

さすれば 私たちが歌いましょう

この世は常に巡り続けるものです

いつか果てよう日が来るまでは

宿りし悲しみを 憎しみを 嘆きを 憂いを

この両腕で包み込んであげましょう

森を抜けた。目の前には宿舎となっている、あの古い家。

畳を立てかけた場所へと駆けつけると、すぐそばに耿輔と慧哉が。

二人とも左手を突き出して、その先は淡い紫の光で彩られている。三人は見事に、同じ言の葉を紡いでいた。

そして三人が追い込むその中心　結界内には、暴れている透明の影。

風の精は、すぐそこにいる。

大輔は空気を吸い込んだ。二人のそれと重なった。

永久の明かりを祈りながら

この世が喜びの光輝に満たされるその日まで

皆の心にそよ風が吹き抜けるその日まで

「……ッ、捕まえたぞコンチクショウ！」

唱え終わると同時、耿輔はむんずと透明な影を掴み取る。手中には何かを捕らえた確かな感触があった。

風の精は耿輔から逃れようと必死に暴れている。何か羽目が外れたのか、それはだんだんと姿をあらわにしていった。

「さあテメエ。神様んとこにつれてってやらあ」

するとそこには掌二つ分ほどの、子供の姿をした風の精がいた。

紫色のとんがり帽子に、瞳はやはり淡い紫色。耿輔に首根っこを掴まれているせいか、大きな瞳は潤んでいた。

「やだっ！　放してよ！」

じたばたと風の精はもがいている。が、まったく言っていないほど、耿輔には通じていない。耿輔は首根っこを掴んだまま、顔の前まで風の精を持ち上げた。その双眸は何かよからぬ色さえ含んでいる。

「はア？　お前何言ってるんだよ。悪いことしたら怒られるって、神様からちゃんとして聞いてるだろ？」

「僕、悪いことなんて何にもしてないもん！」

「へーそう。そういう言い方するんですか、アンタは」

あ。ヤバイ。

にこやかな笑顔を浮かべている耿輔を見て、二人は直感的にそう感じた。この人完璧にキレちゃっている。

背筋にスーッと落ち行く寒気を感じた。

「お前なア、風使いをなめんじゃねえぞ！　こちとらな　」

「やめよう！　冷静になろう兄貴！」

「そうですよ。このままじゃシャレにもなりませんって！」

この状況はまずいと感じ、二人は何とか耿輔を止めにかかる。怒りのあまりに込み上げた笑みを浮かべる耿輔に、逆に微笑まれた。

「何がシャレにならないだって、慧哉くん。俺アいつだって本気だ。シャレで済ませる気なんざ、さらさらねえよ」

ギリツという鈍い音が、風の精を掴んでいる首根っこから聞こえた。

風の精は顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら、二人に助けを求めている。

「俺はなア、こいつのせいで一睡もできなくてイラついてんだよ」

刹那、クハハハ　と狂ったように、耿輔は笑い声を上げだして

いて。
慧哉は咄嗟に風術を口にしていた。

六章 (1)

…*…

慧哉の判断が早かったおかげで、風の精は耿輔に噛み殺される寸前、無事神の元へと届けられた。

いつも冷静な耿輔を宥めるには多少の時間を要したが、それも今は落ち着いている。キレない人や大人しい人ほど、爆発した時は怖いものなのだ。

ただ災いか、ぴりぴりとした空気だけは未だその場に渦巻いている。むしろさつきよりも色濃くなっているのかもしれない。

臉を伏せゆつくり思案すると、耿輔は重たい口を開いた。

「で？ それがお前の意見で間違いないんだな」

「……うん」

頷く大輔を一瞥すると、耿輔は乱暴に前髪をかき上げグシャッと掴んだ。

「とはいえこれじゃ、疑う余地もねえんだけど」

再び訪れる苦しい沈黙。ひゅーっと湿った風が、三人の間を吹き向けてゆく。

……そしてその中にはまだ、乱れた何かが存在しているのだった。

「ねえ。昨日の風事件があったでしょ？」

最初に切り出したのは、珍しくも大輔だった。いつも「え、そうなの？」と人の意見に驚いては従い、そしてくっついて回っているタイプなので、耿輔も慧夜も仰天した。

だがすぐに表情を改めると、思案顔になる。

突風が吹きつけて居間がめちゃめちゃに荒らされた。そしてやつと今しがた困難を乗り越えた末に片がついた、あの風の精が引き

起こした事件だ。耿輔つなかりの強烈な印象も残っているため、そう易々と忘れるはずもない。

話題に上ってきたまだ記憶に新しい事件を、二人はしかと思いついて出していた。

そのことに関し、それがどうしたのかと耿輔が問い返す。思い出していたからか眉根はより、声にもちよつとばかり棘があつた。

しかしそれにさえ気付く素振りもなく、視線を地べたに彷徨わせながら、大輔は続きの言葉を紡ぎ始める。

「俺が昨日感じたのと、さつき捕まえたのとさ。……正直気配が違つた。今もたまーに気配があるでしょう。だからきつと、それも関係しているんじゃないかって思つて」

その声に、いつもの元気はなかった。けして誰とも目を合わせようとしないのは、大輔なりの罪悪感の表れなのだろう。

けれどここにいるのは一端の風使いだ。大輔が発言しなくとて、その異常には気付いてしまっている。

何かの拍子でかは解らない。解らないのだが、たまに歪んだ風の気配を感じるのだ。

苦々しそくに舌打つ音が、どこかで聞こえる。途端大輔は、きゅつと唇を噛み締めた。そしてしゅんと頭を垂れる。

「やっぱりいたのか……」

吐息と共に呟く声。それは大音量の蝉の合唱に、次第に掻き消されていつてしまう。

嫌な風はまた新たに生まれ、三人の頬を撫でては通り過ぎていく。耿輔は鋭く尖つた表情を、さらに険しくさせた。

「どつりで乱れが治まらないわけだよなあ。もう一人いたんだもんよ」

見上げた空は、どこまでも蒼い。目にしみるほど突き抜けていて、輝いていて。所々に綿毛のような雲さえ浮いている。

どこまでも代わり映えない夏の空。それなのに立ち込める空気、風の色は違つた。

どこまでもどこまでも、その風は牙を剥いてくるかのよう。今満ちているのは、無邪気な悪戯などではなかった。

悲しみと動揺の入り混じった、不安定な心情。マイナスの気がそこかしこ漂っている。熱いはずの空気は冷たく、どろりと重い。

しかもそれは時折消えては、また現れてを繰り返しているのだ。存在自体が不安定なのだから、捕らえるのも相当な困難を要するであろう。そう、先刻捕まえた風の精なんかよりも、もっと。

一時は喜びに満ちていた心も、不安定な風で消し飛ばされてしまふ。

今度捉えなければならぬのは、そういう人の心みたいな危うい風。

考えただけで、三人の気は滅入る一方だった。

…*…

畳を外すと、その下地となっているびちゃびちな板が露になった。相当雨漏りがすごかったせいで、どれだけ拭こうが水気は取りきれない。

それでも黙々と床を拭きながら、尋希がポツリと呟いた。

「そついえばさ、みんな。あの三人知らない？」

居間に置いてあった荷物を男子部屋に一旦移していた女子は、そろって首を横に振る。

「さあ……。美紗ちゃんならゴミを外に持って行ってけるけど」

誰かの勉強道具を部屋の隅に置きながら、幸恵が答えた。尋希は雑巾を一つ折ると、乾いた面でまた床を拭き始める。

「まさか部長まで消えるなんてね。……ほんと、どこに行ったんだか」

尋希は口元に小さな笑みを浮かべる。ほとほと呆れたといった感じが漂っていた。

「今日は久しぶりに部長がやる気を出してくれていると思ったのに」「あつはつは」。副部長、奴らのやる気なんざ当てにしちゃいけないツスよ」

だがそんな尋希とは反面、陽気な声をあげると真衣はズカズカと尋希のほうにやってきた。近くに放り投げた雑巾を適当に掴むと、尋希と一緒にになって拭きだす。

「まあカルガモ大輔が逃げたのは予想外ツスけどね。それでも慧哉と部長が掃除をサボるのなんてしょっちゅうでしょう。畳を運んだだけでも褒めるべきツスよ」

カルガモ大輔とは真衣が勝手につけたあだ名だ。誰にも友好的過ぎてちよこまかと一緒に行動をする大輔を見ていたら、それがカルガモに見えたらしい。

「とはいえ今回は、あつちの方にカルガモったと考えた方が妥当ツスカね。掃除サボってまで」

真衣は嘆息した。

「……ま、副部長。一人寂しく床拭きになったからって、そうしよげなさんな」

「うん。そうだね」

しかしそれを聞いていた幸恵は、どうも腑に落ちないと首を捻った。

「でもわたし、大輔くんが一人で外に行ったのを見たよ」

すると一瞬、その場にとどまっていた空気が動きを止める。静かな部屋の中で、幸恵の声が尾を引きながら響き渡っていくかのような錯覚。

しばらくしてから「えっ？」と呟くと、二人の視線は幸恵に釘付けになっていた。

「城戸、お前見たのか？」

「畳が立ってかけてあるほうに行ったから、てつきり……」

困っている幸恵とは違い、二人は口元を引き攣らせて笑った。

「何あいつ。自分の意思でやったのがサボリツスカ」

「そのようだね」

「マジでシメていいッスか」

「それはやめよう」

カルガモのくせに……。と真衣は苦々しく呟く。すると玄関戸の開閉する音がした。

三人が一斉に振り向く。と。

「どうしたんですか？」

だがそこに立っていたのは、ゴミ捨て帰りの美紗だった。てつきりサボリ魔三人集が帰ってきたのかと思っていたため、その場の空気が僅かに和らぐ。

てぼてぼと居間を歩み抜けていくと、美紗は三人のいる方へと近寄っていった。

「やっぱり外は暑いですね。家の中に入るとだいぶ涼しくなりますよ」

ふうと一息つくくと、手伝いますねと幸恵と共に荷物の整理を始めた。三人も我に帰ったとばかりに、それぞれの仕事を再開します。

汚れた雑巾を洗いながら、真衣が口を開いた。

「そういえば美紗はさ、見かけなかった？」

「何を？」

「いや、さつきからそれについて話してたんだけどさ。あのサボリ魔さんたち知らない？」

「え……」

言葉がつまり、美紗は思わずのその手を止めた。

不審そうに真衣が「美紗？」と呼ぶと、美紗はピクツと肩を震わせた。

「それって今いない、あの三人のこと？」

「それ以外にサボリ魔はいないでしょ」

「あ。そっか」

あははと美紗は照れ隠しで笑っている。陽光の中で、美紗の瞳が青く輝いていた。

「わたしはあの三人」
縁側から一筋、風が入ってくる。

…*…

畳の前に座る三人の表情は、翳ったままだった。

それもそのはずだ。やっと終止符が打たれたと感じていた矢先に、乱れた風の気配を見つけてしまったのだ。

しかも今回の相手は厄介者ときた。居場所も解らなければいつ吹くかも解らない。そんな風相手に風使いが三人集まっても、さすがに手の打ちようがなかった。耿輔でさえも現時点ではお手上げだ。せめて手がかりの一つでもあれば、状況を覆せるかもしれないに

そう思い意識を研ぎ澄まし集中してみるも、結果は何も変わらなかった。大輔にいたってはさっきの結界風術「祈りの環」を使ったせいで、ろくに力さえも残っていない。頭の中でこの整理をしても、たかが知れている。

気配を探っていた耿輔は、苛立ちの声をあげた。

「クソツ、尻尾の一つも見せやしない」

「こつちも同じく、なんも見つかりません」

小さく両手を挙げながら、お手上げだと慧哉は言った。

「何でなんだ。どうして気配が跡形もなく消える？」

今までの常識が、真っ向から否定されたような気分だった。

気配が消えたら、その残滓を探って追いかける。風使いとして真っ先に教えられることなのに、でも今回はそれができやしないのだ。落胆する二人を見て、大輔も同様に探りを入れてみる。だがそれもすぐに尽きてしまった。耿輔に聞かれても、首を横に振るしかない。

「……どうしてなんだろう。相手の持っている気配だったら解るのに、見つけることができないだなんて。こんなことできるの？ 普

通

「言うな大輔」

困り果てた大輔を耿輔が制す。

「普通じゃねえんだよ、今回は」

「耿輔さん。普通を求めるなって言うんですか？」

「じゃあそれ以外にどう機転を利かせればいい。普通ばつか追いかけてたら、相手の術中にはまるぞ」

いや。もしかしたらもう、相手の術中にはまっているのかもしれない。

本音だけはなんとか飲み下して、耿輔はばつが悪そうな顔をした。慧哉も押し黙ってしまふ。嫌な沈黙が舞い降りてきた。

これからどうしよう……。

だが刹那、刺すような悪寒を三人は空気中に感じたのだ。

まるで人を殺めんとばかりに発せられた殺気のように。あの風だ。

三人はすぐさま注意をそちらに向けようとしたが、居間のほうから重々しい音と誰かの叫び声が聞こえてくる。甲高い声だからこそ、そこにいる誰に、一体何があったのさえ解らない。けれど言えることは、今三人以外の部員は宿舎内の掃除をしているのだ。

注意は一気に宿舎へと向いた。驚きと不安で心臓がちくりと痛みを発している。それから風のことを思い出し咄嗟に意識を向け直したが、既にそこから気配は消えていた。

口は毒づくことなく噛み締められる。ざわめきが風に乗って聞こえてきた。ぎゅっと握り拳を固めると、顔を見合わせることもなく三人は駆け出していた。

たいした距離さえないのに、それさえも煩わしいほど長く感じる。

「オイ、何があった！」

飛び込まんばかりの勢いで、息を切らしながら耿輔は縁側から中を覗き込んだ。中は騒然としている。

戻ってきた三人の姿を見つけるなり、尋希が奥から駆け寄ってきた。その顔には緊迫した表情さえ浮かび上がっている。

「部長！ 外に誰かいませんでしたか？」

「いや、こつちに来る時、誰とも会わなかった」

「暴れ狂う心臓を宥めながら、耿輔は居間に視線をめぐらせた。

「それよりお前、何でこんなことになってんだよ」

耿輔の視線の先 居間の奥でダンスが倒れていた。一つだけあった、大きな木箱。中に何も入っていないとはいえ、その大きさからして重さも相当なものだろうと容易に察することができる。

それに倒れたダンスの近くでは美紗がへたり込んでいた。真衣と幸恵の姿があつてなかなか状況の把握ができないが、もう少しダンスとの距離が違っていたら、大惨事になっていたことだろう。考えただけでゾツとする。何でこんなことが……。

いや、彼らとはとつくに理由など解っていた。

風だ。

先刻感じた殺気は、ここで姿を現したと見て間違いないだろう。

しかしその元となる風が、この場所からはもう消えている。これだけのことを起こしたのだから力は相当なはずなのに、やはり気配の断片さえ残っていない。

あまりにも時限違いなことに耿輔は頭を悩ませた。

本格的に危険が迫ってきている。今までにこんな現場、一度として見たこともない。やはり今回は普通じゃないのか

「綾瀬、お前無事か？ 怪我とかしてねえ？」

だが、まずは部員の無事を確かめなければ。

靴を脱いであがつてきた耿輔に、美紗は弱々しく頷いた。耿輔は美紗の元まで行くと、そばにいた真衣や幸恵にも事細かに事情や身体具合を聞いている。

部員の元に戻っていく尋希の後ろ姿を見ながら、大輔は隣にいる慧哉に視線をやった。

慧哉は何も言わず、ただその光景を見つめていた。

風の吹く場所

七章 探し物は何ですか？

それからも夕立や風の被害は出続けていた。

とはいえ風のみに限れば大したこともなく、わりとやり過ごせる程度には治まっている。

しかし夕立ともなれば一変、相も変わらず女子部屋では滝のような雨漏りと風の音に悩まされていた。おかげで部屋割りもクソもなくなっている。

あの風を正さない限りは続くのだろう。

風使いは嫌なプレッシャーに押さえ付けられたまま、合宿四日目に突入していた。

疑問は大きく二つあった。

どうしてこの歪んだ風は、すぐに気配を元から絶ってしまうのか。これは初めて気づいたときから根付いていた疑問だ。未だにその原理はよく解らない。どんなに利口な風の精だって、その痕跡を全て消してしまうなどということはできないのだ。

それは人間にも一般常識 例えば『魚が足を生やして陸上を歩くことはできない』というようなものがあるように、神の御遣いの中にも種族によって、様々だがそういう常識がある。

今回の場合はまさに、普通に考えてありえないような状況。『常識外』という最大の敵に捕まってしまったのだ。

そしてもう一つは何でこの家の、特に女子部屋を中心に被害が出ているのかだ。

ただの偶然かもしれない。

最初こそそう思っていたのだが、偶然も二度三度と重なれば確信へと変わっていく。隣の男子部屋が無影響というのもあれば、なおのことだ。

これは偶然なんかじゃない。何らかの人ならざる者の力が、これだけの事態を引き起こしているのだらう。そう、これからより深刻になるように……。

二つの疑問はどこかで必ず接点を持つているはずだ。それを早く、なんとかしてでも突き止めなければならぬ。

募るプレッシャー。緊張の糸は今まさにち切れる寸前で保っている。

風が、この世界が。一体どうなってしまう？ 自分たちは何をすればいい？ 何に対してどう手を打てばいい？ 何をどう追いかければいい？

尽かぬ不安はゆっくりと でも確実に、風使いの精神を折ろうと手を伸ばしていた。そしてそれもまた、彼らにとっては恐ろしいものだった。いつ自分が動かなくなってしまうのか。それが、何よりも。

「探そう。せめてその断片だけでもいい」

まだ夜も明けない朝の森の中、硬くなった声音で耿輔はそう告げた。

「あいつらが絵を描きに行っているその時に、なんとしてでも」

その目はいつもと違い、どこまでも先を見ているようなきつい眼差しだった。普段の冗談交じりの面影は、もう微塵残っていない。

鳥も虫も鳴かない森は、恐ろしいほどの静寂に包まれている。三人の呼気が、やけに大きく響いた。

「慧哉は家の正面の方を頼む。裏側は俺がやるから。……それと大輔。お前は家の中を頼んだ」

耿輔は念を押すように、二人の目を見た。もう高校生だとはいつても年端の行かない二人の瞳には、真剣のほかには心配の色合いが見え隠れしている。

耿輔は引き結んだ唇を湿らせた。

「ただ それでも合宿中だからな。いつ何時、誰が現れるかは予想がつかない。本性使って探すのもいいけど、真剣になりすぎて見

つかったりするなよ」

「見つかったら、ただじゃ済まない。

解っているからこそ緊張を湛えたまま、慧哉はこくりと頷く。解ったと大輔も呟いた。

だがそんな二人の恐れに気づいてか、耿輔はふっとその顔に微笑を浮かべる。

「……なーに、そんなに心配するなって。考えすぎるな」

強張っていた肩の力を抜き、耿輔は真正面から二人の首に腕を回した。そしてそのまま、ぎゅっと引き寄せる。

肩を組むには、少しきつい体勢。ましてや昨夜の雨で湿気で蒸し暑かったけれど、それでも誰も逃げようとはしない。耿輔にされるがままに二人は固まっていた。

「きつと何とかなるさ。今までだって俺たち、何とかやってきたじゃん」

だから大丈夫だって……。

言い聞かせる声には、そうだと思わせる力があつた。本当は自分にだって心配に思う気持ちはあるだろうに。それでも二人を守るために、耿輔はそんな気持ちさえも抑えてしまっている。

「大丈夫だ」

囁いて、二人の背中をぽんと叩く。

顔に当たった耿輔の胸が、いつもよりも広く感じられた。

…*…

「さあさあ、今日で残り三日だよなあ合宿も。そろそろ絵を描き始めないとヤバイことになっぞー。そう言う俺が一番ヤバイぞー」

能気な声をあげながら、耿輔がパンパンと手を叩いた。間延びな声に既にみなが目していたから、手を叩くのは対して意味のないことだったような気もする。それでもご満悦気味な耿輔は、改めて一同を見渡した。

「一応奴からの伝言だけど、『絵を描かなかった奴あペナルティがあるけどあしからずー』だとさ」

耿輔の言う『奴』というのは、ご存知美術部の顧問だ。禿びかジジイだのと呼ばれてもいたし、顧問や先生としての立場はもうどこへやら。とはいえ顧問自身が、そう呼ばれていることを知らないのだから、こいつらの猫かぶりも相当のものだといえよう。

そんな中、真つ先に不満の声をあげたのは真衣だった。

「ちょっと部長！ まさかそれを了承したんスか」

「だってさア、奴つては俺たちの言うことになんて耳を傾けもしないじゃん」

呆れたように肩をすくめながら耿輔は言う。視線はどこか別の世界でも覗いているかのように彷徨っていた。単刀直入に言えば、了承せざるを得なかったのだ。

わなわなと震える身体を抑えようとししないで、真衣は「あのクソ禿……」と毒づいた。傍らで美紗が苦笑している。

「んじゃあそういうことで、奴の罨にまんまとはまったんだから、死んでも絵を描いてきなさい」

以上、解散。

大事なものをどこかしこに落としまくってきたような、そんな抜けた声で耿輔は締めくくった。

今日は耿輔もすぐに読書、というわけではなく、画材を鞆に詰め込んでいる。できれば俺を中心に世界が回ってくれと助かるのに……系の耿輔が顧問の指示通りに絵を描くというのだから、ペナルティはあながち嘘ではないのだろう。

だが今からやって耿輔は間に合うのだろうか。という疑問も、部員の 特に一年の中ではある。一年女子が心配そうな視線を向けていると、耿輔は何となくその意図を察した。

「何？ 俺が間に合わないと思ってるの」

「だって部長。今までサボりっぱだったじゃないツスカ」

真衣の声もよそに、耿輔は得意げに微笑むと鞆の中から大きな筆

箱を取り出した。女子小中学生が使うようなたつぷり入るファンシ
ー系の筆箱よりも、まだ大きいかもしれない。

「俺はなア、こいつらと運命共同体なんだよ」

「運命共同体？」

反芻しながら、真衣は首をかしげた。その中に筆記具が入ってい
るだろうことは容易に想像がつくのだが、それが一体何なのかが解
らずに混乱する。

絵の具か、パステルか、それとも色鉛筆か？

「こんがらがる頭をなだめようとしている真衣に、尋希が優しく教
えてくれた。」

「あの中にはね、色鉛筆が入ってるんだよ。普通のと水彩のが二十
本ずつくらいね。他にも水筆とかハンドタオルとか、とにかく色々
だよ」

「耿輔先輩は部活中に絵の具を使ったりはしないの。いつもあの色
鉛筆だけで作品を仕上げてるわ。重ねてグラデーションを作ったり、
水彩で色を伸ばしたり、ハンドタオルを使って色を馴染ませるよう
にぼやかしたりね」

それに補足するように、幸恵が言葉を紡ぐ。

四月にあつた部活動見学期間中に生徒作品というものを見せても
らったが、真衣はその時のことを思い出して感嘆した。あそこで見
た風景画も色鉛筆だけだったんだ。そう思うと、これだけやる気の
抜けた耿輔が部長であるのも解る気がする。

「部長って結構実力者だったんスね。見直しました」

尊敬の声で真衣は言う。

だがそれ以上に驚愕の事実を、耿輔本人の口から聞かされてしま
った。

「ったりめエだ。俺は色鉛筆と一緒になら一日、多くても二日でキヤ
ンパスいっぱい絵を描いてやるってやつだ。そうじゃなきゃここ
までサボってらんねえだろ？」

ニツと悪役がするような笑みを浮かべると、耿輔は彼曰く運命共

同体を鞆の中にしまった。

「じゃあ皆の衆、お昼まで粘ってこいよ。ペナルティ避けるためにもな」

荷物を担ぐと耿輔は振り返りもせずには宿舎を出て行く。向かったのは勿論、この家の裏手だ。

しかし御子の事情を知らない人間たちは、まんまと耿輔に騙されて外へと出て行く。慧哉もそれなりに荷物をまとめると、人の流れに乗って家の正面へと向かっていった。

計画は今、動き始めたのだ。

一人残った大輔はしばらく荷物をまとめふりをしていたが、やしてから誰も戻ってこないことを確認して、早速搜索に打ち込んだ。

というのもこの家の造りは案外簡易そうに見えて、実はややこしいのだ。間取りは居間を含めて十畳の部屋が三つ、縁側、風呂場、台所、トイレ、それに玄関くらいだ。

しかし玄関と勝手口には三和土がある。それに加えて襖のような収納場所は、十畳間以外にも玄関の三和土のところにあった。三和土を上げるその段差が、ちょっとした収納スペースになっているらしい。

また間取り以外の問題点といえば、やはり日本家屋特有の開放された家造りそのもの。留まっていた風は逃げてしまいうし、外からの風は入りたい放題だ。

確かに普通に過ごせば夏場なんかには快適なのだろうが、こういう状況では迷惑極まりない。今みたいな人知の及ばぬ状況に対応して作るわけじゃないのだから、その辺はしかたのないことなのだろうけど。

大輔は縁側まで行くと、空を見上げた。今は風の乱れもない。状況はいたって良好。

タンスが倒れたりだとか滝のような雨漏りがあったりだとか、そんなことがまるで嘘のように思えてきた。

ずっとこのままでいてくれればいいのに……。

風使いだからこそ、大輔にはそう思う気持ちがあった。同じ風の者として、できるだけそういう姿を見たくない。綺麗ごとかもしれないけど、そうに強く願う気持ちが大輔の中には確かにあった。

もともと御遣いの仕事というのは、せいぜい昨日みたいに悪戯をしてしまう精霊やら、あとはそれぞれの管轄内での異変　風使いでは自然的な風害だったり風が吹かないといったり、そういうことを正すというものなのだ。後は特にたいした仕事もない。ましてや悪意を持った風の精の反撃というのは稀なものだし、今回のようなことはそれこそ少ない。

だから正直言って、神の御遣いだって人間とは生まれ持った力以外、それほど差はないのだ。

大輔は空を見上げた。淡い紫の瞳は空の色を受けて、少し青味がかっている。

庭に生える一本の木からスズメが飛び立っていった。黒い影を地面に落としながら、もうどこかへ行ってしまふ。

「さて、と」

一度臉を下ろし、それから大輔は身体を後ろに向けた。小麦色の髪が動きに合わせてふわりと動く。

「まずは居間からかな」

誰に言うでもなく一人呟いて、大輔は居間へと引き返していった。

それにしても気配も実体もない。そんなあやふやなものを探すというのは、本当に骨を折る作業だった。

『探そう。せめてその断片だけでもいい』

朝方に耿輔が言った言葉を胸中で繰り返す。だが繰り返せば繰り返すほど、疑問が浮かんでくる一方だ。

そもそもにして、あの風自体が特殊なのだ。普通とは違って探り入れることができない。まるで誰かに見つかるのもかわりを持つのも、その全てを拒んでいる。そんな感じなのだ。

故に証拠もなければ断片もない。肌の粟立つようなあの恐怖だけは根強く残っているくせに、他のものは行方知れずのままだ。

タンスの隙間を覗き込んでいた大輔は、その顔をあげた。昨日あれだけの被害を受けた代物だから、何か手がかりの一つでもあるかもしれない。

淡い期待を込めて真っ先に向かってはみた、ものの、結局何も見つからなかった。隙間に手を入れて召喚風術の『導きの手』を唱えてみても、集まってきた風に違和感はない。いつも以上に集中してできる限りの力で集めてみても、結果は同様だ。

それから引き戸一段一段に手を当てて意識を向けてみたり、はたまた届きそうもないタンスの上にもでも集中してみたが、そんな中でさえ何一つ変わらない。おかしな風が詰まっていることはなかった。

しょうがない。駄目で元々、やってみるしかないか。

いきなり大輔はその場にしゃがみ込むと、タンスと接触している部分の畳に手を当てた。先ほどの引き戸と同様に、畳に意識を集中させる。ゆっくり撫でるような動作で、大輔は昨日タンスが倒れた辺りをなぞっていった。結果はやはり、出てくれない。

何だよこいつ、かくれんぼの名人か？ 怪訝そうに顔を歪めながら、大輔は部屋の中を見渡した。ぐるりと見れば、一人でいるのは相当広い。なんだか寂しい気分になってくる。

せめて誰か一人でもいてくれればいいのに。そう思ってから大輔ははたと気付いた。

いるじゃないか。一人といわず、相当な数が。

一度大輔は縁側に出、外に誰もいないことを確認した。顧問の突きつけてきたペナルティが本当かは知らないが、耿輔のおかげでみんなが絵に集中していることは確かなのだろう。近場には誰の気配もない。

確認を終えると、今度は風に意識を集中させる。手を上に伸ばしながら、大輔はおいでおいでと手招きをする。と、風はされるがま

まに大輔の元へと集まってきた。

「ねえねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

大輔が聞くと、風は頷く代わりに大輔の髪を揺らしてくる。ホッと息を吐き出すと、大輔は一度緩んだ表情を引き締めた。

「あのさ、一昨日辺りからかな？ ちょっと殺気立っている感じの風が吹くことがあるでしょ。あれが誰なのか知ってたりする？」

だが今度は反対に、黙りこくるかのようにしんと静かになってしまふ。

やっぱり誰も正体を知らないのだろうか……。半ば大輔が諦めかけると、風の精が大輔の肩に乗ってきた。恰好は昨日の風の精と同じだが女の子で、ツインテールがぴょんぴょんと跳ねている。

「わたし知ってるよ。その嫌な感じの風」

「本当!？」

「ただ、具体的じゃないけどね」

目を輝かせる大輔に一つ釘を刺すと、風の精の少女は言葉を続けた。

「あのね、わたし昨日たまたまここにいたの。『祈りの環』が聞こえてくるから何かあったのかって思ってたね」

『祈りの環』とは、昨日三人が使った結界風術だ。確かにそうそう使われるものじゃないから、驚きもするだろう。

ようは野次馬気分だったのかと解釈し、大輔は相槌を打った。

「でも着いてみたら風が変なの。だからわたしは最初、あなたたちが失敗でもしたのかなって思ったわ。でもよく見れば、あなたのお仲間さんが転精しているのが見えて。ああ、失敗じゃないんだなって解ったの」

転精というのは、精霊を神の元へ送ることをいう。確かにあの場所では全てが成功していたのだ。失敗などなかった。

……だが彼女がそういうのも無理もない。風術が聞こえてもなお風に異変があるとすれば普通、失敗したと考えるのが妥当であろう。それに『祈りの環』はこちらも駄目元でやっていたのだ。そう思わ

れてもしかたがない。

しかし話すにつれて、彼女が震えていくのを大輔は感じていた。「それでわたし、何でこんな風が吹くんだらうって思ったの。誰がこんなことをしているんだらうって。……でもね、その気配は私の知っている誰でもなかった」

彼女はそう言うと、震える手で大輔の髪をきゅっと掴んだ。かける言葉が見つからなくて、大輔は無言のまま彼女をそっと撫でる。しばらく震えていた彼女は意を決した後、重い口を開いた。

「あの風は、ここにいろどの風のものでもない」

空気が張り詰めたような気がした。なんだって……、と大輔は思わず口からこぼす。

誰のものでもない風って、そんなのがあるのか？

驚愕の事実を聞かされ、大輔は息を呑んだ。どこまで常識を逸すれば気が済むんだよ。

「私の知っていることはこれだけよ。あんまり力になれなかったわね」

「ううん、そんなことない。ありがとう」

無理に微笑む彼女を見送ると途端、大輔はその顔から笑顔をなくしていく。

新たな疑問が、大輔を苛み始めていた。

七章 (1)

大輔はその場に座りこむと、今までに出た情報を頭の中でまとめた。

まず第一に、あの風は一昨日　美紗と木に登った時から始まったということ。あの時は風の気配も微量で、しかも感じ取ったのは自分だけ。耿輔も慧哉も、悪戯好きの風の精を始めは気にかけていた。

第二にその風は特殊だということ。根強い恐怖感はあるのにそこから探りを入れることはできないし、誰にも見つからないようにと元から存在を断ってしまう。そして新たな情報からして、これは風の仕業ではないとのことだ。

第三に何でこの家ばかりが狙われるのかということ。しかも居間と女子部屋ばかりだ。悪さを働かせるような風は時場所をかまわず狙ってくるのに、その場所が限定されている。

そしてそれらは、必ず何かしらの接点を持つてくるというのだ。一体何がどうなっている。

顔の上に掌を乗せると、大輔は「あー」と唸り声を上げた。すると自棄になって、倒れこむように四肢を投げ出す。大の字に寝転がった大輔はそのまま寝返りを打った。

収穫はあったのに、それが疑問を増幅させただけなんて……。

あー。と大輔はもう一度唸り声を上げた。一人しかない部屋で、声は大きく響いては消えていく。

どうしよう。もう一度見つけてみるか？

そう思い立った大輔はよっこいしょと畳の上で四つんばいになると、横にあるちゃぶ台の下を覗き込んだ。特に何かがあるとは思えない。

それから匍匐前進をするように這い蹲ると、のそのそと大輔はち

やぶ台の下に入り込んでみた。畳にもちやぶだいの裏にも触れてみるが、素材そのものの感触しか感じられない。あの風と思しきものの気配は、微塵も感じられなかった。

「やっぱりこの部屋にはないのかな……」

意気消沈した大輔はちやぶ台の下から頭だけを覗かせて寝転がる。だとしたら次は女子部屋かを搜索したほうがいいのだろうか。今のところ一番の被害を受けている場所だし。……それとも被害のあるなしは関係ないのだろうか。

途方に暮れて、大輔は思わず大きなため息をついた　　が。

「……大輔くん、だよな？」

聞き覚えのある声が、大輔の鼓膜を震わせてくる。その声は最近の関係上もあって、かなり戸惑いをあらわにしていた。

「うわー。一度ならず、またしてもしくじったー」。

大輔は縁側の方へと首を捻ると、疑問の声をあげる。

「よう。綾瀬こんなところで何してるの？」

「ごめん。そっくりそのまま返してもいい？」

「あー……だよな」

美紗から見れば、大輔は相当変な格好をしているように思える。何せもう高校生だというのに、ちやぶ台の下に潜って、しかもだらしなく寝っ転がっているのだ。こんな奴に「何してるの？」なんて聞かれたくないというものだ。

だがそういう大輔の内心も、結構厳しいものがあつた。みんなは絵を描きに行ったから、お昼まで戻ってこないだろう。そう樂觀視していたら、これだ。

本来ならもつと原因の追究ができたのが、ここで一旦打ち切りになつてしまう。さり気なくともこれはきつい一撃だった。

とはいえ今となつてはもう後の祭り。特にここ数分は風術なるものは使っていないかつた。今しがたも続いているこの行動には目を瞑つてもらつとしても、何とか人間としての演技は続けられそうだ。のっそり背中をぶつけないようにしてちやぶ台の下から這い出る

と、大輔は荷物をあさっている美紗に目を向けた。

「何してるの？」

「絵筆忘れちゃったの」

今度は何も言わずに美紗は答えてくれる。

「大輔くんはあんなところで何してたの？」

目的とするものを見つけた美紗はそう言つと、大輔の数歩手前まで歩み寄ってきた。しかし咄嗟に言葉が出ず、大輔は口ごもった。

「あ、あーのね。……シャーペンが見当たらなくなつてさ。どこかになくしたみたい」

何とか言葉を見つけると、そのまま大輔は捲くし立てた。

「ほら一昨日も言つたでしょ。俺つてはおつちよちよいだから、置いたものも忘れちゃつたつていうかね」

勿論全部、真つ赤な嘘だ。シャーペンは絵を描く以外に使つていないし、ましてやこの家の中で出したことさえない。置くことができるわけがないのだ。

あはははー、と笑つてみるが、美紗はまったく笑つてくれない。

あの『ホモ疑惑』以来、なんか妙に避けられているのだ。それが真つ当な人の反応であると大輔も思うのだが、飽く迄それは疑惑にすぎない。事実じゃないだけに、なんだか避けられるのが悲しいのだ。できることなら、ちゃんと話して誤解を解きたいと思っている。

でも大輔は、そのチャンスをまったくつかめずにいた。

けれど今なら、できるだろうか？

ここにいるのは他でもないこの二人だけ。邪魔されることもないし、今なら素直に誤解だと言つことが

「そ、そうなの。……あの、大輔くん。私、もう行くね」

しかしあるうことが、美紗は俯いたまま縁側へと走り出していつてしまう。

また誤解を解けないまま終わるのだろうか。そう思つと大輔の足は自然と床を蹴り、ついには美紗の細い腕を掴んでいた。

「あ、ちよつと待つて！」

「きゃッ」

「うあ、「めん」

驚いて身を捻る美紗に、大輔はいつもの癖で謝った。けれど決して、その腕を放そうとはしない。美紗の怯えるような瞳に気付いてしまっても、臆することはなかった。

でもここままでしておきながら、大輔は次にどんな言葉を持っていけばいいのか。そこに迷った。直接本題を言ってしまう方がいいのだろうか、それだとあまりにも恥ずかしい。

しばらく悩み暮れてから、大輔は思い切って喋り始めた。

「最近綾瀬さ、俺のこと避けてる？」

「え……」

いかにも凶星といった表情だ。美紗はすぐに顔に出るからよく解る。これを確定だと思った大輔は、一つ大きく息を吐き出してから、美紗の顔を再度見つめた。

「それってもしかしてさ、こないだの慧哉とのことだったりするの？」

「……………」

美紗はうんともすんとも言わなかった。けれど背けた顔は、林檎も驚くほど真っ赤に染まっている。

やっぱり。だがそれを自覚してしまうと、大輔もまた恥ずかしくなってきた。

「あのことなんだけどさ」

誤解は解けてくれるだろうか。

心配を胸にたたえながら、大輔は続きの言葉を発した。

……*

話し終わると、なんとも形容し難い沈黙が降り積もってきた。いきなりなものだから綾瀬も混乱しているのだろう。

大輔はそう思うと、罪悪感を感じながら美紗の腕から手を放した。

そのまま背中を向けて部屋の奥に行こうとする。

「あのさ、引き止めてごめんね。それと……黙ってるつもりはなかったんだ。なかなか言い出せなくて、こんなに遅くなっちゃった。本当にごめんね」

美紗の視線を、背中に感じた。大輔はそれだけ言うと黙って男子部屋へと引つ込んでいく。本当はまだ言いたいことはいっぱいあったはずだ。

頑張つて絵を描いてきてねとか、もう忘れ物するなよとか。そういう些細なことさえも言い出せない。言いたいことさえろくに言えなくて、これじゃあ本当のことなんて言えるはずもない。そう、『好き』というたった二文字さえも。

……いや、それは一生彼女に言うことはできないのだろう。人ならざる者は人間に姿を明かせないのだ。そんな人間に恋心を抱くなんて、掟破りもいいとこだ。神様に知られでもしたら、どうなることだろう。

大輔はきゅつと真一文字に唇を引き結んだ。すぐに感情の伝わってしまふ瞼は、もう熱い。

綾瀬を好きにならなければ良かった。

心が悲鳴をあげている。

自分の気持ちが伝えられないのなら、こんな苦しい思いをするのなら。

『好き』なんていう感情なんざ、なくなつてしまえばよかったのに。それは確かに、大輔の中に潜んでいた本音。否定できないこれは、確かに……。

歩きながら大輔は嘆息した。『好き』から生まれる罪悪感が、美紗から注がれる視線で大きくなる。胸がぎゅつと驚つかみにされたみたいに、苦しくて痛くてしょうがない。

諦めると喚く心が泣いていた。未練がましくくらいに痛みを発して、それでも諦めると叫んでいた。そこにはまったく説得力がなかった。

男子部屋のものすごく適当な位置につくと、大輔はその場にしゃがみ込んだ。何をするんだっけと思ひ、しかしすぐに思ひ出す。すると大輔は馬鹿みたいに、ありもしないシャーペンを再び探しだしている。

あまりにも滑稽な姿だと思った。叶わないと願っていて相手を好き、ないと解っていてシャーペンを探している。どちらも結末が解っているのに、こうやってもがいて。

なんて愚かな姿なんだろうと、正直に思った。

静かになった室内で、大輔のないもの探しをする音だけが鮮明に聞こえてきた。がさごそと鞆をほじくり、しばらくしてから布団の間を探し始める。

すると敷布団を持ち上げる手に、大輔のじゃない手が混じった。

何だろう。思ってその手を辿っていくと、さっきまで縁側に立っていた美紗が視界に入る。仰天しているはずなのに、出てきた言葉は思ったよりも落ち着いていた。

「……綾瀬……」

「手伝うよ、シャーペン探し」

「でも……っ」

シャーペンないんだよ。って。

言おうとしたけど、その前に大輔の言葉は遮られた。

「いいの。手伝いたいんだ、わたし」

解っている、解っている。

この気持ちが叶わないことなんて、とっくの昔に気付いていた。

「大輔くん、ゴメンね。変なこと思ったりして」

それでも嬉しいと思っってしまうのは罪だろうか。このまま時が止まってしまうと思っってしまうのはいけないことなのだろうか。

でも単純に嬉しい。大輔はそう感じていた。

だから許してください。

「ん、いいよ。気にしてないから」

彼女をだましてしまうことを。

そして少しでも共にいようとすることを。
風の神よ、どうか許してくださいますことを……。

たたまれた布団をめくって、中から枕を持ち上げて、最後に敷布団と畳との間を探しながら時は過ぎていった。

当たり前だけどシャーペンなんか転がっているはずもない。それなのに真剣に探しているのは何でなんだろうと大輔は思っ
あ、綾瀬といるからかと一人納得した。

さっきまでのぎこちなさは、もう二人の間からは消え去っていた。
来た時と同じ、何でも気さくに話しかけられる。

笑みは絶えなかった。

一緒になって地面に這い蹲っているのでさえも楽しい。
いろんなことを話しながら、二人は架空のシャーペンを探し続けていた。

最後の敷布団を引き剥がすと眉を顰めて笑いながら、二人はその場に座り込んだ。大輔は畳の上に、美紗はたたまれた布団の上それぞれ座る。二人の身長差は頭一つ分開いていた。

「そういえば最近、夕立すごいよね」

振り返りながら美紗は、しみじみと言った。というのもこの布団は女子部屋との通路になる襖の前に置かれているからだ。

そうだ。すっかり風のことを忘れてたと思いつつ、そうだねと大輔は相槌を打った。

「古いんだよね、この家」

「らしいね。でも滝みたいなの雨漏りは勘弁だよな」

美紗の言葉に頷きながら、大輔はあの現象を思い出していた。

そうか。早く片付けないと、またひどい目にあってしまう。美紗と話しながらも神経を研ぎ澄まし、まだ踏み入っていない女子部屋へと意識を集中させた。

だが直接入っていないせいも、なかなか状況が読み取れない。漠然とある気配。穏やかな風がそこかしこ駆け回っている。

さらに意識を襖の奥へと向けた。すると何か黒い気配が漂ってくる。

「……ッ」

これ以上ない怖気が大輔の身体に這い回った。全身が痺れるみたいな恐怖が心に生まれる。これは確かに、あの歪んだ風だった。

ふよふよと襖の隙間から、あの風が漏れてくる。昨日感じたものよりも、さらに強大な力を秘めているようだった。浴びただけですべてがくず折れそうになる。

「どうしたの大輔くん。顔色、悪いよ？」

ああ、そうかもしれない。大輔は言葉にはできずに心の中で返答した。

不審に思っ、美紗が大輔の顔を覗き込んでくる。じっとしてられないように大輔の視線を追うと、何もないうと呟いた。

「綾瀬……、伏せろ」

「え？」

隙間から入りきらない風が、襖戸を揺らしている。不気味にカタカタと音がしている。

意識を集中させ、大輔は難しい顔をして気配の根源を探る。でも

(見えない！?)

辿ろうにも殺気の方がすごく、意思を表しているかのようにそれは真っ黒に染まっていた。それはもしかしたら、闇よりもなお濃い色をしているのかもしれない。

暑さじゃない汗が、大輔の頬に一筋伝った。

風が襖の向こうでとぐるを巻いて、こちらを窺っている。

「伏せる綾瀬!!」

美紗を横に押し倒すと途端、襖戸がはじけ飛んだ。あれだけ強固にあった襖戸はいと也容易く抜け飛び、縁側の仕切り戸に当たって大きな音を立てて止まる。

そして遮る物をなくした歪んだ風は、突風となって二人を襲いか

かってくるではないか。大輔は美紗を庇うが、あまりの息苦しさに小さく苦痛の声を洩らした。腕の中で、美紗は目を丸くしている。大輔はくつと喉を鳴らしながら、前を　女子部屋の中を見る。だがそこには何も無い。黒い風はそこに溜まっている分だけ機械的に次々と吐き出され、それが終わると突風もぴたと止まった。

一体何が……。

呆然とする頭の中は、今の出来事を把握しきれていなかった。だがその中で、あの風の精の少女が言った言葉が脳裏をよぎっていく。『あの風は、ここにいるどの風のものでもない』
確かにそうだ。こんなことができる風なんて、どこを探してもいるはずがない。

だがこれで確かに解ったことがある。あの風はこのあたりの何かが原因で発生しているのだろう。風ではない者の仕業によって。そしてそれは日数を重ねることに濃く、より強大なものと変化しているのだ。

もうこれ以上、待つてはいられないだろう。

大輔はいつの間にか止めていた呼吸を吐き出すと、きゅつと腕に力を込めた。腕の中の美紗は何が起こったのか解っておらず、ただ言葉もなしに震えていた。する術が解らなくて、大輔は言葉もなしに、美紗の背をゆっくりと撫でてやった。

「大輔！！」

しばらくすると、縁側の方から耿輔の叫び声が聞こえてきた。見ればその奥には慧哉の姿もある。二人は垣根を易々と飛び越えると、わき目も振らず大輔たちの元までやってきた。

「お前ら大丈夫か！　怪我とかねえよな！」

すると開口すぐに、耿輔は鼓膜を突き破らん勢いで叫んでくる。走ったためだけではないのだろう。呼吸は乱れ、荒れ狂っている。

心配で血相を変える兄を、始めて見た。

こんなに傷つく恐怖を湛えた兄を、大輔は始めて目にした。

「うん。平気だよ、二人とも」

慧哉に美紗を預けると、大輔は震える兄の前にしゃがみ込み、その背中をそつと撫でやった。今朝方されたみたいに、心につつかえている物が溶けていくように……。

二人の呼吸は、徐々に平常を取り戻していく。

「兄貴、大丈夫だよ。みんな無事だよ」

いつもより小さく感じる耿輔の背中にさすっていた手を止め、大輔はそつと顔を覗きこむ。

「そっか。……よかった」

しかしそう言うと共に、耿輔は意識を手放してしまっていた。

ぐったりと重くなった耿輔の身体に、大輔は思わず息を詰まらせた。

八章 少女と少年とスケッチブック

耿輔が倒れた。日頃の疲れが、ここにきて祟ったようだ。

部長の不測の事態に一番冷静だったのは、そばで見守っている夕イプの幸恵だった。いつもの彼女からは想像もできないくらいはきはきとしていて、狼狽える部員を宥める。また状態を診る時でさえもその手際はよく、幸恵のおかげで耿輔の容態もだいぶ落ち着いてきたようだ。

そんな今、大輔は男子部屋にいる。いきなりの事態に、耿輔が倒れたのは自分のせいだと思っているらしい。

俺が足引っぱっているから、兄貴はこんなめにあつたんだ。だからせめて、そばについてあげなきゃいけないんだ。そう言っ引きこもりっぱなしだ。

誰もあんな大輔を見たことがなかった。

何とか励まそうと美紗は思い立ってみたが、それも却下されてしまふ。無理に励まそうとすれば、逆に落ち込ませてしまつだらうから。

「今はそつとしておいてあげて」

幸恵はそう言うと、みんなを席に着かせる。

合宿が始まって以来、初めてこんなにも静かな時間を迎えた。

……*

まだ夜も明けきらない早朝に、大輔と慧哉は床を抜け出した。向かった先は、隣室。

誰も起こさないよう静かに襖戸を滑らせながら、難なく部屋を移動した。

入った部屋はあの居間だ。居間には一つだけ布団が敷かれており、

そこには未だ気だるそうな耿輔の姿がある。

昨日の夜、耿輔はやつと目を覚ましたのだ。その時の彼は自分の身に何が起こったのかを、まったく理解できないでいた。

ただぼんやりとする視界の中で、ぼろぼろと涙を流している大輔の姿だけが鮮明に浮かび上がっている。暗い室内だったのに、あの表情はやけにはつきりと覚えていた。

それからしばらくしてから、水の入った桶を手にして幸恵がやってきたのだ。最初は驚いていたようにも見えたが、すぐに微笑を浮かべ、「まだ安静にしてくださいくださいね」と釘を刺されてしまう。

幸恵は耿輔の額に乗せたタオルを水に浸すと、ぎゅつと絞ってからまた耿輔の額に返した。どうやら熱が出ているらしい。新しく水を含んだタオルが、とても冷たく感じられた。

「なあ城戸」

「なんですか、先輩？」

「……俺に何かあったのか？」

聞くと、幸恵はすべてのことを耿輔に話した。大輔と話している間に気を失ったこと、疲労と環境の変化により体調が崩れたこと。

そして昼間からずっと目を覚まさず、大輔は自分を攻めながらもそばについていてくれたこと。

聞けば聞くほど、とんでもないことを引き起こしていたことを思い知らされた。思わず苦い表情のまま耿輔が視線を逸らすと、幸恵は柔らかな表情を湛えながら布団を直す。

「ともかくゆつくりしてくださいね。これ以上悪化されると、部員が心配して押しかけてきますよ」

「それはちよつと……」

かすれた声でおどけるように言うと、幸恵はにこつと笑った。未だ隣で心配そうにしている大輔を宥めると、幸恵は桶を持って立ち上がる。

「あ、あとさ悪い。寝る時になったら声かけてくんねえ？俺居間に行くから」

「別にかまいませんけど、どうしてですか？」

退室しようとした矢先に声をかけられ、疑問をあらわにして幸恵は振り返った。

「いや。他の奴にうつすのも困るし、無駄に心配されるのとか苦手だからさ」

恥ずかしそうに頬をさらに紅潮させる耿輔を見て、その優しさを幸恵は受け取った。

「解りました。ではみんなに言っておきますね」

幸恵は今度こそ静かに退室する。ややしてから耿輔は「大輔」と呼んだ。

「明日の朝、夜が明ける前に慧哉をつれて居間に来い。いいな」

目を腫れぼったくさせた大輔は、耿輔の言葉に素直に頷く。

そういう成り行きがあつて、こんな早朝にもかかわらず三人が居間にそろっているのだった。

布団の上に座っている耿輔がちよいちよいと手招きをしてくる。

再び音を出さないように襖を閉め、二人は忍び足で向かっていった。

「もう大丈夫なの？」

「ああ、だいぶ楽になった」

だがそう答える声は、いつもより幾分低い。本調子に戻るには、まだまだ時間を要するようだった。

二人を隣に座らせると、耿輔はずいと顔を寄せてくる。

「で、昨日のことなんだが。……何か手がかりは見つかったか？」

小さかった声音をさらに小さくし、耿輔は険しい表情をしてそう言う。

慧哉は首を横に振った。

「こつちには何もありませんでした」

「大輔は？」

視線が注がれる中で、大輔は首を縦に振る。

「女子部屋。昨日の場合だけど、あそこから風は漏れていた」

それから大輔は声を潜めながら、昨日気付いたことを順を追って

すべて話した。渋い顔をしながら聞いている二人に、大輔はさらに付け足す。

「風の精の女の子が言っていたことは、うそじゃないと思う」

「『ここにいるどの風のものでもない』ってやつか？」

「うん。あんなにおかしな風、どんなに優秀な風の精でも使えるはずがないって」

耿輔の声に深く頷いて、大輔はそう断言した。

「確かに。自分がいないところで溜めていた風を動かすのは多少であれば可能だろうが、……あそこまで強力で動かすことは、まず無理だろう。風の精じゃなくとも風使いだって、並大抵の奴が使えような力じゃない」

顎に手を当てながら耿輔は呟いた。

「風なのに風のものじゃない、か……」

それらを吟味するように耿輔は頭の中で転がしながら言う。

「風じゃない。それが何を意味しているのだろうか。」

「だったら俺も、一つだけ引つかかるものがあるんだ。……けど」

言いかけて耿輔は言葉を嚥む。その瞳には明らかな疑念の色と

打ち消したい否定の色とが相混ざっている。

だがすぐに意を決し、耿輔は続けた。

「昨日、俺も風の精から聞いたんだ。そこで言われた言葉は『皆さんが来てから、風の色が変わった』」

空気が凍りついたかのように、サーッと冷たくなっていく。

耿輔は、今何て……

「つまり俺たち美術部員の中に、これらを引き起こしているであろう奴がいる」

「ちよッ、ちよッと待ってよ兄貴。だって俺たち以外はみんな人間なんだよ？」

「そうですね。そんなことってできるんですか？」

戸惑いの声を二人はあげた。

「解らない。だけど……そうとしか考えられないだろう」

しかし耿輔はその事実にも否定とも肯定ともつかない言葉を残すのみだ。曖昧なだけに、二人の不安は一層つのる。うす暗い闇を静けさが支配した。今は誰を見ても平常を垣間見ることはできない。

古い家屋特有の、ピシンと木のずれる音がした。それはやけに耳について離れなかった。

「どつちにしろ、俺たちは原因になりそうなものは疑わなけりやいけねえ」

静けさが耳につき、声は余韻を残して消えていく。事実なだけに、誰も耿輔に反論することはない。

悲しいかな。それが人ならざる者の使命なのだ。

「仲間を疑いたくないのは解る。でもお前たちに、それができるか？」

すぐに頷くことはできなかった。

疑うということはつまり、相手との間に心の闇を作るも同然だ。けれど数秒とせずには慧哉は顎を引く。大輔も合わせて頷いた。

「そうか……、とすまなそうに耿輔がポツリと言葉を洩らす。瞼を伏せると、より悲しそうな印象を与えた。

「俺はこんな身体だから、行けるかどうかは解らない」

耿輔は寂しい微笑をその顔に浮かべる。

「難しいとは思うが、今日中に犯人を見つけれ。俺もできる限り、力は貸す」

大丈夫か？ と尋ねると、二人は即答する。

はい、という返事に迷いはなかった。

…＊…

体調の優れない耿輔に留守を任せて、部員たちは外に出た。天空に広がる夏空は、光の神の力でどこまでも元気のいい陽光を地上に降り注いでいる。

慧哉と話し合い、一足先に大輔は最初に歪んだ風を感じたあの場所へと赴くこととなった。ある作戦が故だ。そしてそれまでの間、できる限り慧哉が部員たちを見張っていてくれるという。

うきうき気分歩いていったあの道を、今は間反対の感情を込めて突き進んでいく。

本当に仲間の中に、こんなことをする人がいるのだろうか……。

そう考えるだけで大輔の気は、どんどん滅入っていった。

仲間を疑いたくない。確かにそのとおりだ。

でもそれ以上に、大輔は部員の中から犯人を知る。そのことが何よりも怖かった。できることなら耿輔の風の精の言ったことがはずれてほしかった。

また振り出しに戻ってもいいから

すると突然、風景が切り替わった。

生い茂っていた木々が途端になくなり、短い草原が視線の先にさらさらと広がっている。そして草原の先は、あの切り立った断崖。着いてしまったんだ。

そう思うと、胸の奥がチクリと痛んだ。どうしようもないくらい、苦しかった。

だってここから、全てが始まってしまったのだから……。

一歩足を踏み出して、大輔は陽の下に姿を曝した。眩しい陽光。

吹きぬける風は、穏やかそのものだ。あんな歪みなんて、微塵も感じられない。

そこにはいつもの光景が広がっていたのだ。

「あ、大輔発見！」

すると聞こえてくるのは明るい声。大輔は覇気のない様で、ゆっくりと振り返った。そこには耿輔を除く部員全員が集まっている。

彼らは大輔の存在に気付くと、足早にその場所へとやってきた。

しばらくしてから大輔は、努めていつもの笑顔を作る。

「どうしたのみんな？ 目的地が一緒だったとか？」

「んな奇蹟があるかタコ」

「じゃあ……」

「集団行動。って言ったほうがいいのかな？」

「貶す真衣とは違い、尋希はきちんとしたことを述べてくれる。」

「大輔、話を聞く前にいなくなっちゃったんだもん」

「そうだったんですか」

勿論大輔はそのことを知っていた。これが慧哉との、いわば合流地点だ。

部員を見張るのだから、誰がどこにいるのかくらい把握したほうがいいだろう。

そういうことになり二人は頭を捻った。なにせ風使い以外の部員は四人もいる。その四人のいる位置を全て把握して、なおかつ大輔がああ場所で風を探す時間を稼がなければならぬのだから。

いかに解決すべきかと悩んだ挙句、出てきたのが『互いが描いた風景を巡って、その間に大輔が異変を見つける時間を稼ぐ』というもの。

絵を描いた場所を巡り批評しあうよりも、それぞれが行くであろう場所を慧哉が覚え、しかも集団行動により一箇所にまとめてしまおうという大胆さ。

そして美紗と大輔が描いたこの場所を終点にし、ここから二手に分かれようというのだ。慧哉から聞けば、誰がどこに絵を描きに行くのかも解るからだ。

しかしそんな裏があるなど知らない尋希は苦笑いを浮かべると、知らなかったふうの大輔に「実はそうだったんだなあ」と洩らした。「ごめんなさい。……で、何をするんですか？」

「みんなが描いたところを巡っていたんだけど。もうここで終わるんだ」

「うそっ！？ マジすか」

「マジすよ」

あまりの落胆っぷりに、尋希はよしよしと背中を撫でた。

「これからはいつもみたいに自由行動だから、ね。お昼になったら

帰ってくるように。おっけい？」

「りょーかいッス」

いつもの表面。だがその腹の中では何かが深々と冷たくなり行くのを、大輔は確かに感じていた。

明るい時間は、過ぎ行くのだろう。さて、ここからとうとう分かるのか。

みんなが和気藹々と話している中、大輔は慧哉に視線をやった。

慧哉は警戒するような視線を部員たちに向けていて、大輔に気付くと小さく顎を引く。

「慧哉。場所はどつする？」

歩み寄りながら聞くと、慧哉は強張った顔のまま小さく唸った。

「お前はここに留まれ。綾瀬と樺沢がここに残るみたいだ」

「慧哉は？」

「俺は城戸先輩と近い場所だから、そつちに行く。副部長も大体見える位置だし」

「解った」

穏やかな光景が、どこまでも続いている。この先に本当に不安なところがあるのだろうか。

渦巻くのは罪悪感か、それとも色濃くなる一方の心配か。それさえも解らずに、大輔は思わずきゅっと服の裾を握りこむ。

すると二人の視界の端で、先輩たちが絵を描きに行こうとしているのが窺えた。言葉なしに健闘を祈ると、慧哉は急いで二人の元に駆け寄っていく。そう大した時間もかからないで、三人の姿は森の中へと消えていった。

慧哉を見送ってから大輔は、いつもどおり木に登るとスケッチブックをそつと広げる。しかし絵を描いていてさえも、その視線は常に二人の行動を気にかけていた。

こいつらの中に、犯人がいるのだろうか……。

そう思うと、途轍もなく嫌な気分になってくる。個人的には「いない」と断言してしまいたいのだが、そうもいかないものだから余

計に憂鬱な気分が駆られた。

「なあ樺沢。お前どんな絵を描いたの？」

そんな気分に耐え切れなくなった大輔は、とうとう木から飛び降りると、真衣の元へと駆け寄っていく。大輔に気付いた真衣は「ん」と言つと、ぐつとその手を出してきた。

「まずお前の絵から見せな」

「えー。色塗りが途中だよ？」

「ならお互い様だつつの」

ほれ、と迫られたので大輔は渋々スケッチブックを渡す。それを真衣は食い入るように見ると、へえと感嘆の声を洩らした。そこには製作途中とはいえ、高校生にしてはそれなりの絵が描かれている。昔から五教科以外は得意だったから、大輔はそれなりに絵には自信をもっていた。あくまでも自分の中の基準では、だが。

「……こんなのを見た後だと、見せるの嫌になるな。マジで」

そう言いながら真衣は大輔にスケッチブックを返すと、自分のものも同時に手渡す。描かれているのはこことは全くの別方向。下宿先にいく過程で通った、あの道だ。

「なんだ、もうできてるようなもんじゃん」

「あと陰影とか、そのへんなんだけどね。さり気なく難しかった」

「ああ、確かにこればかりはね」

「ここが難しい、あそこがややこしい。」

そんな話をしていると……あの風がまた漂ってきた。大輔は瞬時に背筋を凍らせる。

何で今なんだ？ わけが解らず、でも根源を探ろうと必死になる。それでもあの風はどす黒い気配を放出する一方で、探ることさえ叶わない。

「こんなに、近いはずなのに。」

舌打ちしかけて大輔はハツとした。近いつて、まさか

「そつだ。美紗のも見せてよ」

風が、揺らぐ。

「え、でもまだ途中だし」

「だいじよぶ。あたしたちも十分途中の域だったし、美術部なんだから今さらでしょ」

ゾツとする。

黒さが、歪さが。力が増していく。

どうしてなんだよ。

……そう思った瞬間、不意に視界の色が違うものへとなっていた。

真衣の笑顔が、突然掻き消された。……いや、違う。

「樺沢！」

飛ばされたんだ。風に。

そこには全てを吹き飛ばさんばかりの強風が、悲しみをあらわに渦巻いていた。そしてその風の中心には、美紗がいる。

風はそれだけでは留まろうとせず、遠く彼方から積乱雲を呼び寄せていた。あつという間に空を覆うと、土砂降りの雨と共に稲妻が天を走っていった。破裂音のように耳を劈かんばかりの音が、すぐ近くで聞こえる。

まさか美紗が犯人なのか

急いで真衣を立たせると、大輔は安全な場所へと連れて行くこと試みた。真衣はすでに口を聞けずにいる。相当気が動転しているようだ。

勿論気が動転しているのは大輔も同じだった。安全な場所といってもそれがないうちに気付いてしまい、不安感は一層高まる。すると最初の異変で気付いたのか、森の中から二つの足音が聞こえてきた。慧哉と耿輔だ。

耿輔はやはり万全じゃないためか、慧哉のずっと後方を走っていた。しかしそれでさえも天の助け。

「頼んだ！」

大輔は慧哉が近づいてくるのを見計らい、真衣の背中をぐっと押した。よろけるように不安定な真衣は慧哉に抱きとめられる。これ

で真衣の安全は確保したも同然だ。

また慧夜は大輔の意図を察すると、真衣を抱え込み再び森の中へと引き返していく。二人の姿が消えるのを見計らってから、大輔は美紗の元へと駆け寄っていった。入れ替わりに耿輔がこの場に現れる。だが現時点で耿輔の息は既にあがっていた。

「大輔！」

耿輔の叫ぶ声が、激しい雷雨の中で聞こえる。大輔は美紗を抱き寄せ

「捕まえる！ 綾瀬のスケッチブックが根源だ！！」

その手からスケッチブックをひったくった。

そこからは止め処なく、嫌な風が放出されている。

不穏な空気が、空を覆い尽くしはじめていた。

九章 君と共にいられるために

火の御子^{みこ}と水の御子は、城下へと来てしまいました。勿論みんなには内緒です。

そして最初に行くことを否定をしていた水の御子も、今は違いました。

二人とも目を輝かせていたのです。

「城下つてすごいね。人がいっぱいいる」

「そうでしょ。やっぱり来てよかった」

二人は人の住まない場所から出たことはありません。ましてやさな御子の村でしか生活をしたことがないのです。

なのでこれだけの しかも人間の数に、圧倒されているのです。

水の御子が感慨にふけていると、得意になって火の御子が言います。

「人間は毎日、こういうところで暮らしているんだよ。……ほら、

あそこに出店がある」

言うなり火の御子は、走って行ってしまいます。

水の御子は必死になって、その後を追いかけてきました。

でも……。

「きやあああ!!」

人の流れが止まりました。二人もつられて、その動きを止めました。

どよめきが流れるようになってきます。

「火事だ!」

誰かの叫び声が、賑やかな城下に響き渡りました。

二人が振り返ると、そこには焚き火だったものがあるではありませんか。それは建物を吸い込むと大きく成長して、どんどん赤くな

つていくのです。

誰かが消防団を呼んでくると、駆け出していきました。

数人の男は、近くにある堀から水を汲んでは駆けています。

それでも炎はみるみる大きくなってしまいました。

黒い煙が赤い火花を抱えて、蒼い空を覆おうとしています。

自分の友達がこんなことをしてしまっていることに、火の御子はいてもたってもいられなくなってしまいました。

そしてついに、いてもたってもいられなくなった彼は、駆け出していつてしまいました。

彼はとうとう、人間の前で詩を唱えてしまったのです。

…*

強くなる一方の雨風に大輔は狼狽えた。

雷鳴はひっきりなしに、頭上で轟き続けている。降り注ぐ雨は二人を囲い、まるで矢のように鋭くなっては地を射抜いてゆくのだ。

肌に刺さるそれは、眉を顰めるほど痛い。だが更に痛いのは時間が経つにつれ、強さを増していつてしまう風の存在だろうか。

クソツと声をあげながらも、大輔はスケッチブックから溢れる風を止めようとした。美紗がいるため風術は使えない。だから何とかして話しかけようと試みる。

しかしどれだけ話しかけ足掻いてみても、溢れ出す風は止まらな
い。スケッチブックから共に流れ出る歪んだ気は、けして正常を取り戻どそうとはしなかったのだ。

しょうがない。大輔はいさぎよくあきらめると、荒れ狂うスケッチブックを足元に放りやった。本を落とした時のバサツという音が、風に巻き上げられながら耳に入る。そして空いた両手で、大輔は美紗の身体をぐつと引き寄せた。

……きつと綾瀬が、何かを知っているはず。

根拠もへつたくれもない。ただの勘と言ってしまっても過言では

いかもしれない。にもかかわらず、大輔はその一筋の希望に全てを賭けようとした。

「綾瀬、何があつたんだ？」

細い肩に手を乗せ、大輔は前後に軽く美紗を揺さぶった。しかし聞こえていないのか、虚ろな瞳のままに美紗は俯いている。

「ねえ綾瀬！」

雨風に負けないようにしたら、声はうんと大きくなってしまった。そのせいか、美紗の背が恐怖に小さく震える。

俺は綾瀬を苦しめているのかもしれない。

途轍もない罪悪感が、大輔の胸中に生まれた。それでも大輔は呼びかけをやめようとはしない。必死になって、必死になって。

「黙ってないで言つてよ」

美紗に呼びかけ続けた。それは彼女を想う気持ちだが、大輔にあつたからだ。

もしも……。そう、もしかしたら美紗の言葉の中に、彼女を庇える何かがあるかもしれない。

何としてでも、この大好きな綾瀬を守りたい。だから

「お願いだよ綾瀬……」

たった一言でいいんだ。

か細い声で囁くと、美紗を抱き寄せる腕に大輔はきゅっと力を込める。

そう。たった一言、お前の身に起きたことを俺に教えて。教えて

でも美紗は、やっぱり何も言つてはくれない。

「……綾瀬……」

脳裏に焼きついているのは、今までの美紗の姿。無邪気なままのあの様。

認めたくない、認めなきゃならない。

信じたくない、信じざるをえない。

本当にこれをしているのは綾瀬なの？

相反する意見が互い、大輔の頭の中で葛藤した。そのたびに心は痛みを発する。

お願い。何でもいいから言ってよ。

その言葉を伝えるように、大輔は小さく「綾瀬」と洩らした。すると美紗はその小さな身体を震わせ、縋るように大輔の服を掴んできたのだ。

「大輔くん、……ゴメンね……」

消え入ってしまいそうなほど小さな声を、しかし大輔は聞き逃さなかった。

歪んだ風が、微かに揺らぐ。

「わたし、見ちゃったの。……大輔くんが風を……動かしているの。それから、……慧哉さんと部長と三人で、小さな小人みたいな子を捕まえているのも……」

刹那、大輔と耿輔に衝撃が走った。

綾瀬に正体がバレていた　！？

あまりの事実、美紗を抱きしめる腕から力が抜け落ちる。

それは彼らの精神を揺さぶるには、十分すぎる威力を持っていた。

「解んないよ、大輔くん。……わたし、もう……」

その声にいつものような明るさはなかった。

まるで道に迷った子供のよう。

「助けて……」

美紗が一筋涙を流す。風が今までで一番、強大になった。

息を呑み、大輔は美紗を庇うのを思い出して再びその腕に力を宿す。そしてはたと別のことも考えた。

もしかしたらこの風は、綾瀬の心の闇なのか？

風が、雨が、二人を取り囲んだ。まるで自然の鳥籠が、二人に覆いかぶさるかのよう。

外界から完全に隔離されてしまったのだろうか。外で耿輔が何か叫んでいるが、まったく聞こえてこない。

どうして？ 何で聞こえないの、一体何が起きているの？

……ここにいるのは、自分と美紗。たった二人だけ？
もう誰の手も借りられない。

重石がぐつと、大輔の胸に押し掛かった。じりじりと迫り来るプレッシャーは確かにある。

それでも、もうこの風を止められるのは自分しかないのだ。

誰にも頼れない。

仲間として、自分に何ができるだろう。

抱きしめること？

耳元で囁くこと？

それとも、必死で神に縋ること？

いや、違う。風使いとして、仲間として。綾瀬の心に吹く風を取り除いてやるよ。心配も恐怖も拭い取ってやるよ。

だから今、自分にできることと言えば、

「綾瀬聞いて」

腹を括った大輔は落ち着いた声色で美紗に話しかけた。そう。

「信じられないかもしれない。けど俺たち、本当は風使いで……人間じゃないんだ」

心の闇が晴れるなら、禁忌だつて犯してやる。

腕の中で美紗が微かに強張った。そこにあるのは明らかな恐怖心だつた。

目に見える拒絶に、大輔の心は少なからず傷ついた。こうなることくらい解っていたのに、言いようのないほど心は苦しくなる。それでも苦しみを堪え抜くと、大輔は話を再開させた。

綾瀬が納得するためだつたら、なんだつてしてやる。たとえ心が傷つこうが、全身から拒絶されようが。そんなのもう、かまわない。そう心に決めただから。だから

「俺は神の子供だよ」

美紗が顔を上げ、大輔の淡い紫色をした瞳をじつと見ている。

「大丈夫。心配しなくてもいい」

ふわりと美紗を優しく抱き寄せた。大輔の肩に、美紗の顔が当た

っている。

大丈夫。

囁けばその分だけ、美紗の身体から緊張感と恐怖が抜けていくのが感じられた。

そして乱れた風が弱まっていくのも、しかと感じることができる。

「ねえ」

風が気配を消す寸前。

「俺、綾瀬のことが好きだよ」

最後に一等小さな声で、大輔は胸のうちを言葉にした。

…＊…

火の御子は掟を破って、人間の前で火術を使ってしまいました。

するとどういふことでしょう。火の御子は今までいた城下から突

然、見知らぬ地へと移っていたのです。

「御子よ。どうして掟を破りました？」

するとそこには真っ赤な髪と瞳をした、美しい人が立っているではないですが。

火の御子はきよんとして　それが我らが母であり父である火の神様だと気付きました。

彼は思わず、口を噤みました。

掟を破った者には重い罰があると、そう聞いていたからです。

「言ってみなさい」

火の神様は優しい声で、そう促しました。

「火が。…火が回っていて、消防団が来なくて。だから……」

「消そうと思っただのですか？」

火の御子は、コクンと頷きます。

それを見た火の神様は、優しく微笑みました。そして火の御子の頭を撫でると、ゆっくりと口を開きました。

「解りました。ではあなたは　」

この後火の御子がどうなったのかを知るものは誰もいません。火の神様と火の御子だけが、知っていることですから。

御遣いは人間と交わってはいけない。それを破った時、その者には重い罰が下されるのだ。

大輔は感じていた。もう風使いのままではいられないだろうと、この世界にはいられないだろうと。

それだけのことをしたという自覚が、自身の中で確かにあったから。

…＊…

雲は引き、風はやんでいた。

木々は陽光に雫を輝かせ、小鳥はどこかで囀っている。

ああ、戻ったんだ。ぼうつとした意識が、それだけを理解した。

うん、確かに日常が戻っている。

美紗とをつないでいた手を放すと、大輔は天を仰ぎ見た。

キラキラと輝く陽光が、ここにいる全てを照らしている。けれど

大輔が見ているのは、それじゃない。

そろそろ迎えが、来るはずだから……。

ぐっと胸が苦しくなるのは、どうしてなんだろう。

思わず涙が零れそうになる瞳。鼻の奥が鈍く鋭い痛みを発していることを自覚しながら、大輔はそうかと思っただ。

俺はもう、ここにはいられないんだ。この世界にはいられないんだ。

両親や耿輔、慧夜は勿論のこと、クラスメイトや友達や部活の仲間や 何よりもう、綾瀬に会うことさえできない。それはつまり、永遠の別れを差しているのだろう。

もう、誰にも会えない。

これで見納め。

そう思うだけで、大輔の胸は詰まるように苦しくなっていくのだ。淡い紫の双眸が涙に揺れ、蒼い光を反射する。とそこに、ふわりと誰かが舞い降りたのだ。南の海のように淡く美しく輝く水色の髪と瞳を持った、水の神が。

「え……」

大輔は混乱した。自分は風の御子。ということとはつまり、目の前にいるべきは風の神であるはずなのだ。だがここにいるのは、まじうことなき水の神。

どうして彼の方が？

そう混乱していると、水の神はふわりと微笑んできた。

「風の御子さん。うちの者が迷惑をおかけしたようですね」

その声は笑顔同様にやわらかく、心が芯から温かい。

「えと……」

しかし大輔は、抜けた声を発することしかできなかった。あまりにことが唐突すぎて、さらに頭の中がこんがらがる。

うちの者？ 迷惑？

それって一体何を指しているのだろう。

「あの、水の神様。一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「ええ。一つと言わず、幾らでも聞いてください」

につこりと微笑んでくれる神に会釈すると、大輔は直球よろしく疑問をぶつけた。

「自分が罰せられるのではないのですか？」

そんな直球を喰らった神は、しばし理解ができずに一度首を傾げる。だがそれを解すると、水の神は可笑しそうにふふつと笑った。

「それは勿論です。私たちにあなたを罰する理由などないのですから」

「では……何故このような所へお出でになったのですか？」

「ああ。この子が目覚めてしまったようなので」

そう言つと神は、優しい表情を湛えたまま、美紗の頭をそつと撫でた。

「風の御子さんも、一度は聞いたことがあるかと思いますが。……この子は迷いし水の御遣いなのです」

えっ、と大輔は声を洩らす。

確かにその類の話は、大輔も聞いたことがあった。この世に神の御遣いとして生を授かったとしても、力に目覚めないで自らを人間と思ってしまう御子がいる、と。

それが迷い御遣いだが……まさか美紗が？

大輔が神の瞳を見つめると、彼は優しく微笑んでくれた。その姿はまるで父のように温かく、母のように優しい。

「この子にはお話をしないとですね。自らの使命は、知っておくべきでしょうから」

確かに彼は、御子の親だった。

終章 懐かしの陽光に照らされて

気が付けば、大輔と美紗は一緒になって、あの場所に突っ立っていた。

天井は晴れ渡っている。今、この地は快晴。あそこまで立ち込めていた雨雲も、やはり今は一つもない。

風はそよそよと頬を撫で、あたり一面を覆っていた雨水は綺麗さっぱりなくなっていた。まるで全部が全部、夢のようだ。白昼夢を二人して見ていたのではないかと、そうにさえ思ってしまう。

けれどそれが、夢でないと証明するものがただ一つだけ存在していた。

そう。何よりもはつきりとして。

とぼとぼと森の中を歩きながら、大輔は「んっ」と小さく伸びをした。それからひっそりと、美紗の方を見やる。

「いいの、それ？」

「うん。かまわないよ」

だが美紗は躊躇うことなくはつきりと、そう頷いてきた。ついさっきまでのか弱い美紗とはまるで違う様相。

本当は夢なんじゃないのだろうか？

半信半疑になりながら大輔は掌に爪を食い込ませてみる。しかし残念なことに、そこはすごく痛かった。苦痛の声を洩らさないように唇を噛み締めながら、大輔は痛みと格闘する。

チクシヨウ。これは夢じゃない。

「ねえ、大輔くん」

「んー？ 何」

あー、痛つと呟きながら、大輔は美紗に顔を向けた。すると隣にいる彼女はとても嬉しそうに、にこにこしている。

思わず「何だよ」と言うと、ことさら美紗は楽しげに笑った。

「あのね、さつきはどうもありがと」

さつき、というのは水の神と会った時だろうか。それとも美紗を抑えたあの時？

どちらかはよく解らない。もしかしたら両方なのかもしれない。

結局どつちかもよく解らないままに大輔は「うん」と曖昧な返事をしていた。それでも美紗は、嬉しそうににこにこ笑っている。

そんなやり取りが何だか気恥ずかしくて、大輔は思わず視線を逸らした。足元には多くの陽だまりがふよふよと浮いている。足元の緑は金色にちろちろ光っていて、そこから海にでもつながっているような気がした。

そう。今なら何でもできるような、そんな気がしてならないのだ。

「そうだ、大輔くん」

大きな声をあげると美紗は立ち止まった。大輔も慌てて美紗に倣う。

「何？」

「あのねっ、わたしも言いたいことがあったの」

そう言つと美紗は急に挙動不審になり、あわあわと一人で慌てだす。ちよつと待ってねと美紗が言つと、それからしばらくは一人で何ごとかを呟いていた。

別に言い難いなら、無理しなくってもいいよ。

そう思うが、瞬時に大輔はその言葉を飲み込む。言っちゃいけない。何かがそう思っていてならないのだ。

これから美紗が言おうとすることには、相当の決心がいるのだから。そして美紗は、その決心を今こうして打ち明けようと頑張っている。

水を差しちゃいけない。

そんな思いがあつたから、大輔は口を噤み、美紗の言葉を待ち続けることにしたのだ。

美紗は未だ、何かと葛藤している。だがしばらくしてから「よし」

と小さく呟くと、美紗は改めて大輔のほうへと向き直った。その顔は幾分赤い。

「大輔くん。わたしね」

それは彼の一番望んだ気持ちの形。

水使いになつた彼女の瞳は、今の空のように澄んだ水色をしていてた。

…*…

「オラア、忘れもしたらただじゃおかねえぞ」

耿輔の声に急かされながら、まとめ終えた荷物を部員は各々持つ。そこに広がるのは、徒広いだけの十畳間。女子部屋としていたところには、乾いた畳が嵌め込んである。

仕切り戸も閉めて、布団も上げて。何もかもが来た時と同じだ。

みんなそれぞれ、思うところがあるのだろう。その表情は充実に満ちていても、どこか少しずつ違っていた。

思えばこの六日間で、いろんなことが起こった。

意義あるものだったのかとか、そういうことは正直まだ解らない。多分もつと大人になってから、これは意義のあるものだったかどうかの判断をすることができのさだろう。

でも今の時点で言えば、かなりの収穫があつた六日だと、そう言いきれる。

忙しなくて疲れて、波乱万丈な毎日だった。今思い返したただけでもちよつと疲れてしまう。

けれどこれは確実に、自分に何か大切なものを与えてくれたようにも思えるのだ。

少しだけ大人になれたような気が、しなくもない。

そしてそれは様々なところで、自分への肥やしとなっているのさだろう。

この場所は大輔に、多くのものをもたらしてくれた。

最後の確認を終え、耿輔が玄関の鍵を閉める。カチャツと大きな金属音が耳についた。

木造の小さな世界を、彼らは一度仰ぎ見る。蝉はあの時と変わらず、うるさいほど澄んだ声で鳴いていた。

「うっし。んじゃあ地元に戻るぞ」

真夏の陽光が注ぐ中、耿輔の声が響き渡る。

これから始まる夏休みの扉が、今一度チエックインされた。

終わり。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3546c/>

風の吹く場所

2009年3月24日10時07分発行